岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第466集

和野（わの）ソマナイ遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業関連遺跡発掘調査

岩手県宮古地方振興局農政部農村整備課
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書

第466集 和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書 正誤表

頁数	行数	誤	正
9	2	岩手県移教育委員会	岩手県教育委員会
13	16	２０四方の…	２０m四方の…
15	1	通交可能な状態にして	通行可能な状態にして
42	24	面積約5.5ｍ２である。	面積約5.5㎡である。
56	8	厚さが08～0.9㎝で、	厚さが0.8～0.9㎝で、
65	図中の写植	和野新墾神社跡	和野新墾神社遺跡
91	33右	川又　普	川又　晋

和野（わの）ソマナイ遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業関連遺跡発掘調査

遺跡の全景（西から）　　遺跡の範囲

調査区の近景（真上から）

巻頭カラー１：遺跡

1号土坑

2号陥し穴

11号陥し穴

12号陥し穴

5号陥し穴

巻頭カラー2 ：遺構（中掫テフラの堆積状況）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれその土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、中山間地域総合整備事業鹿踊の郷地区における集落道新設線工事に関連して、平成15年度に発掘調査を行った田野畑村和野ソマナイ遺跡の調査結果をまとめたものであります。和野ソマナイ遺跡は、田野畑村の中央を東流する平井賀川とその支流にはさまれた海岸段丘に立地し、調査の結果、縄文時代早期から晩期の遺構と遺物が発見され、貴重な資料を提供することが出来ました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時にその保護や活用、学術研究、教育活動に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県宮古地方振興局農政部、田野畑村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成16年11月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　合田　武

例　言

1．本報告書は岩手県下閉伊郡田野畑村和野533番地9ほかに所在する和野ソマナイ遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、中山間地域総合整備事業鹿踊の郷地区における集落道新築線改良工事に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県宮古地方振興局農政部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．本遺跡の調査成果は、先に、『現地説明会資料』（平成15年6月21日）、『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成15年度分）』（岩文振第455集）に発表しているが、本書の内容が優先するものである。

4．岩手県遺跡台帳に登録される和野ソマナイ遺跡の遺跡番号と遺跡略号は次のとおりである。

　遺跡番号　ＫＧ22－1355　　遺跡略号　ＷＮＳ－03

5．野外調査の調査面積・期間・担当者は次のとおりである。

　調査面積：2,379㎡

　調査期間：平成15年4月15日～6月30日、調査担当者：阿部勝則・新妻伸也

6．室内整理の期間・担当者は次のとおりである。

　整理期間：平成15年12月1日～平成16年3月31日、整理担当者：阿部勝則・新妻伸也

7．遺物の分析・鑑定にあたっては次の機関に委託した。

　石材鑑定：花崗岩研究会（代表矢内桂三）。

　炭化材樹種鑑定：岩手県木炭協会。

　火山灰の分析：株式会社　古環境研究所。

　放射性炭素年代測定：株式会社　古環境研究所。

8．基準点測量は藤森測量設計株式会社に委託した。

9．空中写真撮影は東邦航空株式会社に委託した。

10．野外での遺構の写真撮影は調査員が行った。室内での遺物の写真撮影は当センターで写真撮影を専門の業務とする期限付職員が担当した。

11．土層の色調観察、土器の色調観察は『新版標準土色帖』1990年版（小山正忠・竹原秀雄編・著；1990）に基づいて行った。

12．本文の一部および図版中で、十和田火山起源の降下火山灰を『火山灰アトラス［日本列島とその周辺］』（町田　洋・新井房夫；1992）に従い、次のような略号を用いて表記した。

　十和田中掫テフラ＝To-Cuテフラ。十和田a降下火山灰＝To-aテフラ。

13．本書で使用した地形図は以下のとおりである。

　国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図「岩泉」（ＮＪ－54－13－1）。

　国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「田野畑」（ＮＪ－54－13－1－1）。

　1万分の1「田野畑村村内の遺跡」。

　5千分の1地形図「田野畑村18－11」。

14．本書で調査時に使用した座標値は世界測地系である。

15．和野ソマナイ遺跡・和野新羅神社遺跡の遺跡範囲については、今回の調査成果をもとに田野畑村教育委員会と協議し、従来把握されていた遺跡範囲を一部修正して掲載している。そのため、田野畑村教育委員

会　2002『田野畑村村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』掲載の第28図（P28）の遺跡範囲とは異なっている。詳しくは本書のⅡ、2．遺跡の立地と周辺の地形・地質と第3図（P5）を参照されたい。

16．発掘・整理・報告にあたっては次の方々に御指導・ご協力いただいた（順不同・敬称略）。

岡田康博（文化庁）、鎌田　勉・日下和寿（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課）、中島喜和男・安達尊伸（田野畑村教育委員会）、田鎖康之（岩泉町教育委員会）、安原　誠（宮古市教育委員会）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）、神原雄一郎（盛岡市教育委員会）、菊池強一（元西和賀高等学校）、佐々木竹夫・関口嘉一・外舘孝夫（地権者）。

17．野外作業は田野畑村の方々が従事した。

18．本報告書の執筆は、Ⅰは、岩手県宮古地方振興局農政部農村整備課に原稿を依頼した。Ⅱ～Ⅲは、新妻伸也、Ⅳ～Ⅵは、阿部勝則・新妻伸也が分担して執筆した。文末に（氏名）を記してある。Ⅶは、分析結果を収録した。報告書の編集・校正は阿部が行った。

19．本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

本 文 目 次

序

例言

抄録

Ⅰ．調査に至る経過…… 1
　1．調査に至る経過…… 1
Ⅱ．遺跡の位置と立地…… 2
　1．遺跡の位置と地理的環境…… 2
　2．遺跡の立地と周辺の地形・地質…… 2
　3．基本土層…… 7
　4．周辺の遺跡…… 8
Ⅲ．調査・整理の方法…… 13
　1．野外調査…… 13
　2．室内整理…… 16
　3．掲載図版等について…… 17
Ⅳ．検出遺構…… 19
　1．検出遺構の概要…… 19
　2．竪穴住居跡…… 19
　3．陥し穴状遺構…… 25
　4．土坑…… 36
　5．焼土遺構…… 38
　6．掘立柱建物跡…… 42
　7．炭窯跡…… 42
　8．遺物包含層…… 44
Ⅴ．出土遺物…… 47
　1．出土遺物の概要…… 47
　2．土器…… 47
　3．石器…… 56
　4．石製品…… 56
　5．植物遺存体…… 56
Ⅵ．まとめ…… 59
　1．遺構…… 59
　2．遺物…… 63
　3．総括…… 63
Ⅶ．分析・鑑定…… 66
　1．放射性炭素年代測定…… 66
　2．火山灰の分析…… 67

表 目 次

第 1 表　周辺の遺跡 …… 9
第 2 表　遺構名変更表 …… 14
第 3 表　竪穴住居跡観察表 …… 20
第 4 表　陥し穴状遺構観察表 …… 29
第 5 表　土坑観察表 …… 38
第 6 表　焼土遺構観察表 …… 38
第 7 表　出土地点別土器重量表 …… 44
第 8 表　土器観察表 …… 49
第 9 表　石器観察表 …… 57
第10表　石製品観察表 …… 57
第11表　炭化種実観察表 …… 57

図 版 目 次

第 1 図　岩手県における遺跡位置図 …… 3
第 2 図　遺跡位置図 …… 4

第 3 図　遺跡周辺の地形図 …… 5
第 4 図　遺跡周辺の地形分類図 …… 6
第 5 図　基本土層図 …… 7
第 6 図　田野畑村・普代村村域と周辺の遺跡
図幅位置図 …… 11
第 7 図　周辺の遺跡 …… 12
第 8 図　グリッド位置図 …… 13
第 9 図　凡例 …… 17
第 10 図　遺構配置図 …… 18
第 11 図　住居跡(1)：1 号竪穴住居跡(1) …… 21
第 12 図　住居跡(2)：1 号竪穴住居跡(2) …… 22
第 13 図　住居跡(3)：2 号竪穴住居跡(1) …… 23
第 14 図　住居跡(4)：2 号竪穴住居跡(2) …… 24
第 15 図　陥し穴(1)：1・2 号陥し穴状遺構 …… 30
第 16 図　陥し穴(2)：3・5 号陥し穴状遺構 …… 31
第 17 図　陥し穴(3)：4・6 号陥し穴状遺構 …… 32
第 18 図　陥し穴(4)：7・8・9 号
陥し穴状遺構…… 33
第 19 図　陥し穴(5)：10・11 号
陥し穴状遺構…… 34
第 20 図　陥し穴(6)：12・13 号
陥し穴状遺構…… 35
第 21 図　土坑(1)：1・2 号土坑…… 39
第 22 図　土坑(2)：3・4・5・6・7 号土坑 …… 40
第 23 図　土坑(3)：8・9・10・11・12 号土坑、
焼土遺構：1 号焼土遺構…… 41
第 24 図　1 号掘立柱建物跡、1 号炭窯跡 …… 43
第 25 図　遺物集中区：ⅡM・ⅡP グリッド … 45
第 26 図　トレンチ位置図・グリッド別出土遺物
重量分布図…… 46
第 27 図　遺構別出土遺物集成図 …… 50
第 28 図　グリッド別出土遺物集成図 …… 51
第 29 図　土器(1) …… 52
第 30 図　土器(2) …… 53
第 31 図　土器(3) …… 54
第 32 図　土器(4) …… 55
第 33 図　石器・石製品 …… 58
第 34 図　遺構の覆土堆積状況集成図 …… 61
第 35 図　炭窯跡の模式図と 1 号炭窯跡 …… 62
第 36 図　集落概念図 …… 65

写真図版目次

巻頭カラー 1：遺跡
巻頭カラー 2：遺構（中掫テフラの堆積状況）
写真図版 1　遺跡(1)：調査区全景 …… 73
写真図版 2　遺跡(2)：調査前風景・基本土層 … 74
写真図版 3　竪穴住居跡(1)：1 号竪穴住居跡… 75
写真図版 4　竪穴住居跡(2)：2 号竪穴住居跡… 76
写真図版 5　陥し穴状遺構(1)：
1～4・6 号陥し穴状遺構 …… 77
写真図版 6　陥し穴状遺構(2)：5・7・8 号
陥し穴状遺構…… 78
写真図版 7　陥し穴状遺構(3)：9・10・12 号
陥し穴状遺構…… 79
写真図版 8　陥し穴状遺構(4)：11・13 号
陥し穴状遺構…… 80
写真図版 9　土坑(1)：1～4 号土坑 …… 81
写真図版 10　土坑(2)：5～8 号土坑 …… 82
写真図版 11　土坑(3)：9～12 号土坑 …… 83
写真図版 12　炭窯跡(1)：1 号炭窯跡(1) …… 84
写真図版 13　炭窯跡(2)：1 号炭窯跡(2)、1 号
掘立柱建物跡、1 号焼土遺構 … 85
写真図版 14　土器(1) …… 86
写真図版 15　土器(2) …… 87
写真図版 16　土器(3) …… 88
写真図版 17　石器(1) …… 89
写真図版 18　石器(2)・石製品 …… 90

報告書抄録

ふりがな	わのそまないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書
副書名	中山間地域総合整備事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第466集
編著者名	阿部勝則・新妻伸也
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下鹿岡11地割185番地　TEL 019-638-9001・9002
発行年月日	西暦　2004年12月24日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
和野ソマナイ遺跡	岩手県下閉伊郡 田野畑村和野 533番地9他	03484	KG22-1355	39度 55分 50秒	141度 54分 10秒	2003.04.15 ～2003.06.30	2,379 m²	中山間地域総合整備事業に関わる緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和野ソマナイ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　2棟	縄文土器（前期～晩期）	陥し穴状遺構の覆土に
			陥し穴状遺構　13基	1箱	To-Cuテフラが堆積する。
			土坑　12基	石器　28点	
			焼土遺構　1基	石製品　1点	
		近代～	掘立柱建物跡　1棟		
			炭窯跡　1基		

Ⅰ．調査に至る経過

1．調査に至る経過

中山間地域総合整備事業鹿踊の郷地区における集落道新堰線改良工事は、田野畑村和野地内の国道45号線と農免農道野場和野線を繋ぐ集落道路L=500mの改良工事であり、平成12年度より実施している中山間地の総合的整備を目的としたものである。

これに係る埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては岩手県宮古地方振興局農政部と岩手県教育委員会の間で協議がなされた。協議の経過は、平成13年6月5日付け「宮地農第446号」により岩手県宮古地方振興局農政部長から田野畑村教育委員会教育長あて中山間地域総合整備事業鹿踊の郷地区にかかわる遺跡の分布調査について依頼があり、平成13年7月5日付け「田教第371-3号」により、当該改良区画に2遺跡（和野ソマナイ遺跡・和野新堰神社遺跡）が存在し、取り扱いについて岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と協議する旨の回答があった。その後、平成14年6月25日付け「宮地農第42-1号」により、岩手県宮古地方振興局農政部長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課長あて当該2遺跡に係る埋蔵文化財事前協議を行い、平成14年7月1日付け「教生第480号」により、2遺跡とも試掘調査が必要である旨の回答があり、平成14年8月27日及び9月6日に試掘調査を実施し、平成14年9月12日付け「教生第822号」により、発掘調査が必要である旨回答し、協議を重ねた。その結果、平成15年3月6日付け「教生第1630号」により、2遺跡の発掘調査は（財）岩手県文化振興事業団の受託事業となった旨の通知があった。これを受け、宮古地方振興局と、（財）岩手県文化振興事業団は、平成15年4月1日付け「宮地農第12-1号」により委託契約を締結し、発掘調査に着手したものである。

（岩手県宮古地方振興局農政部農村整備課）

Ⅱ．遺跡の位置と立地

1．遺跡の位置と地理的環境（第1・2図）

本遺跡の所在する田野畑村は岩手県の沿岸北部に位置し、北は普代村、南西は岩泉町と接し、東は太平洋に面している。面積約 156.19 ㎢、人口 4,520 人（平成 16 年 1 月現在）である。村域の現況は、山地率約 84.5% で、自然に恵まれ、酪農業と水産業を主体とした産業が発達している。年間の平均気温は 10.7℃、降水量は比較的少ない地域で、夏は「やませ」（北東風）の影響により冷涼である。

田野畑村の地形は、西側に北上高地が南北に連なり、その東縁が直接、急崖をなして太平洋に張り出している。村内の海岸段丘は段丘面との比高差が 100m 以上ある明戸川、平井賀川、松前沢、真木沢など西から東に向かって流れる非常に深い谷によりいくつかの段丘に分断されている。海岸部は上記各峡谷の河口付近の湾に面した低地や中位段丘を除けば、海面との比高差が 150m 前後の段丘崖が連なる。「海のアルプス」と呼ばれる断崖絶壁は、北山崎や鵜の巣断崖のような陸中海岸国立公園を代表する景勝地である。

このような地理的特徴から、古くから交通不便な地であったが、昭和 40 年（1965）に国道 45 号が開通し、昭和 59 年（1984）には思惟大橋が架橋され、さらに三陸鉄道北リアス線の開通などにより、交通の便は、現在では大幅に改善されつつある。

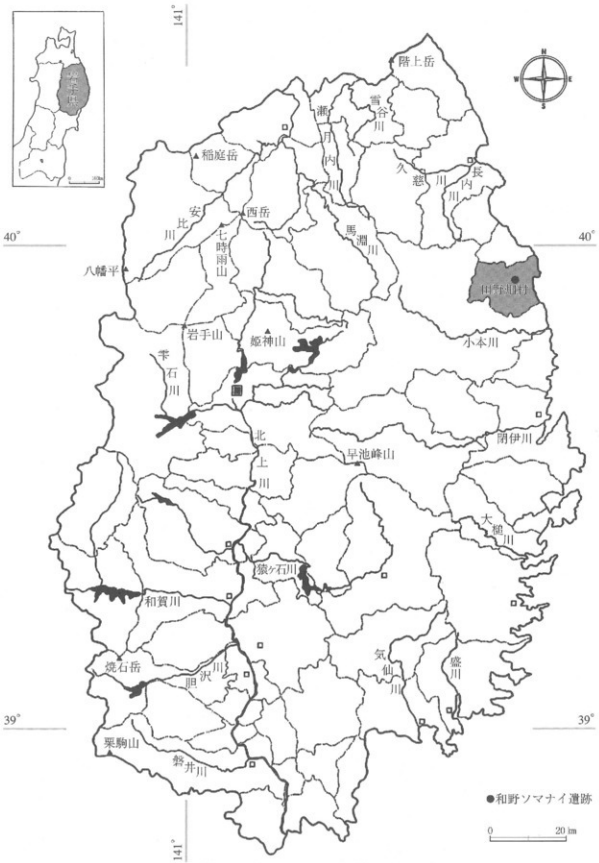
村の成立は、明治 22 年（1889）に田野畑・沼袋・浜岩泉の三村が合併して、現在の田野畑村が制定された。歴史的には、弘化 3 年（1847）、嘉永 6 年（1853）の三閉伊一揆の発祥の地として知られており、田野畑村歴史民俗資料館は、同一揆を中心とした歴史民俗資料を展示している。

和野ソマナイ遺跡は、下閉伊郡田野畑村和野 533 番地 9 他に所在し、田野畑村のほぼ中央にあり、三陸鉄道北リアス線カンパネルラ田野畑駅の南西約 2.8 ㎞、田野畑村役場から南東約 1 ㎞に位置する。海岸線からの直線距離は約 3.5 ㎞である。同地点は北緯 39 度 55 分 50 秒、東経 141 度 54 分 10 秒付近に位置し、国土地理院発行 5 万分の 1 地形図「岩泉」（NJ－54－13－1）、同 2 万 5 千分の 1 地形図「田野畑」（NJ－54－13－1・1）の図幅に属する。

2．遺跡の立地と周辺の地形・地質（第3・4図、写真図版1）

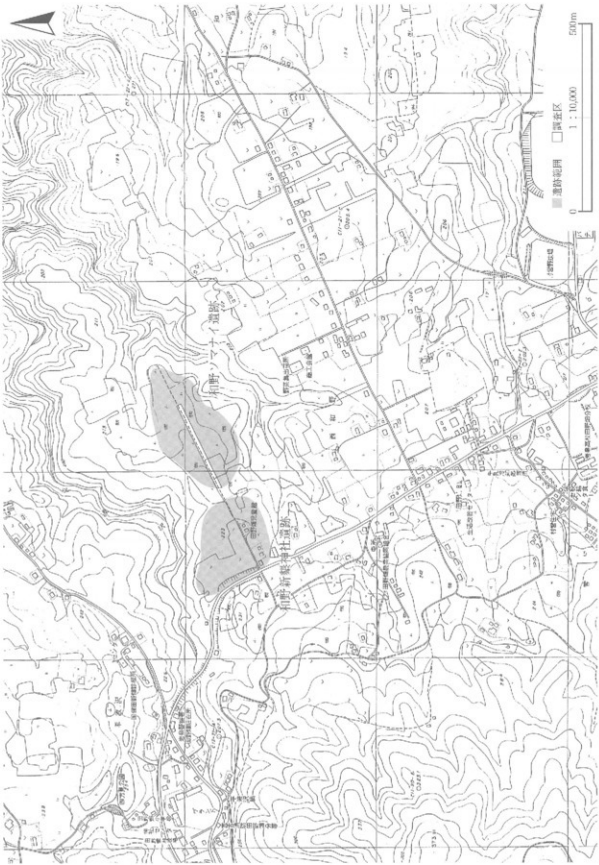
田野畑村は、北上高地の北東部に位置しており、村の西側は、北から野辺山（916m）・明神山（809m）・続石山（592m）・亀山（499m）など標高約 400m ～ 600m の山々が連なっている。その山地・丘陵付近には、少ないながら崖錐性・扇状地性の沖積地がみられ、東側の海岸段丘に至ると概ね東向きの比較的平坦な緩斜面となる。これらの海岸段丘は、東西方向に走る河川により深く開析されて急崖をなし、幅は狭く、河岸段丘・沖積地の発達は少ない。村域の大部分は山地・丘陵地形で、利用できる土地は限られており、現在ある集落は、崖錐性扇状地から海岸段丘に至る地形の変換点に集中する傾向がある。

村内の遺跡の分布を見ると、海岸方向に広がる崖錐性扇状地や海岸段丘に分布する遺跡と、山間部の河川沿いの扇状地性河岸段丘上に分布する遺跡に大別できる。時代毎に遺跡の立地を概観する。遺跡の分布は、縄文時代早期・前期には海岸段丘にあったものが、中期には海岸段丘の高位面から崖錐性扇状地に広がり、後期・晩期には山間部の扇状地や河岸段丘へと広がる傾向がある。概ね時代が新しくなると、海岸段丘を中心とする立地から山地・丘陵地帯にまで遺跡の分布が広がっていく傾向がある（註 1）。一方で、早期・前期から後・晩期にかけて長期にわたって営まれた遺跡の多くは、海岸段丘に立地している。このことは、村域において、海岸段丘を除く他の地形は急斜面が多く、平坦面が極端に狭い地形であることから、集落を営

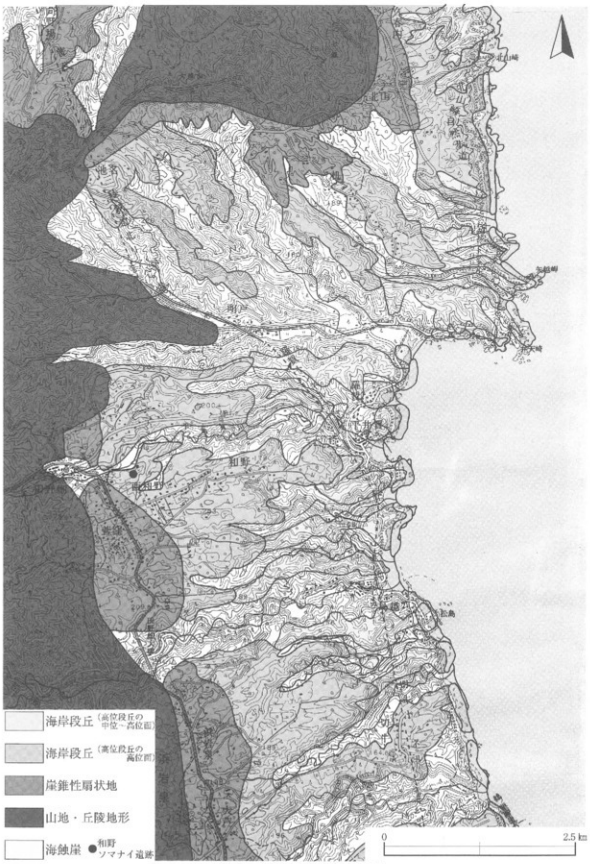


第１図　岩手県における遺跡位置図

第２図　遺跡位置図



第３図　連絡周辺の地形図



第４図　遺跡周辺の地形分類図

むことできる場所が限られていたことを示している。

和野ソマナイ遺跡は、太平洋側に向かって東側に緩く傾斜する海岸段丘上にあり、北側と南側を太平洋に向かって東流する平井賀川とその支流に挟まれた舌状に張り出す段丘面に立地している。南東向きの緩斜面で、標高約 238m ～ 247m。平井賀川との比高は約 69 ～ 77m である。遺跡の範囲は東西約 300m、南北約 200m で、面積 49,639.7 ㎡である。遺跡の現況は山林と畑地である。今回の調査区は中山間地域総合整備事業鹿踊の郷地区集落道新盤線第 3 号の建設道路路線部分 2,379 ㎡である。

3. 基本土層（第 5 図、写真図版 2）

調査区が北東～南西方向に長さ 240m ×幅 8 ～ 10m と細長いことから、西端・西側・中央・東側・東端の 5 箇所で基本土層の確認を行った。地点により若干の差がみられるが、基本土層は次のとおりである。

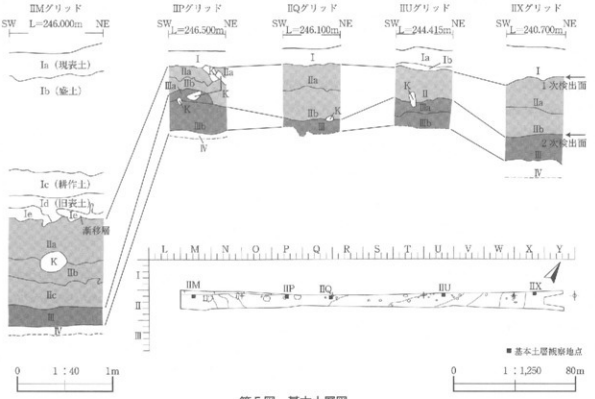
Ⅰ層　10YR2/3　黒褐色　層厚 20 ～ 200 ㎝　シルト　締り肆　現表土（盛土、漸移層含）。

Ⅱ層　10YR4/6　褐　色　層厚 30 ～ 90 ㎝　粘土　締り中　中礫浮石を含む　再堆積層（1 次検出面）。

Ⅲ層　10YR5/6　黄褐色　層厚 20 ～ 40 ㎝　粘土　締り密　地山（2 次検出面）。

Ⅳ層　10YR6/8　礫　層　層厚 20 ㎝以上　基盤層。

遺跡の現況は、北側が畑地、南側が山林で、調査区は農道が通っていた。調査区内の土層の堆積は、現表土・盛土・旧表土あわせて 20 ～ 180 ㎝程あり、東側の表土は調査区中央の表土より 20 ㎝程厚かった。Ⅱ層は、標高の高い西側ほど薄く、標高の低い東側ほど厚く堆積していた。標高の高い西側が他よりも削平を受けているが、大局的に判断して、本遺跡におけるⅡ層の成因は、標高の高い西側から標高の低い東側へと長い時間をかけて再堆積を繰り返した層であると判断した。ことから、今回の調査では、Ⅱ層上位面（1 次検出）・Ⅲ層上位面（2 次検出）の 2 面で検出作業を行い、遺構確認を行っている。



第 5 図　基本土層図

4．周辺の遺跡（第６・７図）

田野畑村内における遺跡調査は、昭和 62 年から早稲田大学文学部考古学研究室と田野畑村教育委員会で調査が行われている館石野Ⅰ遺跡の学術調査と、農村総合整備事業の一環である農業集落大芦線改良舗装事業、公共下水道整備（代行）事業などに関連して、田野畑村教育委員会・（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる緊急発掘調査が行われてきた。村内の遺跡の概要については、『田野畑村村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』（田野畑村教育委員会　2001）、『田野畑村村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』（田野畑村教育委員会　2002）に詳述してあるので、参照していただきたい。ここでは、縄文時代の遺跡を中心に周辺遺跡を概観し、本報告の参考としたい。

田野畑村の遺跡数は、平成 12 年４月時点で 100 カ所であったが、田野畑村教育委員会では、平成 12 年度から４カ年計画で村内の埋蔵文化財分布調査を行っており、平成 13 年時点で 144 遺跡が確認されている（註 2）。時代別では、縄文時代の遺跡がもっとも多い。時期別には早期９遺跡・前期 19 遺跡・中期 23 遺跡・後期 38 遺跡・晩期 33 遺跡である。遺跡数は後・晩期に増加し、分布も海岸段丘から山間部へと拡大する傾向がある（註 3）。縄文時代の遺跡は海岸段丘上に多く分布しており、日当りの良い東向きの緩斜面で、沢が発達し、水資源に恵まれた地点に立地していることがわかる。

過去の主だった調査事例を概観する。昭和 62 年（1987）から平成５年（1993）まで８次調査が行われた館石野Ⅰ遺跡では、列石遺構や縄文時代中期～後期の集落跡が確認されている。館石野Ⅰ遺跡は岩手県指定史跡となっており、現在も田野畑村教育委員会によって継続的に調査が行われている。昭和 63 年（1988）には中机遺跡から縄文時代中期の人面付石製品が出土している。平成７・８年度（1995・1996）に（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、岩埋文）によって調査が行われた浜岩泉Ⅰ遺跡は、縄文時代中期後葉～末葉の集落跡で竪穴住居跡が 41 棟検出された。隣接する浜岩泉Ⅱ遺跡からは、大洞 B2 式のほぼ完形の大型の遮光器Ⅰ個が出土している。平成 10 年に田野畑村教委が調査を行った切牛Ⅱ遺跡では、縄文時代後期の住居跡が検出された。平成 12 年度（2000）に調査した大芦赤空洞遺跡では、縄文時代晩期の竪穴状遺構２棟と配石を伴う土坑 59 基と大洞Ａ式の土器が出土している。

本遺跡周辺では、平成 13 年（2001）（財）岩埋文が調査した和野Ⅰ遺跡があり、縄文時代前期～中期に属する竪穴住居跡３棟が検出され、大木５～７a 式及び円筒下層 c・d 式の土器が出土している（註 4）。本遺跡の西隣には、今年度当センターが調査した和野新樂神社遺跡があり、縄文時代後期前葉の遺物包含層や陥し穴状遺構が確認されている（註 5）。

註

(1) 田野畑村教育委員会　2000『大芦赤空洞遺跡発掘調査報告書』

(2) 田野畑村教育委員会　2002『田野畑村村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』

(3) 村内の遺跡の多くは、南西部の高位段丘で確認されており、北部・西部に希薄であるが、この状況は、本来的な遺跡の分布ではなく、これまでの分布調査の有無や土地利用の結果であると考えられている。田野畑村教育委員会　2002『田野畑村村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』

(4) （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成 13 年度）』

(5) （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成 15 年度）』

引用・参考文献

岩手県教育委員会　1999『岩手県遺跡台帳』

田野畑村　1985『田野畑村村史Ⅰ』

田野畑村教育委員会　1998『平成Ⅱ遺跡・真木沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第３集

田野畑村教育委員会　2000『大声志内洞遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第５集

田野畑村教育委員会　2001『田野畑村村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』田野畑村文化財調査報告書第６集

田野畑村教育委員会　2002『田野畑村村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』田野畑村文化財調査報告書第８集

早稲田大学文学部考古学研究室・田野畑村　1997「服石野Ⅰ遺跡発掘調査報告書」

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1996『浜岩泉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第276集（以下、岩文振第○集と略す）

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成13年度）』岩文振第397集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2003『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成14年度）』岩文振第423集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成15年度）』岩文振第455集

岩手日報社　2002『岩手年鑑　平成14年度版』

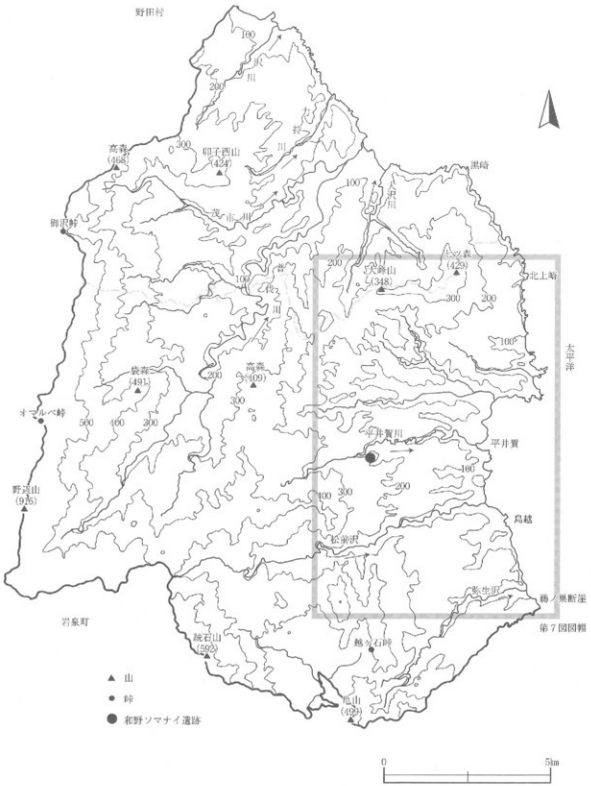
大澤正男・熊谷常正　1990「岩手県田野畑村中杭遺跡の人面付石製品」『岩手考古学』第２号

金子昭彦　1994「岩手県山野畑村浜内泉Ⅱ遺跡出土の遮光器土偶について」『岩手考古学』第３号

第１表　周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代	所在地	備考	遺跡番号
1	久喜内Ⅰ	散布地	縄文（前期～晩期）	久喜内（大強）		KG03-1346
2	久喜内Ⅱ	散布地	縄文（集期）	久喜内（大強）		KG03-1346
3	久喜内Ⅲ	散布地	縄文（中～晩期）・弥生	久喜内（大強）		KG03-1346
4	北山山土沢	散布地	縄文	北山地区（山土沢）		KG03-2217
5	北山	散布地	縄文	北山57付近		KG03-2365
6	北山Ⅱ	散布地	縄文	北山		KG03-2387
7	北山Ⅲ	散布地	縄文	北山		KG03-0316
8	北山Ⅳ	散布地	縄文	北山		KG03-0336
9	机東	散布地	縄文	机		KG03-1344
10	机Ⅰ	集落跡	縄文（早～晩期）	机地区（上机）		KG03-1229
11	机Ⅱ	集落跡	縄文	机地区（上机）		KG03-1229
12	机Ⅲ	散布地	縄文（中～晩期）	机地区（中道）		KG03-1229
13	明戸	散布地	縄文（晩～晩期）	明戸地区（ヘブリ山）		KG03-2313
14	池名Ⅰ	散布地	縄文（前～中・晩期）	池名地区（小中ノ口）		KG03-0050
15	池名Ⅱ	散布地	縄文	池名地区（花ワラビ）		KG03-0050
16	池名Ⅲ	集落跡	縄文	明戸（池名地区）		KG03-2392
17	池名Ⅳ	散布地	縄文	明戸（池名地区）		KG03-0315
18	田野畑チャシ	城郭跡	中世	田野畑地区（加平）		KG22-0238
19	田野畑Ⅰ	散布地	縄文（中～晩期）	田野畑地区（エゾ窪）		KG22-0238
20	田野畑Ⅱ	散布地	縄文	田野畑地区（エゾ窪）		KG22-0238
21	田野畑新田Ⅰ	散布地	縄文	新貝（田野畑地区）		KG22-0325
22	田野畑新田Ⅱ	散布地	縄文	箱貝（田野畑地区）		KG22-0344
23	摩気Ⅰ	散布地	縄文（早・中～後期）	摩気地区（上野場）		KG22-0349
24	箱貝Ⅱ	散布地	縄文	箱貝地区（銚炭海口）		KG22-0349
25	箱貝Ⅲ	散布地	縄文	箱貝地区（銚炭海口）		KG22-0349
26	摩気Ⅳ	散布地	縄文（後期）	摩気地区（キリマセ畔）		KG22-0349
27	平泉沢Ⅱ	散布地	縄文	平泉沢地区（八幡下）		KG22-1243
28	堂屋遺跡	散布地	縄文（晩期）	平泉沢地区（八幡下）		KG22-1243
29	鵜野新熊神社	集落跡	縄文（中～後期）	鵜野		KG22-1262
30	鵜野ソマナイ	散布地	縄文（前～中期）	鵜野		KG23-1355
31	鵜野Ⅱ	集落跡	縄文	鵜野地区（下野場）		KG23-1129

No.	遺跡名	種別	時代	所在地	備考	遺跡番号
32	和野下屋敷	散布地	縄文（前期）	和野		KG23-1162
33	和野Ⅰ	集落跡	縄文（草～晩期）	和野地区（長根）	岩文埋第452集（2004）	KG23-1047
34	西和野Ⅰ	散布地	縄文（早～晩期）	西和野地区（大ゾウリ山）		KG23-1092
35	西和野Ⅱ	散布地	縄文	西和野地区（大ソマナイ）		KG23-1092
36	西和野Ⅲ	集落跡	縄文（後～晩期）	西和野		KG23-2011
37	菅窪遺跡	遺跡	縄文（晩期）	菅窪地区（寝牛山）		KG22-2354
38	菅窪Ⅰ	集落跡	縄文（晩期）	菅窪地区（本道沢）		KG22-2354
39	菅窪Ⅱ	散布地	縄文	菅窪地区（松前沢）		KG22-2354
40	菅窪Ⅲ	散布地	縄文（後期）	菅窪地区（中山）		KG22-2354
41	菅窪Ⅳ	散布地	縄文（後～晩期）	菅窪地区（長根場）		KG22-2354
42	松前沢十文字	散布地	縄文	松前沢		KG33-0010
43	鳥越ⅩⅡ	散布地	縄文	鳥越313		KG33-0099
44	浜岩泉Ⅷ	散布地	縄文	浜岩泉192		KG33-1021
45	浜岩泉Ⅵ	散布地	縄文	浜岩泉192		KG33-1030
46	鳥越ⅩⅢ	散布地	縄文	鳥越326		KG33-1033
47	鳥越ⅩⅠ	散布地	縄文	鳥越353		KG33-1038
48	鳥越Ⅹ	散布地	縄文	鳥越359		KG33-1055
49	鳥越Ⅷ	散布地	縄文	鳥越371		KG33-1077
50	鳥越Ⅶ	散布地	縄文（前期）	鳥越192		KG33-1089
51	鳥越ⅠⅩ	散布地	縄文	鳥越367		KG33-1095
52	浜岩泉Ⅴ	散布地	縄文	浜岩泉		KG33-2003
53	鳥越Ⅲ	集落跡	縄文	鳥越404		KG33-2018
54	鳥越Ⅳ	散布地	縄文	鳥越415		KG33-2110
55	鳥越Ⅴ	集落跡	縄文	鳥越414		KG33-1191
56	鳥越Ⅵ	散布地	縄文	鳥越427		KG33-2102
57	館石野Ⅵ	散布地	縄文（前期）	大芦66ノ2		KG33-1187
58	館石野Ⅴ	散布地	縄文（前期）	鳥越429		KG33-1177
59	館石野Ⅳ	散布地	縄文	鳥越483ノ1		KG33-1157
60	館石野Ⅰ	集落跡	縄文（前～晩期）	鳥越301・11～13、453～457	早稲田大学（1997）	KG33-1139
61	館石野Ⅱ	散布地	縄文	大芦64ノ7		KG33-1260
62	クヅノ崎	散布地	縄文	大芦64ノ3		KG33-1263
63	大芦Ⅲ	集落跡	縄文	大芦65ノ1		KG33-2141
64	鳥越Ⅰ	散布地	縄文	鳥越401ノ1		KG33-2049
65	鳥越Ⅱ	散布地	縄文（中～晩期）	鳥越399ノ1、浜岩泉地区（北野場）		KG33-2047
66	浜岩泉Ⅳ	散布地	縄文	浜岩泉198		KG33-2044
67	大芦Ⅱ	散布地	縄文	鳥越302ノ1～大芦52ノ3		KG33-2078
68	大芦Ⅰ	集落跡	縄文（草～中期）	大芦52ノ3		KG33-2069
69	浜岩泉フケノ沢南	散布地	縄文（中期）	浜岩泉		KG33-2063
70	浜岩泉Ⅲ	集落跡	縄文	大芦14及び字浜岩泉135		KG33-2096
71	大芦赤空洞	土坑群	縄文（前・晩期）、弥生（中期）	大芦52-15・16	田野畑村第5集（2001）	KG33-2191
72	浜岩泉Ⅱ	集落跡	縄文（晩期）	大芦36及び浜岩泉124		KG43-0016
73	浜岩泉Ⅰ	集落跡	縄文（中期）	浜岩泉43ノ1	岩文埋第276集（1996）	KG43-0036
74	真木沢Ⅲ	散布地	縄文	真木沢54ノ6		KG43-0039
75	南大芦Ⅰ	散布地	縄文	南大芦48ノ4	田野畑村第1集（1991）	KG43-0057
76	南大芦Ⅱ	散布地	縄文	浜岩泉46及び南大芦7ノ1		KG43-0066
77	大芦Ⅳ	散布地	縄文	大芦55及び真木沢64		KG33-2241
78	大芦Ⅴ	散布地	縄文	大芦55		KG33-2223
79	大芦Ⅵ	散布地	縄文	大芦55及び真木沢62		KG33-2225
80	大芦Ⅶ	散布地	縄文	大芦55		KG33-2226
81	真木沢Ⅱ	散布地	縄文	真木沢66		KG33-2248
82	切牛Ⅰ	散布地	縄文	切牛		KG33-2320
83	真木沢Ⅰ	集落跡	縄文（草～晩期）、弥生	真木沢54ノ3	田野畑村第3集（1998）	KG33-2332
84	切牛Ⅱ	集落跡	縄文（後～晩期）	真木沢	田野畑村第3集（1998）	KG33-2303
85	切牛Ⅳ	散布地	縄文	切牛137ノ1		KG33-1392
86	切牛Ⅲ	散布地	縄文	切牛154ノ2		KG33-1395
87	切牛Ⅴ	散布地	縄文	切牛134ノ8		KG33-1376
88	切牛Ⅵ	散布地	縄文	切牛114		KG33-1273



第６図　田野畑村・普代村村域と周辺の遺跡図幅位置図

第７図　周辺の遺跡

Ⅲ．調査・整理の方法

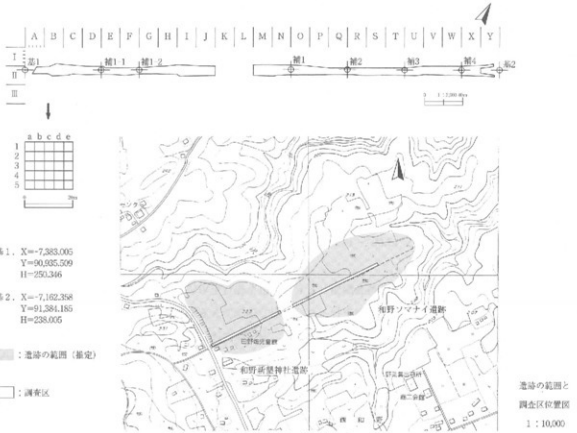
1．野外調査（第8図）

(1) 調査区の設定と遺構の命名

調査区の地区割にあたっては、平面直角座標（第X系）に合わせた基準点1、基準点2を中心にして、南西から北東に延びる調査区に対して直交するメッシュがかかるようにグリッドを設定した。グリッドの設定に際しては、隣接する和野新塁神社遺跡と併せて、長さ500mに及ぶ調査区をカバーするように設定した。設定した基準点の座標は世界測地系で、座標値は以下のとおりである。

基準点1	X=－7,383.005	Y=90,935.509	H=250.346m
基準点2	X=－7,162.358	Y=91,384.185	H=238.002m
補　点1	X=－7,259.442	Y=91,186.767	H=247.191m
補　点2	X=－7,232.964	Y=91,240.608	H=245.822m
補　点3	X=－7,206.488	Y=91,294.449	H=244.579m
補　点4	X=－7,180.010	Y=91,348.291	H=240.963m

この基準点2点・補点4点を基準としてグリッドを設定した。原点（ⅠA）を北西側隅にして、20m四方のグリッドに分割した。20四方のグリッド内にさらに4m四方の小グリッドも設定した。グリッド名は北西から南東に向かってⅠ・Ⅱ・Ⅲ（ローマ数字）…、南西から北東に向かってA・B・C（アルファベット大文字）…とし、さらに小グリッドは北西から南東に向かって1・2・3（アラビア数字）…、南西から北東に向かってa・



第8図　グリッド位置図

第２表　遺構名変更表

No.	旧遺構名	新遺構名	No.	旧遺構名	新遺構名	No.	旧遺構名	新遺構名
1	ⅡO－1号竪穴住居跡	1号竪穴住居跡	11	ⅡV－2号陥し穴状遺構	9号陥し穴状遺構	21	ⅡT－1号土坑	6号土坑
2	ⅡP－1号竪穴住居跡	2号竪穴住居跡	12	ⅡW－1号陥し穴状遺構	10号陥し穴状遺構	22	ⅡU－1号土坑	7号土坑
3	ⅡO－1号陥し穴状遺構	1号陥し穴状遺構	13	ⅡW－2号陥し穴状遺構	11号陥し穴状遺構	23	ⅡU－2号土坑	8号土坑
4	ⅡR－1号陥し穴状遺構	2号陥し穴状遺構	14	ⅡW－3号陥し穴状遺構	12号陥し穴状遺構	24	ⅡU－3号土坑	9号土坑
5	ⅡR－2号陥し穴状遺構	3号陥し穴状遺構	15	ⅡX－1号陥し穴状遺構	13号陥し穴状遺構	25	ⅡU－4号土坑	10号土坑
6	ⅡS－1号陥し穴状遺構	4号陥し穴状遺構	16	ⅡN－1号土坑	1号土坑	26	ⅡU－5号土坑	11号土坑
7	ⅡT－1号陥し穴状遺構	5号陥し穴状遺構	17	ⅡO－1号土坑	2号土坑	27	ⅡW－1号土坑	12号土坑
8	ⅡT－2号陥し穴状遺構	6号陥し穴状遺構	18	ⅡP－1号土坑	3号土坑	28	ⅡS　1号焼土遺構	1号焼土遺構
9	ⅡU－1号陥し穴状遺構	7号陥し穴状遺構	19	ⅡQ－1号土坑	4号土坑	29	ⅡN－1号掘立柱建物跡	1号掘立柱建物跡
10	ⅡV－1号陥し穴状遺構	8号陥し穴状遺構	20	ⅡS－1号土坑	5号土坑	30	ⅡN　1号炭窯跡	1号炭窯跡

b・c（アルファベット小文字）…とした。それぞれの組み合わせでⅠA1a・ⅠB1bグリッドの区画名を付し、区画左上の杭をもって、その区画のグリッド名称を表した。

(2) 遺構の名称

検出された遺構の名称は、検出したグリッド名を付して検出した順にⅡP－1号竪穴住居跡、ⅡU－1号、ⅡU－2号土坑等と命名した。

検出された遺構の名称と数は次のとおりである。

竪穴住居跡２棟、陥し穴状遺構13基、土坑12基、焼土遺構１基、掘立柱建物跡１棟、炭窯跡１基。

整理・報告に際して、遺構名を変更している。旧遺構名と本報告での遺構名の対応関係は、第２表　遺構名変更表のとおりである。

(3) 調査の経過

調査期間は４月15日～６月30日で、作業実働日数は49日であった。作業員の登録人数は、当初20人で始まり、並行して行われた田野畑村教育委員会の調査との調整もあって、月ごとに増減があり、最大33名（５月）、後に22名（６月）で作業を行った。一日の平均稼働作業員数は18.25人ほどであった。以下に調査経過を簡略に記す。

４月15日（火）　資材搬入、調査開始。作業員登録20人。

４月22日（月）　基準点測量（藤森測量設計株式会社）。

５月26日（月）　現地協議（岩手県教育委員会生涯学習文化課・宮古地方振興局農政部）。

６月18日（水）　航空写真撮影（東邦航空）。

６月19日（木）　調査指導（菊池強一氏）。

６月21日（土）　現地説明会：11:00～12:00。見学者33名。

６月24日（火）　終了確認：13:00～14:00。

６月30日（月）　調査終了。

具体的な調査の進行状況を記す。調査開始とともに現道を通行止めにして東側から雑物撤去を行い、地形に応じて任意にトレンチを設定して試掘を行った。現況で確認できる遺構はなく、調査区東側から表土剥ぎを行った。排土は、調査区北側の空き地に仮置きした。表土除去後にⅡ層上面で１次検出を行い、調査区東側で土坑と陥し穴状遺構が数基、西側の高い面では縄文時代の竪穴住居跡、西側の斜面地では、近代の炭窯跡と掘立柱建物跡が検出され、精査を行った。これらの精査の目途が付いた５月中旬以降、調査区全体を、Ⅲ層上面まで下げて２次検出を行い、さらに陥し穴状遺構や土坑などを検出し、精査を行った。

調査は、６月中旬に概ね遺構数が確定し、同18日に航空写真撮影、同21日に現地説明会、同24日に終了確認を受けた。その後、調査終了日まで陥し穴状遺構と土坑などの精査を行った。６月28日～30日は、

調査区域外に仮置きした排土を調査区域内に戻して現況に復旧し、道路は砂利敷して通交可能な状態にして調査を終了した。その後、7月1日から8月5日まで隣接する和野新鯵神社遺跡の調査を行っている。

(4) 粗掘と遺構検出

当初、1m×2mと2m四方のトレンチを地形に応じて任意の場所に入れ、土層の堆積状況を把握した。その結果、表土の厚さは20～30cm程あり、包含する遺物はほとんどないことを確認し、重機により表土除去を行った。遺構検出は人力で行った。遺構の検出は、Ⅱ層が再堆積層であるため、Ⅱ層上面（1次検出）とⅢ層上面（2次検出）で、2回行っている。なお、遺跡の土層の堆積状況と調査方法、特に遺構の検出方法については、現地において、6月19日菊池強一氏により調査指導を受けている。

(5) 精査

検出された遺構は、原則として住居跡と炭窯跡などの大形の遺構の場合は4分法、土坑類は2分法で行った。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行っている。陥し穴の底面で確認された副穴は、径が小さく深いことから、トレンチを設定して断面観察による記録を優先して作成している。

遺構内出土の遺物は、覆土で可能な限り分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。住居跡や集中区の遺物は全点ドットで出土位置を把握している。遺構外出土の遺物については、原則としてグリッドごとに出土した層位を記して取り上げ、適宜に写真撮影・図面作成をしている。

また、現場での記録作成では、上記の図面・写真以外にField・Card（以下F・Cと略す）を使用して、遺跡の調査経過や遺構の精査の進捗状況を記録している。

(6) 土層注記

断面図作成後に土層注記を行った。観察項目は、色調・土性・締まり・混入物などである。基本的には『新版標準土色帳』をもとに行っているが、締まりは、密・やや密・中・やや疎・疎、の5段階で判断した。個々の遺構の覆土堆積状況は、自然か人為かの判断と、堆積している土の起源を把握することを課題とした。層名は調査区内に見られる基本的な土層をローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、遺構内覆土をアラビア数字（1・2・3）で表した。層位の細分の必要が生じた場合は、小文字のアルファベットを付して、Ⅰa・Ⅰb、1a・1b・1cなどと表わした。

(7) 実測・写真撮影

平面実測はグリッドごとに合わせた1mメッシュを基本とした。平面図・断面図の縮尺は竪穴住居跡・土坑類・掘立柱建物跡・炭窯跡は1/20を基本とした。レベルは、基準点をもとに絶対高で測った。

写真撮影は、35㎜モノクロームとカラーリバーサル各1台、モノクローム6×9㎝判1台、補助用としてデジタルカメラ1台を使用した。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを使用した。実際の撮影は各種遺構の覆土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況などについて行っている。調査終了段階でセスナ飛行機による航空写真撮影を行っている。

2．室内整理

室内整理の期間は、平成15年12月1日～平成16年3月31日で、整理に従事した作業員は4名である。

作業は、12月に遺物の注記・仕分け、接合・復元作業、遺構図面の点検・合成等を行った。1月に遺物の選別・実測・観察表の作成を行い、2月に遺物写真撮影・遺構トレース・遺物トレースを行った。3月は図版作成割付・収納を行った。原稿執筆は、これらの作業の指示・点検を行いながら平行して行った。

野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は、室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を行った。

(1) 遺構に関わる記録

実測図は遺構ごとに分類し、図面は点検のうえ、必要なものについては第二原図を作成し、トレースを行った。撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。カラースライドフィルムはスライドファイルに撮影順に収納した。

(2) 遺物の整理

遺物は野外調査時に水洗した。その後、当センター整理室で細片は別として、遺物番号・出土地点・層位等を全破片について注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、遺構ごと、遺構外出土の遺物はグリッドごとに接合・復元作業を行った。遺物の実測図は実大とし、トレースは遺物の状況に応じて実大あるいは縮小して図化した。石材・炭化材・火山灰の分析は外部の専門家に委託した。遺物の写真撮影はセンター内の写真撮影を専門とする期限付職員1名（岩間和幸）が行った。

(3) 遺物の選別・図化の基準

遺物の整理・報告に当っての作業・記録作成は以下の方針で進めた。報告書に掲載された遺物は出土した遺物のすべてではなく、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。以下に選別基準を明示する。また、資料化は図化・写真が全てではない。不掲載資料についても可能な限り数的処理を行い、出土資料全体の傾向を把握するためのデータとした。

a. 土器

はじめに出土地点別に重量計測を行った。土器の接合と並行して、破片資料の選別を進めた。接合した土器については、原則としては計測値（器高・口径・底径）1箇所以上計測可能なもの（器形が把握できるもの）を立体土器として登録し、図化した。破片資料は、優先的に口縁部破片を選択したが、一部に胴部破片・底部破片も選んでいる。そして、該当する土器の型式名を記録して数的処理を行った。底部破片は、底部圧痕・調整が認められる破片を選別して図化した。

b. 石器

石器は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、さらに一部資料について図化を行った。図化の基準は、遺構内出土遺物を優先して図化することにし、それ以外の石器は、観察表・写真を掲載するに留めた。

c. 植物遺存体

炭化した種実1点がある。肉眼鑑定・計測を行い、写真を掲載した。炭化材は鑑定していただいた樹種名を掲載するに留めた。1点については放射性炭素年代測定を行い、分析結果を掲載した。

d. 自然遺物

火山灰がある。分析結果を掲載した。

3．掲載図版等について（第９図）

(1) 掲載図版の構成

図版構成は、遺構・遺物に分けている。遺構図版は、竪穴住居跡・陥し穴状遺構・土坑・焼土遺構・掘立柱建物跡・炭窯跡・遺物包含層の順で種類毎に掲載した。遺物図版は土器・石器・石製品・自然遺物の順に出土遺物の種類毎に図版を作成し、出土地点・層位（上→下）を基準に掲載した。別に出土地点別の遺物集成図も作成している。遺物の掲載番号は、掲載順に連番とし、図版・写真図版とも同一番号とした。掲載遺物にはすべて観察表を付した。観察表内の（　）内の数値は残存値である。

(2) 掲載図版の縮尺

掲載図版の縮尺は以下を原則としたが、一部変更したところもあり、各図にスケール・縮尺を付した。

a. 遺構図版

住居跡の平・断面図 :1/50、炉跡の平・断面図 :1/25、陥し穴状遺構・土坑の平・断面図 :1/40、炭窯跡・掘立柱建物跡の平・断面図 :1/50。

b. 遺物図版

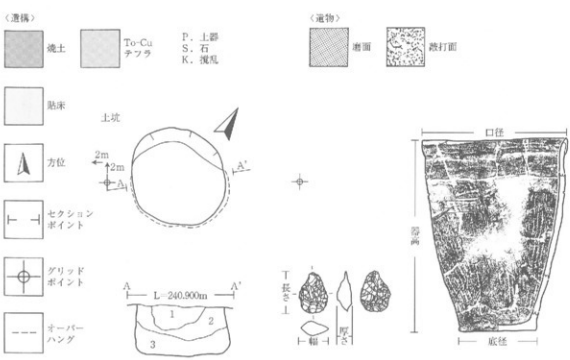
土器 :1/3、剥片石器 :1/2、礫石器 :1/3、石製品 :1/2。

c. 写真図版

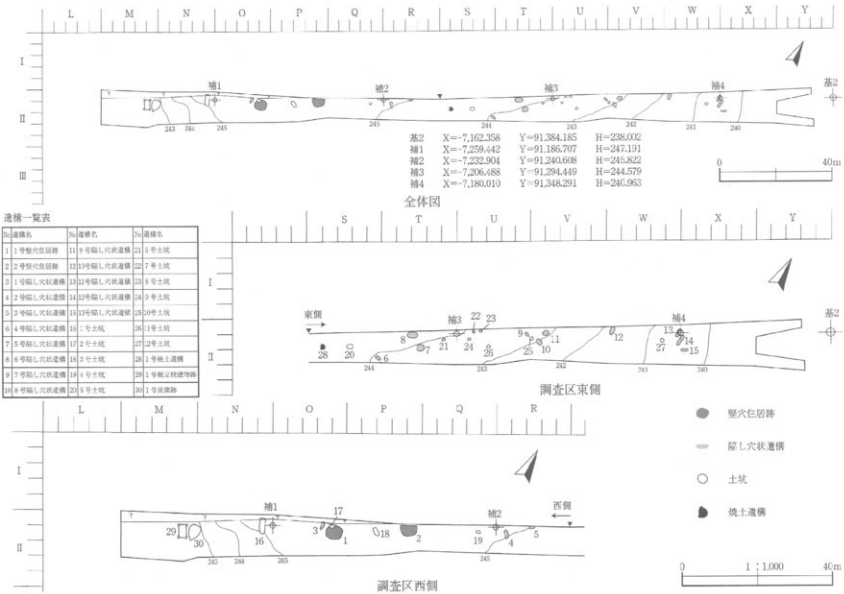
遺構の写真図版の縮尺は不定である。遺物の写真図版の縮尺は、概ね図版と同一縮尺になることを基本として編集したが、一部変更したところもあり、各図に縮尺を付した。

(3) 図版の凡例

図中に使用した記号と網かけの凡例は以下のとおりである。それ以外については、個々の図版毎に凡例を示している。



第９図　凡例



遺構一覧表

No.	遺構名	No.	遺構名	No.	遺構名
1	1号竪穴住居跡	11	9号掘り込み状遺構	21	5号土坑
2	2号竪穴住居跡	12	10号掘り込み状遺構	22	7号土坑
3	1号掘り込み状遺構	13	11号掘り込み状遺構	23	8号土坑
4	2号掘り込み状遺構	14	12号掘り込み状遺構	24	9号土坑
5	3号掘り込み状遺構	15	13号掘り込み状遺構	25	10号土坑
6	4号掘り込み状遺構	16	1号土坑	26	11号土坑
7	5号掘り込み状遺構	17	2号土坑	27	12号土坑
8	6号掘り込み状遺構	18	3号土坑	28	1号焼土遺構
9	7号掘り込み状遺構	19	4号土坑	29	1号掘立柱建物跡
10	8号掘り込み状遺構	20	6号土坑	30	1号炭窯跡

第10図　遺構配置図

Ⅳ．検出遺構

1．検出遺構の概要（第 10 図）

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 2 棟、陥し穴状遺構 13 基、土坑 12 基、焼土遺構 1 基、掘立柱建物跡 1 棟、炭窯跡 1 基、遺物包含層である。

遺構の占地をみると、縄文時代の遺構は、西端にある傾斜地を除く緩斜面にあって、竪穴住居跡は西側の高い向に占地し、陥し穴状遺構は緩斜面に散在する。西端の傾斜地には、近代の掘立柱建物跡と炭窯跡が検出された。以下、遺構毎に詳述する。

2．竪穴住居跡（第 11 ～ 14 図、写真図版 3・4）

1 号竪穴住居跡

遺構（第 11 図、写真図版 3）

〈位置・検出状況〉Ⅱ O2d・Ⅱ O2e グリッド。表土除去時にⅡ層上面で黒褐色土の広がりとして検出したことから住居跡を想定して精査を行った。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉径 4.1 × 3.3m の円形基調で、楕円形である。

〈覆土・堆積状況〉黒褐色土・にぶい黄褐色土を主体とする。

〈壁・床面〉Ⅲ層を掘り込み、壁とする。壁高は 35 ㎝ほどである。床面はⅢ層を掘り込んでいるが、覆土と壁・床の識別が難しく、トレンチ調査をしたが壁・床とも判然としなかった。

〈柱穴〉識別が難しく、確認できなかった。無かった可能性が高い。

〈炉〉地土を掘り下げる段階で、かすかに見える程度の焼土を検出しているが、火床面を住居の床面と認識できず、さらに精査を続行して掘り下げている。出土遺物もこの地点にまとまっており、この焼土が地床炉であったのかもしれない（F・C の記載のみで図面無し）。

遺物（第 12・27・29・33 図、写真図版 14・17）

〈出土状況〉覆土から土器・石器が出土している。覆土中及び住居周辺で確認できた遺物の出土地点を全点把握した。土器片 40 点・石器 6 点である。土器は細片の状態で出土しており、1 破片を 1 点で記録している。平面分布を見る。土器は、壁際寄りに分布するほか、住居北側 1/4 覆土で、まとまって分布する箇所がある。石器は 6 点確認しているが、分布に特に偏りは見られない。断面分布を見る。住居北側 3/4 覆土で、分布する遺物は、床面より 5 ～ 10 ㎝の範囲にまとまって分布する。周辺の壁際から出土した遺物の分布は、床面より 10 ～ 30 ㎝の範囲にあり、壁際ほど高い位置に遺物が分布し、中寄りほど低い位置に遺物が分布している。これらのことは、住居廃絶後に周辺から土が自然に覆われる堆積の過程のなかで遺物が廃棄されたことを示す現象であると判断される。なお、住居北側 1/4 の覆土において遺物がまとまって分布する地点から焼土が確認されている。

〈土器〉1 ～ 5。ほぼ完形の小型深鉢 1 点と底部片 2 点、深鉢の口縁部片 2 点である。総重量 960.12g

〈石器〉楔形石器 :108、不定形石器 :111・112、剥片 :115・116、磨石 :133、・敲石 :135。4 点を図化した。楔形石器は、方形基調の剥片の相対向する二辺に剥離がみられる。不定形石器 2 点は、縦長の剥片の一辺に刃部を形成している。敲石は円礫の両端が使用され、敲打により礫の端部の形状が直線的に変形している。

時期　出土遺物から縄文時代後期初頭と思われる。

2号竪穴住居跡

遺構（第13図、写真図版4）

〈位置・検出状況〉Ⅱ P2d・Ⅱ P2e グリッド。表土直下のⅢ層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。削平を受けているものと思われる。北側が調査区域外になり、想定される全体の南半分を調査した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉検出した範囲は径5mほどで、平面形は円形基調と推定される。

〈覆土・堆積状況〉黒褐色土・暗褐色土・褐色土で構成される。自然堆積と思われるが、覆土中にまとまった焼土や炭化材が多く認められた。覆土西側で床面より20cmほど高い位置で汚れた焼土を2箇所検出した。径70×45cm、径60×45cmの不整形で、厚さ5～8cmである。焼失住居の可能性がある。

〈壁・床面〉Ⅲ層を掘り込み壁・床としている。壁高は最大31cmあって外傾し、床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉PP1～3の3個を検出した。調査区域外にもう1本あるものと想定して、4本柱の配置と推測される。検出された柱穴の大きさは径30～42cm、深さ26～30cmである。覆土は暗褐色土の単層である。

〈炉〉住居南東側に地床炉を検出した。径30×24cmの不整形で、焼土の厚さは最大4cmである。地床炉と壁の間が周囲より若干緩く落ち込む。特に硬く締められている様子は見られない。この落ち込みを炉の付属施設と把握できるなら複式炉系列の炉跡と把握することができるかもしれない。

遺物（第14・27・29・30・33図、写真図版14・15・17・18）

〈出土状況〉覆土から土器・石器・植物遺存体が出土している。覆土中及び住居周辺で確認できた遺物の出土地点を全点（土器片187点、石器10点、植物遺存体1点）把握した。土器は細片の状態で出土しており、1破片を1点で記録している。平面分布は、土器は、住居跡東側にある炉跡の焼土周辺の直上から特に多く出土しており、炉の片寄る東壁際に分布密度が高く、調査区域外の住居中央寄りになるほど分布密度が少ない。石器の分布は、壁際に近いところから出土しており、西壁寄りから剥片石器類、東壁寄りからは礫石器類がまとまって出土している。断面分布は、炉の周辺に分布する遺物は、床面より10cm前後の高さの範囲に分布するが、壁際に近い周辺に分布する遺物は、床面より10～20cm以上高い位置に分布している。このことは、住居廃絶後に周辺から土が覆われる過程のなかで遺物が廃棄されたことを示す現象と判断される。炉の周辺から出土している土器は、壊れて散在し、火床面よりレベルが高く、炉の埋設土器ではない。

〈土器〉6～17。器厚の薄い土器が多い。6・7は同一個体かもしれない。11は、詳細は不明だが、口縁部に縦位の貼付けと横位の刺突を施している。13は略完形の小型深鉢で、底部に木葉痕を持つ。16は補修孔をもつ大形の深鉢である。17a・bは、同一個体の深鉢で、bの拓図は補修孔のみを図化した。総重量4188.54g。

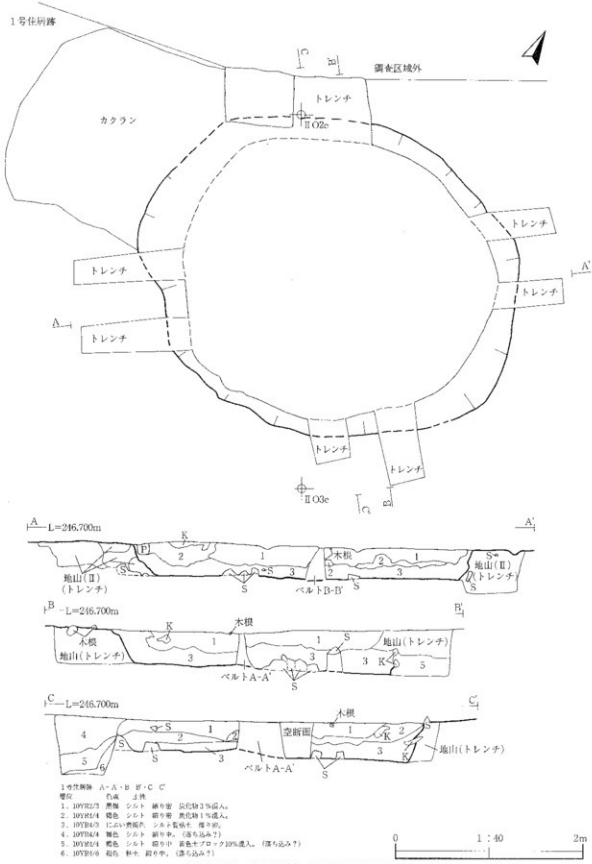
〈石器〉尖頭器状石器:106、楔形石器:109・110、剥片:117～119、磨製石斧の破片:128、磨石:132、凹石:138。尖頭器状石器1点、楔形石器1点、凹石1点の3点を図化した。110は、縦長剥片の長軸方向に相対向する調整がある。138は、棒状を呈する礫の一面に二つの凹みが長軸方向に形成されている。総重量405.4g。

〈植物遺存体〉オニグルミ:151。炭化して欠損している。

時期　遺構の形状と出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

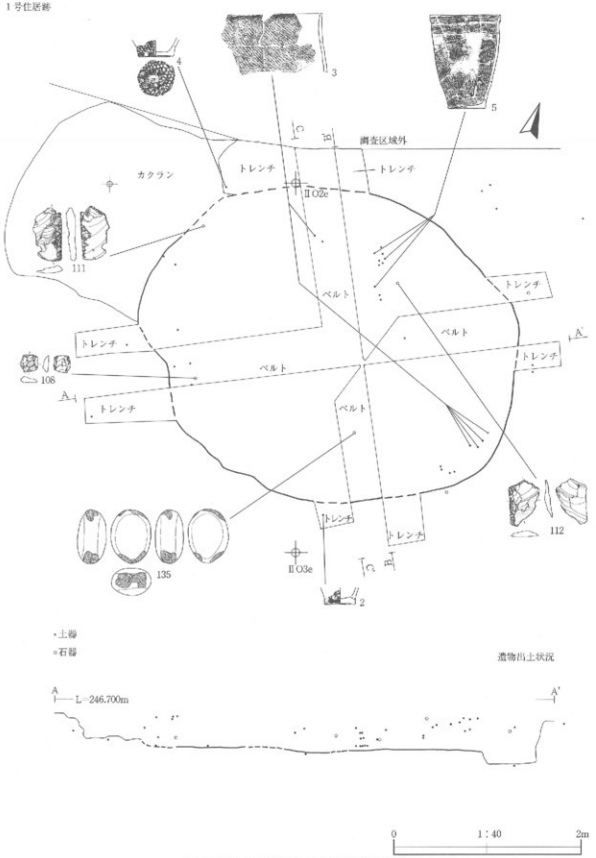
第3表　竪穴住居跡観察表　　（　）内数値：残存値

遺構名	遺構		遺物		位置（グリッド）	住居跡の規模・形態などの特徴					炉の形態・規模などの特徴		焼土の厚さ(cm)	付属施設	主軸方向(長)→(短)	備考	時期
	図版	写図	図版	写図		検出面	床面	平面形	規模（m）	特穴・配置	形態	規模(cm)					
1号竪穴住居跡	14・17	3	12・27 29・33	14・17	Ⅱ U2d Ⅱ O2e	Ⅱ層	Ⅲ層	楕円形	4.1×3.3	なし・不明	地床炉？	–		なし	なし	なし	後期初頭
2号竪穴住居跡	13・14	4	14・27 29・30 33	14・17 18	Ⅱ P2d Ⅱ O2e	Ⅱ層	Ⅲ層	円形？	5.0×2.3	3・不明	地床炉	30×24	4	なし	なし	北側調査区外	後期初頭

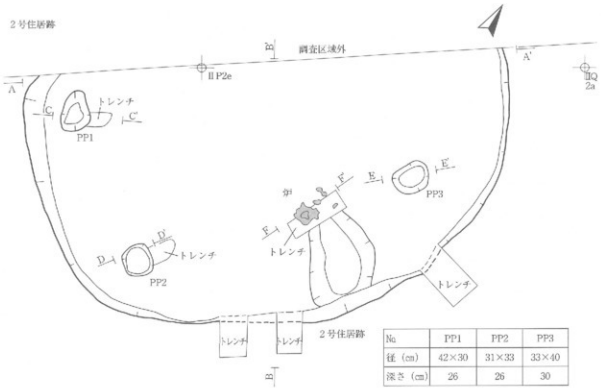


第11図　住居跡(1)：1号竪穴住居跡(1)

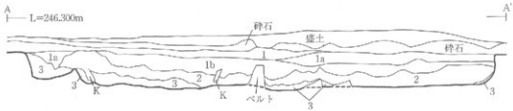
1号住居跡

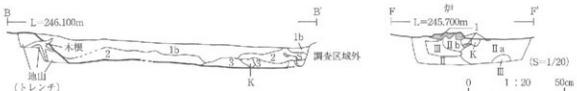


第12図　住居跡(2)：1号竪穴住居跡(2)



No	PP1	PP2	PP3
径（cm）	42×30	31×33	33×40
深さ（cm）	26	26	30





2号住居跡　A－A'・B－B'
層位　色調　土性
1a．10YR2/1　黒色　シルト　締り中。
1b．10YR3/2　黒褐色　シルト　締り中　焼骨粒1％・炭化粒1％混入。
2．10YR3/4　暗褐色　シルト質粘土　締り中　焼骨粒1％混入。
3．10YR3/4　暗色　シルト質粘土　締り弱　焼骨粒1％混入。

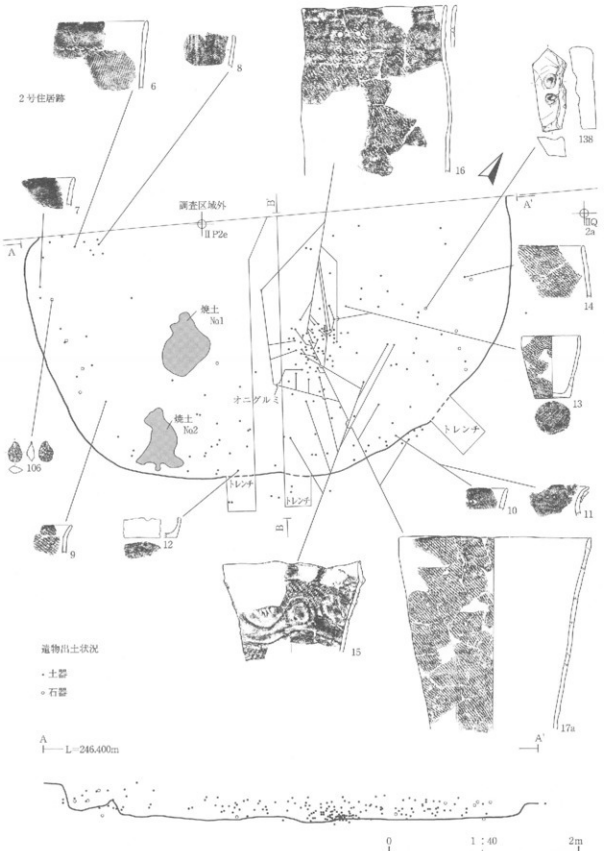
2号住居跡炉－PP　F－F'
層位　色調　土性
1．5YR4/4　にぶい赤褐色　粘土　締り密　ブロック状。

2号住居跡－PP1　C－C'
層位　色調　土性
1．10YR4/6　褐色　シルト質粘土　締り中。
2．10YR4/6　褐色と10YR3/4　暗褐色土の混土　シルト質粘土　締り中　炭化物1％混入。

2号住居跡－PP2　D－D'
層位　色調　土性
1．10YR4/4　褐色　シルト質粘土　締り中　焼骨粒1％・炭化土粒混入。

2号住居跡－PP3　E－E'
層位　色調　土性
1．10YR4/6　褐色　シルト質粘土　締り中　炭化物1％混入。

第13図　住居跡(3)：2号竪穴住居跡(1)



第14図　住居跡(4)：2号竪穴住居跡(2)

3．陥し穴状遺構（第 15 ～ 20 図、写真図版 5 ～ 8）

これまでの他遺跡の調査成果から陥し穴としての用途が考えられることから、いわゆる「陥し穴状遺構」と報告されているものである。今回の調査で、これに類似すると判断した 13 基を陥し穴状遺構として報告する。平面形の内訳は、溝形 10 基、円形 2 基、隅丸長方形 1 基である。出土遺物が無いものが多く、時期の詳細は不明だが、覆土中に十和田中掫テフラ（To-Cu テフラ）が入るものがあり、縄文時代前期前半と推定されるものもある。以下、個々の陥し穴状遺構について詳述する。なお、規模の計測値は、開口部・底部ともに長軸×短軸とし、残存値は（　）内数値で表した。溝形の陥し穴状遺構の断面形の表現は、底面の幅の無いものを V 字状、幅のあるものを U 字状としたが、多分に恣意的である。各陥し穴状遺構の規模・平面形などの計測値・特徴は、第 3 表　陥し穴状遺構観察表に示した。併せて参照されたい。

1 号陥し穴状遺構

遺構（第 15 図、写真図版 5）

〈位置・検出状況〉Ⅱ O1d・Ⅱ O2d グリッド。耕作土直下の 1 次検出において、Ⅲ層で To-Cu テフラを含む暗褐色土の広がりとして検出した。北側は調査区域外である。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉開口部（185）×（70）cm、底部（155）×（20）cmの溝形で、断面形は V 字状で、深さ 105 cmである。

〈覆土・堆積状況〉暗褐色土・褐色土が主体である。覆土の上位にあるⅡ層に To-Cu テフラを含み、陥し穴状遺構の一部を覆っていた。

〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。

〈付属施設〉なし。

遺物（第 27・30 図、写真図版 14）

〈出土状況〉To-Cu テフラを含むⅡ層からの出土である。上下関係は不明である。

〈土器〉18。深鉢の胴部破片が出土している。

時期　検出状況から縄文時代と思われる。

2 号陥し穴状遺構

遺構（第 15 図、写真図版 5）

〈位置・検出状況〉Ⅱ R2c グリッド。2 次検出において、Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。北側は調査区域外である。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉開口部（75）×（120）cm、底部（60）×（60）cmの溝形で、断面形は V 字状で、深さ 105 cmである。

〈覆土・堆積状況〉暗褐色土・黒褐色土・褐色土である。

〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。

〈付属施設〉なし。

遺物　なし。

時期　検出状況から縄文時代と思われる。

3 号陥し穴状遺構

遺構（第 16 図、写真図版 5）
〈位置・検出状況〉Ⅱ R2a グリッド。2 次検出で、Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部 210 × 100 ㎝、底部 165 × 40 ㎝の溝形で、断面形は V 字状で、深さ 65 ㎝である。
〈覆土・堆積状況〉黒褐色土・暗褐色土が主体である。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。
〈付属施設〉なし。
遺物　なし。
時期　検出状況から縄文時代と思われる。　（新妻）

4 号陥し穴状遺構

遺構（第 17 図、写真図版 5）
〈位置・検出状況〉Ⅱ S3e グリッド。2 次検出で、Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。南側の一部が風倒木痕によるに攪乱を受けている。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部 200 × 75 ㎝、底部 165 × 35 ㎝の溝形で、断面形は V 字状で、深さ 80 ㎝である。
〈覆土・堆積状況〉黒褐色土・暗褐色土が主体で、1a 層の黒褐色土中に To-Cu テフラがブロックで入る。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。
〈付属施設〉なし。
遺物　なし。
時期　検出状況から縄文時代と思われる。

5 号陥し穴状遺構

遺構（第 16 図、写真図版 6）
〈位置・検出状況〉Ⅱ T2c・Ⅱ T3c グリッド。1 次検出で、Ⅱ層中で黒褐色土の広がりとして検出した。南側の一部が風倒木痕による攪乱を受けている。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部 200 × 190 ㎝、底部 85 × 80 ㎝の円形で、断面形は逆台形状で、深さ 150 ㎝である。
〈覆土・堆積状況〉黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主体で、3 層黒褐色土の上位に To-Cu テフラ（2 層）がレンズ状に堆積する。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。
〈付属施設〉径 23 × 17 ㎝、深さ 17 ㎝の副穴が底部の中央に 1 個ある。
遺物（第 27・30 図、写真図版 14）
〈出土状況〉116 はⅡ b 層で、陥し穴の周辺からの出土か。115 は西半覆土 1 層、117 は同 1a 層、118 は同 1b 層からの出土である。いずれも To-Cu テフラを覆っている 1 層暗褐色土からの出土である。
〈土器〉19 ～ 22。いずれも色調が橙色の深鉢胴部の小破片で、同一個体の可能性がある。
時期　検出状況と出土遺物から縄文時代前期前半の可能性がある。

6号陥し穴状遺構

遺構（第17図、写真図版5）

〈位置・検出状況〉Ⅱ T2b・Ⅱ T2c グリッド。1次検出で、Ⅲ層上位で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉開口部270×125㎝、底部150×35㎝の溝形で、断面形はU字状で、深さ110㎝である。

〈覆土・堆積状況〉黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土が主体である。

〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。

〈付属施設〉なし。

遺物　なし。

時期　検出状況から縄文時代と思われる。

7号陥し穴状遺構

遺構（第18図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉Ⅱ U2e グリッド。2次検出で、Ⅲ層上位で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉開口部150×54㎝、底部105×15㎝の溝形で、断面形はV字状で、深さ84㎝である。

〈覆土・堆積状況〉黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主体である。

〈壁・底面〉壁はほぼ直立する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。

〈付属施設〉なし。

遺物　なし。

時期　検出状況から縄文時代と思われる。

8号陥し穴状遺構

遺構（第18図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉Ⅱ V2a グリッド。2次検出で、Ⅲ層上位で暗褐色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉開口部175×140㎝、底部120×85㎝の隅丸長方形、断面形はV字状で深さ70㎝である。

〈覆土・堆積状況〉暗褐色土・にぶい黄褐色土が主体である。

〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。

〈付属施設〉径8㎝、深さ18㎝の副穴が底面の中央に1基ある。

遺物　なし。

時期　検出状況から縄文時代と思われる。

9号陥し穴状遺構

遺構（第18図、写真図版7）

〈位置・検出状況〉Ⅱ U1a～Ⅱ V2b グリッド付近。2次検出において、Ⅲ層上位で暗褐色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉開口部 165 × 140 ㎝、底部 80 ㎝の楕円形、断面形は逆台形で、深さ 115 ㎝である。
〈覆土・堆積状況〉暗褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土が主体である。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。
〈付属施設〉径 10 ㎝、深さ 25 ㎝の副穴が底面の中央に 1 個ある。
遺物　なし。
時期　検出状況から縄文時代と思われる。

10 号陥し穴状遺構

遺構（第 19 図、写真図版 7）
〈位置・検出状況〉Ⅱ W1a・Ⅱ W2a グリッド。1 次検出において、Ⅱ層中位で黒色土の広がりとして検出した。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部 175 × 70 ㎝、底部 150 × 40 ㎝の溝形、断面形は U 字状で、深さ 120 ㎝である。
〈覆土・堆積状況〉黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主体である。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。
〈付属施設〉径 10 ㎝？、深さ（18）㎝の副穴が、底面中央にあった可能性があるが、精査時の不手際で明瞭に把握することができなかった。
遺物　なし。
時期　検出状況から縄文時代と思われる。

11 号陥し穴状遺構

遺構（第 19 図、写真図版 8）
〈位置・検出状況〉Ⅱ W1e・Ⅱ W2e グリッド。1 次検出において、Ⅱ層中位で To-Cu テフラを含む黒色土の広がりとして検出した。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部 200 × 100 ㎝、底部 155 × 35 ㎝の溝形、断面形は U 字状で、深さ 115 ㎝である。
〈覆土・堆積状況〉黒色土・褐色土・黄褐色土が主体である。覆土上位の 1 層黒褐色土層中に To-Cu テフラがブロックで入る。同層の火山灰の分析結果（P67）を参照されたい。北半覆土の 1 層出土の炭化材をサンプルして行った放射性炭素年代測定の結果（P66）は、4750 ± 40（補正 C14 年代）である。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。
〈付属施設〉径 12 ㎝、深さ 36 ㎝の副穴が、底面中央に 1 個ある。
遺物　なし。
時期　検出状況と放射性炭素年代測定の結果から、縄文時代中期以降の可能性がある。

12 号陥し穴状遺構

遺構（第 20 図、写真図版 7）
〈位置・検出状況〉Ⅱ W2e・Ⅱ X2a グリッド。2 次検出において、Ⅲ層上位で黒色土の広がりとして検出した。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部 280 × 60 ㎝、底部 180 × 16 ㎝の溝形、断面形は V 字状で、深さ 90 ㎝である。

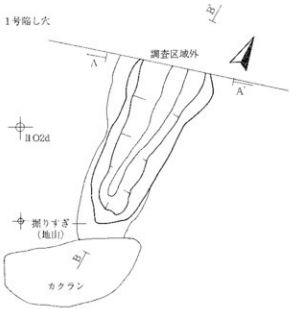
〈覆土・堆積状況〉黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土が主体である。覆土中の3層の暗褐色土層中にTo-Cuテフラが含まれる。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。
〈付属施設〉なし。
遺物　なし。
時期　検出状況から縄文時代の可能性がある。

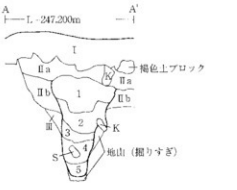
13号陥し穴状遺構

遺構（第20図、写真図版8）
〈位置・検出状況〉Ⅱ X3aグリッド。2次検出において、Ⅲ層上位で黒褐色土の広がりとして検出した。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部215×75㎝、底部180×20㎝の溝形、断面形はV字状で、深さ100㎝である。
〈覆土・堆積状況〉黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主体である。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでいる。
〈付属施設〉なし。
遺物　なし。
時期　検出状況から縄文時代の可能性がある。

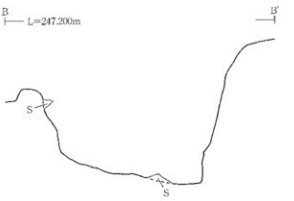
第4表　陥し穴状遺構観察表　　（　）内数値：残存値

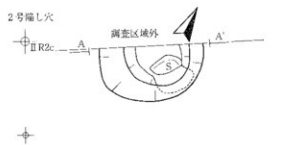
遺構名	遺構		遺物		位置 (グリッド)	組内調	平面形	規模（cm）			堆積状況	副次	出土遺物	備考	時期
	図版	写図	図版	写図				開口部	底部	深さ					
1号陥し穴状遺構	15	5	27・30	14	ⅡO1d ⅡO2d	Ⅲ	（溝形）	(185)×70	(155)×20	105	暗褐色土・暗色土 To-Cu 混入	×	土器：19.37 g	江別窯跡群D地区	縄文
2号陥し穴状遺構	15	5	-	-	ⅡR2c	Ⅲ	（溝形）	(75)×129	(60)×60	105	暗褐色土・黒褐色土・褐色土 To-Cu 混入	×	土器：1.69 g	北東区東側D地区	縄文
3号陥し穴状遺構	16	5	-	-	ⅡR2a	Ⅲ	溝形	210×109	165×40	65	黒褐色土・暗褐色土	×	なし	－	縄文
4号陥し穴状遺構	17	5	-	-	ⅡS3e	Ⅲ	溝形	200×75	165×35	80	黒褐色土・暗褐色土 To-Cu 混入	×	なし	－	縄文
5号陥し穴状遺構	16	6	27・30	14	ⅡT2c ⅡT3c	Ⅱ	円形	200×190	85×80	150	黒褐色土・暗褐色土・褐色土 To-Cu 混入	○	土器：98.23 g	－	縄文前期前半
6号陥し穴状遺構	17	5	-	-	ⅡT2b ⅡT2c	Ⅲ	溝形	270×125	150×35	110	黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土 To-Cu 混入	×	土器：5.72 g	－	縄文
7号陥し穴状遺構	18	6	-	-	ⅡU2e	Ⅲ	溝形	150×54	105×15	84	黒褐色土・暗褐色土・褐色土	×	なし		縄文
8号陥し穴状遺構	18	6	-	-	ⅡV2a	Ⅲ	長楕円形	175×140	120×85	70	暗褐色土・にぶい黄褐色土	×	なし	－	縄文
9号陥し穴状遺構	18	7	-	-	ⅡU1a ⅡV2a	Ⅲ	円形	165×140	80×80	115	黒褐色土・にぶい黄褐色土・ 褐色土	○	なし	－	縄文前期前半?
10号陥し穴状遺構	19	7	-	-	ⅡW1a ⅡW2a	Ⅱ	溝形	175×70	150×40	120	黒色土・暗褐色土・褐色土	○?	なし	－	縄文
11号陥し穴状遺構	19	8	-	-	ⅡW1e ⅡW2a	Ⅲ	溝形	200×100	155×35	115	黒褐色土・褐色土・黄褐色土 To-Cu 混入	○	なし	－	縄文中期?
12号陥し穴状遺構	20	7	-	-	ⅡX2e ⅡX2a	Ⅲ	溝形	280×60	180×16	90	黒褐色土・暗褐灰土・ 黄褐色土　To-Cu 混入	×	なし	－	縄文
13号陥し穴状遺構	20	8	-	-	ⅡX3a	Ⅲ	溝形	215×75	180×20	100	黒褐色土・暗褐灰土・ 黄褐色土	×	なし	－	縄文

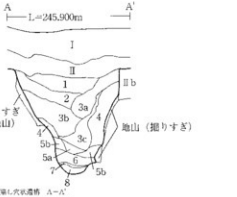




1号陥し穴状遺構　A－A'
層位　色調　土性
1．10YR3/4　暗褐色　シルト　粒うや　ごく少量・炭化物3％混入。
2．10YR4/6　褐色　粘土　粒うや　炭化物1％混入。
3．10YR4/4　褐色と10YR3/4　暗褐色の混土　シルト　粒うや。
4．10YR5/6　黄褐色　粘土　粒うや　炭化物2％混入。
5．10YR3/4　にぶい黄褐色　極ごく少シルト　掘り方　黄色土粒混入。



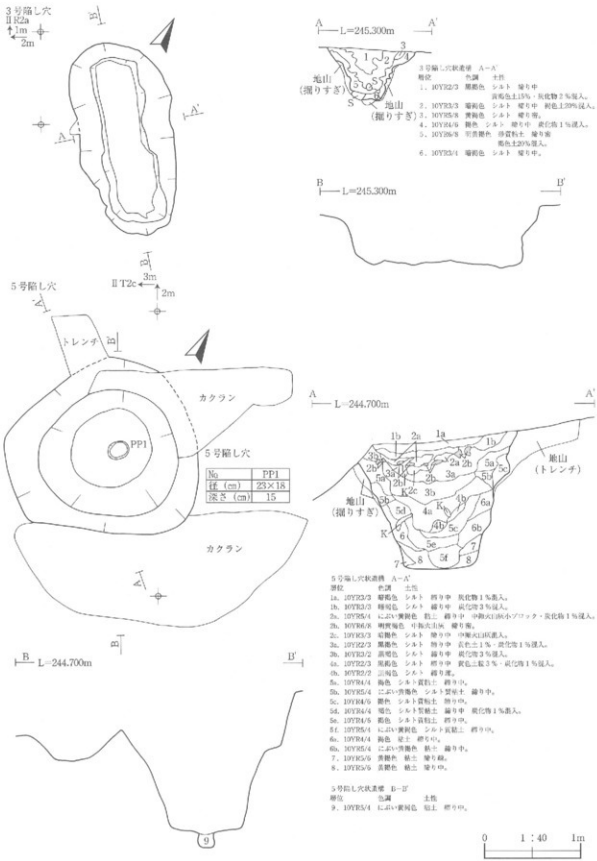




2号陥し穴状遺構　A－A'
層位　色調　土性
1．10YR4/4　褐色　シルト質粘土　粒うや。
2．10YR3/3　暗褐色　シルト　締りや　炭化物1％混入。
3a．10YR2/1　黒色　シルト　締りや　炭化物1％混入。
3b．10YR2/2　黒褐色　シルト　締りや　炭化物1％混入。
3c．10YR2/3　黒褐色　シルト　締りや　褐色土10％・中礫大山沢ブロック混入。
4．10YR5/3　褐色色　シルト　締り中。
5a．10YR4/4　褐色　シルト質粘土　締りやや。
5b．10YR4/6　暗色に10YR5/8　黄褐色の混土　シルト　締り中。
6．10YR1/6　褐色　シルト　締り中　黄色土粒3％混入。
7．10YR5/8　黄褐色　粘土　掘り底。
8．10YR2/2　黒褐色　極ごく少　礫。

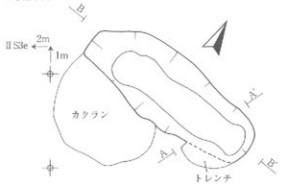
0　1：40　1m

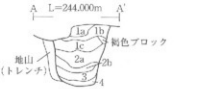
第15図　陥し穴(1)：1・2号陥し穴状遺構



第16図　陥し穴(2)：3・5号陥し穴状遺構

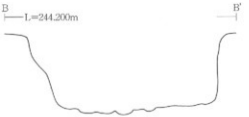
4号陥し穴



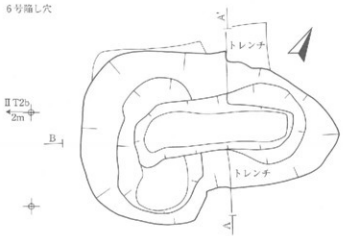


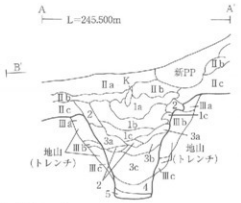
4号陥し穴状遺構 A－A'

層位	色調	土性
1a.	10YR2/2	黒褐色 シルト 締り密 小粒火山灰ブロック混入。
1b.	10YR2/3	黒褐色 シルト 締り弱。
1c.	10YR2/2	黒褐色 シルト 締り密。
2a.	10YR3/4	暗褐色 シルト 締り密。
2b.	10YR3/3	暗褐色 シルト 締り中 褐色土3％混入。
3.	10YR4/6	褐色 シルト質粘土 締り中。
4.	10YR3/4	暗褐色 シルト 締り中。



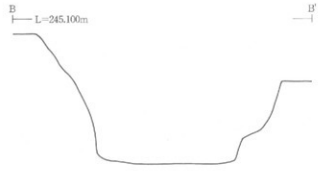
6号陥し穴



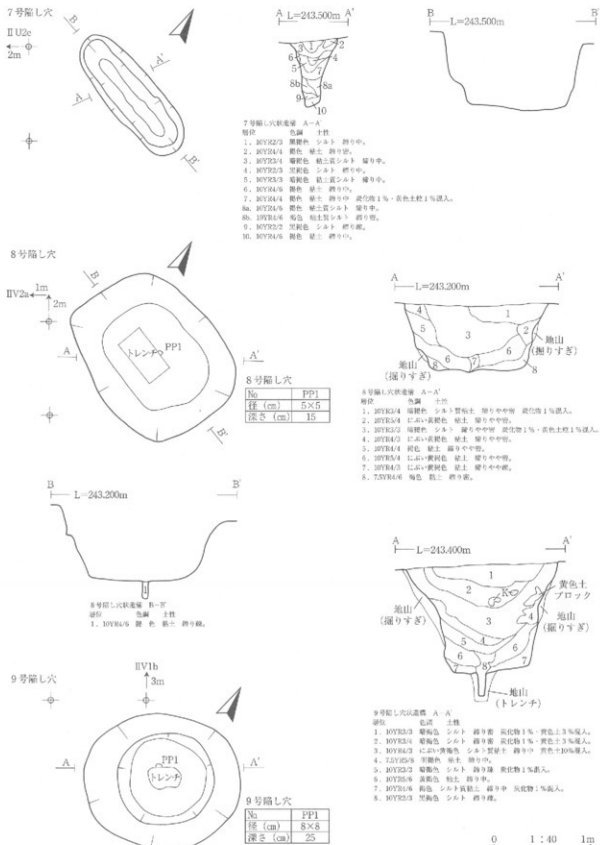


6号陥し穴状遺構 A－A'

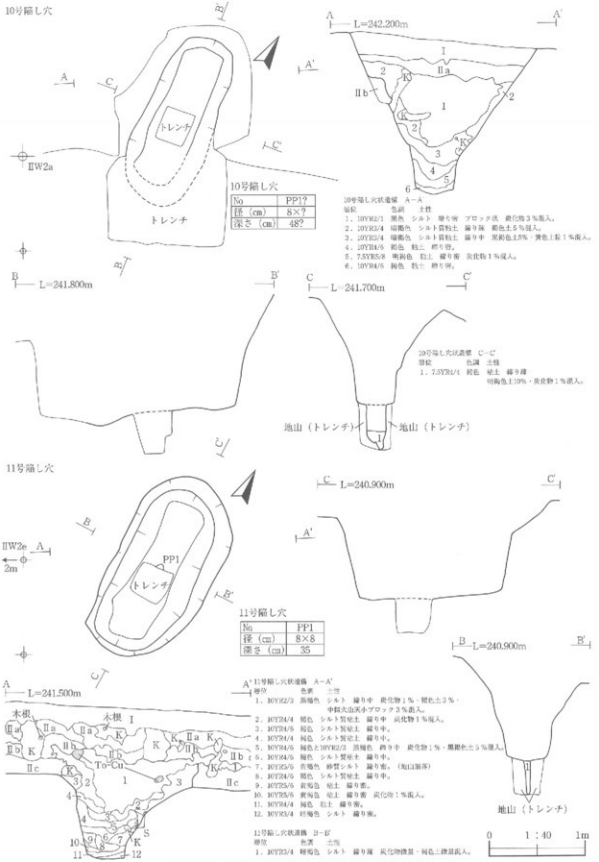
層位	色調	土性
1a.	10YR2/2	黒褐色 シルト 焼け中。
1b.	10YR2/1	黒色 シルト 焼け中。
1c.	10YR2/3	黒褐色 シルト 焼け中 褐色土・暗褐色土・黄色土ブロック混入。
2.	10YR2/1	黒色 シルト 焼け中。
3a.	10YR4/6	褐色 粘土 焼け中。
3b.	10YR4/4	褐色 粘土 焼け中。
3c.	10YR3/4	暗褐色 粘土 焼け中。
4.	10YR5/6	黄褐色 粘土 焼け中。
5.	10YR3/4	暗褐色 シルト 焼け極。



第17図　陥し穴(3)：4・6号陥し穴状遺構

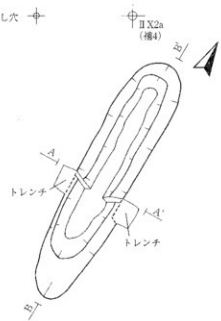


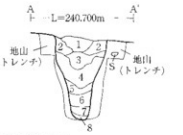
第18図 陥し穴(4)：7・8・9号陥し穴状遺構



第19図 陥し穴(5)：10・11号陥し穴状遺構

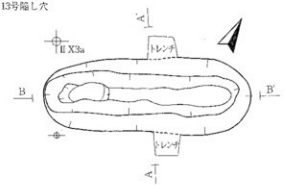
12号陥し穴



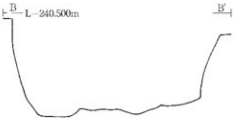


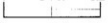
12号陥し穴状遺構　A　A'
層位　色調　土性
1．10YR2/2　黒褐色　シルト　締り弱。
2．10YR4/4　褐　色　粘土　締り強。
3．10YR3/3　暗褐色　シルト　締り普　炭化粒・下臥火山灰1％混入。
4．10YR4/6　褐　色　粘土　締り中　当褐色土5％加入。
5．10YR5/8　黄褐色　粘土　締り中。
6．10YR5/6　黄褐色　粘土　締り中　炭化粒1％混入。
7．10YR3/3　暗褐色　シルト　締り中　黄色土20％加入。
8．10YR5/6　黄褐色　粘土　締り中　黒褐土10％混入。

13号陥し穴



13号陥し穴状遺構　A　A'
層位　色調　土性
1．10YR3/4　褐色　粘土　締り中　炭化粒1％混入。
2．10YR2/2　黒褐色　シルト　締り小　炭化粒1％・黄色土粒1％混入。
3．10YR3/4　暗褐色　粘土　締り中　炭化粒1％・黄色土粒3％混入。
4．10YR4/6　褐色　シルト　締り中。
5．10YR4/6　褐色　粘土　締り中　黒褐色1％混入。
6．10YR5/6　黄褐色　粘土　締り弱。
7．10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土　締り無。





第20図　陥し穴(6)：12・13号陥し穴状遺構

4．土　坑（第 21 ～ 23 図、写真図版 9 ～ 11）

土坑は 12 基検出している。中央より東側の調査区Ⅱ T・Ⅱ U グリッドにおいて確認されたⅡ T-1 号土坑・Ⅱ U - 1 ～ 4 号土坑の 5 基は、1 次検出で表土除去後にⅡ層上面で検出された。Ⅱ層は再堆積層で縄文時代の遺構でⅡ層に覆われていない遺構はない。検出状況と黒褐色土の覆土の状態から時期が新しい（近・現代？）可能性がある。よって上記の 5 基は、計測値などを観察表に記すに留める。ここでは、縄文時代の可能性がある土坑 7 基について詳述する。各土坑の規模・形状などの特徴は、第 4 表　土坑観察表に記した。

1 号土坑

遺構（第 21 図、写真図版 9）

〈位置・検出状況〉Ⅱ N1e・2e グリッド。表土直下の 1 次検出においてⅢ層で礫を含む暗褐色土の広がりとして検出した。北側は調査区域外である。〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉開口部（389）× 130 ㎝、底部（138）× 30 ㎝の溝状で、断面形は V 字状である。深さは 65 ㎝である。

〈覆土・堆積状況〉暗褐色土が主体である。壁土の上位に径 20 ～ 40 ㎝の亜角礫が混入する。土坑が埋没する過程で廃棄されたものである。

〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込んでおり、中央部が凹む。

遺物（第 27・30 図、写真図版 14）

〈出土状況〉2 層から出土している。

〈土器〉23。口縁部の破片である。

時期　縄文土器が出土しているが、時期の詳細は不明である。新しい可能性もある。溝状の遺構の可能性があるが、水が流れていたような痕跡は確認できていない。

2 号土坑

遺構（第 21 図、写真図版 9）

〈位置・検出状況〉Ⅱ O1d・Ⅱ O2e グリッド。2 次検出で 1 号住居跡の精査時に北側で暗褐色土の広がりとして検出した。識別が不明瞭であったためトレンチを入れて、断面で形状を把握している。北側は調査区域外にかかる。〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉開口部 100 ×（45）㎝、底部 93 ×（41）㎝の不整形である。深さは 45 ㎝である。

〈覆土・堆積状況〉暗褐色土が主体である。

〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅣ層を掘り込んでいる。

遺物　なし。

時期　検出面から縄文時代の可能性がある。

3 号土坑

遺構（第 22 図、写真図版 9）

〈位置・検出状況〉Ⅱ P2b・Ⅱ P2c グリッド。2 次検出で、Ⅲ層上面で To-Cu テフラのブロックを含む暗褐色土の広がりとして検出した。〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉開口部 210 × 120 ㎝、底部 154 × 45 ㎝のやや歪な小判形で、深さは 61 ㎝である。

〈覆土・堆積状況〉暗褐色土・褐色土が主体で、覆土上位の暗褐色土の上に To-Cu テフラが堆積する。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込み、緩く湾曲する。
遺物　なし。
時期　検出面と覆土の状態から縄文時代前期前半の可能性がある。

4 号土坑

遺構（第 22 図、写真図版 9）
〈位置・検出状況〉Ⅱ Q2d グリッド。2 次検出でⅢ層上面で褐色土の広がりとして検出した。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部 126 × 110 ㎝、底部 115 × 93 ㎝のやや歪な隅丸方形で、深さは 16 ㎝である。
〈覆土・堆積状況〉褐色土が主体である。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅢ層を掘り込み、ほぼ平坦である。
遺物　なし。
時期　検出面から縄文時代の可能性がある。

5 号土坑

遺構（第 22 図、写真図版 10）
〈位置・検出状況〉Ⅱ S2e グリッド。2 次検出でⅢ層上面で褐色土の広がりとして検出した。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部 155 × 114 ㎝、底部 130 × 93 ㎝の楕円形である。深さは 25 ㎝である。
〈覆土・堆積状況〉暗褐色土が主体である。壁の崩落土か。
〈壁・底面〉壁は外傾する。底面はⅣ層を掘り込み、ほぼ平坦である。
〈付属施設〉径 45 × 25 ㎝、深さ 12 ㎝の副穴を 1 基伴う。
遺物　なし。
時期　検出面から縄文時代の可能性がある。

11 号土坑

遺構（第 23 図、写真図版 11）
〈位置・検出状況〉Ⅱ U2c グリッド。2 次検出でⅢ層上面で褐色土の広がりとして検出した。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部 103 × 101 ㎝、底部 89 × 87 ㎝の円形である。深さは 30 ㎝である。
〈覆土・堆積状況〉褐色土が主体である。壁の崩落土か。
〈壁・底面〉壁はやや内傾して立ち上がる。底面はⅣ層を掘り込み、緩く湾曲する。
遺物　なし。
時期　検出面から縄文時代の可能性がある。

12 号土坑

遺構（第 23 図、写真図版 11）

〈位置・検出状況〉Ⅱ W2d グリッド。2 次検出でⅡ層上面で褐色土の広がりとして検出した。
〈重複関係〉なし。
〈規模・平面形〉開口部 100 × 94 ㎝、底部 105 × 86 ㎝の円形である。深さは 55 ㎝である。
〈埋土・堆積状況〉褐色土・黄褐色土が主体である。壁の崩落土か。
〈壁・底面〉壁はやや内傾して立ち上がる。底面はⅢ層を掘り込み、緩く湾曲する。
遺物　なし。
時期　検出面から縄文時代の可能性がある。

5．焼土遺構（第 23 図、写真図版 13）

1 基検出された。焼土のあり方と周辺の様子から住居跡に伴わない単独の焼土遺構として精査した。

1 号焼土遺構

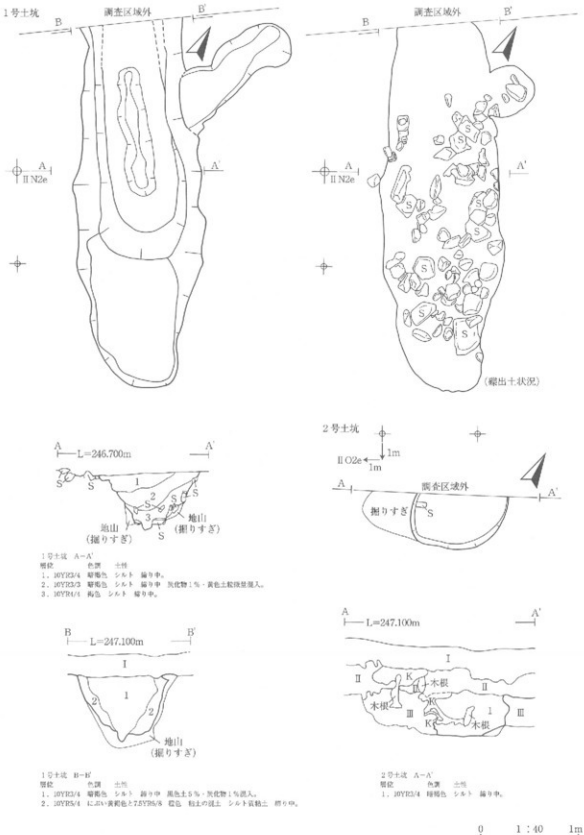
遺構（第 23 図、写真図版 13）
〈位置・検出状況〉Ⅱ S2b グリッド。2 次検出でⅡ層除去後、暗褐色土上で赤褐色の焼土の広がりとして検出された。西側が風倒木痕による攪乱を受けており、Ⅳ層が露出している。
〈重複関係〉なし。
〈規模・形状〉径約 1m の不整形を呈する。赤褐色の焼土の厚さは最大 10 ㎝で、北から南へ傾斜する。焼土の下位に径 1m、深さ 50 ㎝ほどの落ち込みがあり、その落ち込みが 20 ㎝ほど暗褐色土で埋まった後に形成された可能性が高い。
遺物　なし。周辺からは縄文土器が出土している。
時期　検出面から縄文時代の可能性がある。詳細は不明である。

第 5 表　土坑観察表　　（ ）内数値：残存値

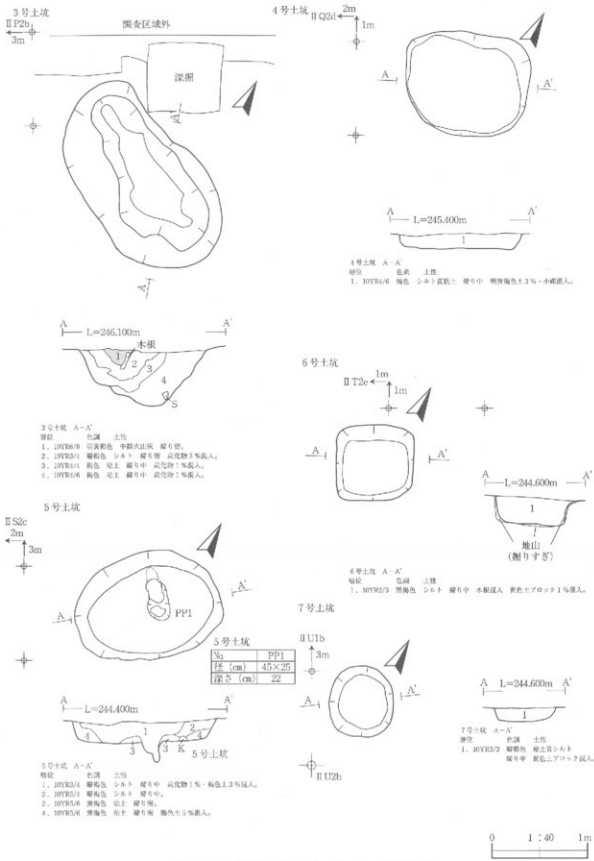
遺構名	図版	写真図版	遺物 図版	遺物 写真図版	位置（グリッド）	検出面	平面形	規模（cm） 開口部	規模（cm） 底部	規模（cm） 深さ	堆積状況	付属施設	出土遺物 土器	出土遺物 石器	備考	時期
1 号土坑	21	9	27・30	14・17	ⅡN1e ⅡN2e	Ⅲ	楕形	(380) × 120	(130) × 30	65	暗褐色土 に近い黄褐色土	×	46.32 g	なし	北側調査区域外	縄文
2 号土坑	21	9	-	-	ⅡO1d ⅡO2e	Ⅲ	不整形	100 × (45)	93 × (41)	45	暗褐色土	×	19.46 g	なし	北側調査区域外	縄文
3 号土坑	22	9	-	-	ⅡP2b ⅡP2c	Ⅲ	小楕形	210 × 120	154 × 45	61	暗褐色土・褐色土 下ローム混入	×	なし	なし	－	縄文
4 号土坑	22	9	-	-	ⅡQ2d	Ⅱ	隅丸方形	126 × 110	115 × 93	16	褐色土	×	なし	なし	－	縄文
5 号土坑	22	10	-	-	ⅡS2e	Ⅱ	楕円形	155 × 114	130 × 93	15	暗褐色土・黄褐色土	○	なし	なし	－	縄文
6 号土坑	22	10	-	-	ⅡT2c	Ⅱ	隅丸方形	82 × 80	67 × 57	34	黒褐色土	×	なし	なし	－	近現代
7 号土坑	22	10	-	-	ⅡU1b	Ⅱ	円形	75 × 70	55 × 50	15	暗褐色土	×	なし	なし		近現代
8 号土坑	23	10	-	-	ⅡU1b	Ⅱ	円形	67 × 66	55 × 48	65	褐色土	×	なし	なし	－	近現代
9 号土坑	23	11	-	-	ⅡU2a	Ⅱ	円形	100 × 95	65 × 55	40	黒褐色土・褐色土	×	なし	なし	－	近現代
10 号土坑	23	11	-	-	ⅡV2a	Ⅱ	隅丸方形	96 × 87	75 × 71	31	暗褐色土・黒褐色土	×	なし	なし	－	近現代
11 号土坑	23	11	-	-	ⅡU2c	Ⅲ	円形	103 × 101	89 × 87	39	褐色土	×	なし	なし		縄文
12 号土坑	23	11	-	-	ⅡW2d	Ⅲ	円形	100 × 94	105 × 86	55	褐色土・黄褐色土	×	なし	なし	－	縄文

第 6 表　焼土遺跡観察表　　（ ）内数値：残存値

遺構名	図版	写真図版	位置（グリッド）	検出面	平面形	規模（cm） 平面	規模（cm） 厚さ	状況	出土遺物	時期
1 号焼土遺構	23	13	Ⅱ S2b	Ⅱ	不整形	105 × 100	10	赤褐色の焼土	縄文土器：6.41g	縄文時代？

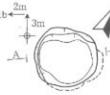


第21図 土坑(1)：1・2号土坑



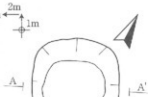
第 22 図　土坑(2)：3・4・5・6・7号土坑

8号土坑　Ⅱ U1b　2m　3m



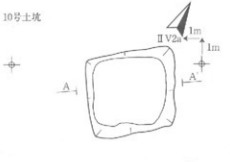
8号土坑　A－A'
層位　色調　土性
1．10YR3/2　黒色　軽土質シルト　締り中　黄色土ブロック・炭化物1％混入。
2．7.5YR4/4　褐色　軽土　詰り中。

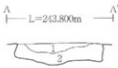
9号土坑　Ⅱ U2a　2m　1m



9号土坑　A－A'
層位　色調　土性
1．10YR2/3　黒褐色　シルト　締り中　炭化物1％混入。
2．7.5YR6/4　鈍色　軽土質シルト　締り中。

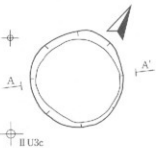
10号土坑　Ⅱ V2a　1m　1m

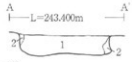




10号土坑　A－A'
層位　色調　土性
1．7.5YR3/3　暗褐色　軽土　締り密　黄色土粒3％・炭化物1％混入。
2．10YR2/3　黒褐色　シルト　締り弱　炭化物1％混入。

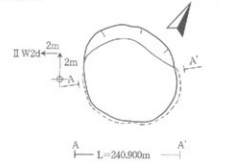
11号土坑　Ⅱ U3c

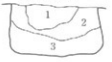




11号土坑　A－A'
層位　色調　土性
1．10YR4/4　褐色　シルト　締り中　炭化物1％・黄色土ブロック1％混入。
2．10YR4/6　褐色と10YR5/6　黄褐色の混土　シルト質粘土　締り中。

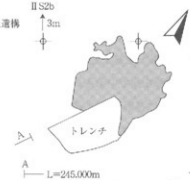
12号土坑　Ⅱ W2d　2m　2m

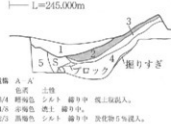




12号土坑　A－A'
層位　色調　土性
1．10YR4/4　褐色　粘土　締り密　炭化物微量・黄色土粒1％混入。
2．10YR4/6　褐色　粘土　締り密。
3．10YR5/6　黄褐色　粘土　締りやや密　褐色土10％混入。

Ⅱ S2b
1号焼土遺構　3m





1号焼土遺構　A－A'
層位　色調　土性
1．10YR3/4　暗褐色　シルト　締り中　焼土塊混入。
2．5YR4/8　赤褐色　焼土　締り中。
3．10YR2/3　黒褐色　シルト　締り中　炭化物5％混入。
4．10YR2/2　暗褐色　シルト　締り中　炭化物1％混入。
5．10YR3/4　暗褐色　シルト　締り中　黄色土ブロック1％・炭化物1％混入。

0　1：40　1m

第23図　土坑(3)：8・9・10・11・12号土坑、焼土遺構：1号焼土遺構

6．掘立柱建物跡（第 24 図、写真図版 13）

1 号掘立柱建物跡

遺構（第 24 図、写真図版 13）

〈位置・検出状況〉Ⅱ M2d・Ⅱ M2e グリッド。南側の緩斜面で、現道の除去後に Ⅲ層で検出した。

〈重複関係〉なし。

〈平面型式・規模〉1 間四方の建物跡で、規模・平面形は 3.5 × 1.8m の長方形である。

〈建物方位〉桁行き方向は N ― 30° ― W で、斜面の地形に対してほぼ平行につくられている。

〈柱穴・柱間寸法〉PP1 ～ PP4 の 4 基が検出された。個々の柱穴の規模は、径 55 ～ 35 ㎝、深さ 48 ～ 60 ㎝である。覆土は、暗褐色土の単層である。柱間は 12 尺・6 尺である。

〈付属施設〉なし。

〈建物の性格〉隣接する炭窯跡に関連する小屋などの施設である可能性がある。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。

7．炭窯跡（第 24 図、写真図版 12・13）

1 号炭窯跡

遺構（第 24 図、写真図版 12・13）

〈位置・検出状況〉Ⅱ M2e・Ⅱ N2a グリッド。南側の緩斜面に構築されている。現道の除去後に Ⅲ層で暗赤褐色の焼土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉開口部径 3.5 × 2.4m、床面径 3.3 × 2.25m、平面形は楕形で、長軸をほぼ南北方向に設定している。面積約 5.54m2 である。

〈覆土・堆積状況〉主に上層と壁の崩落土からなる自然堆積である。覆土中に表土が確認できないことから、壁の上位は削平されているものと判断する。覆の材として使われた萱が炭化した状態で出土している。

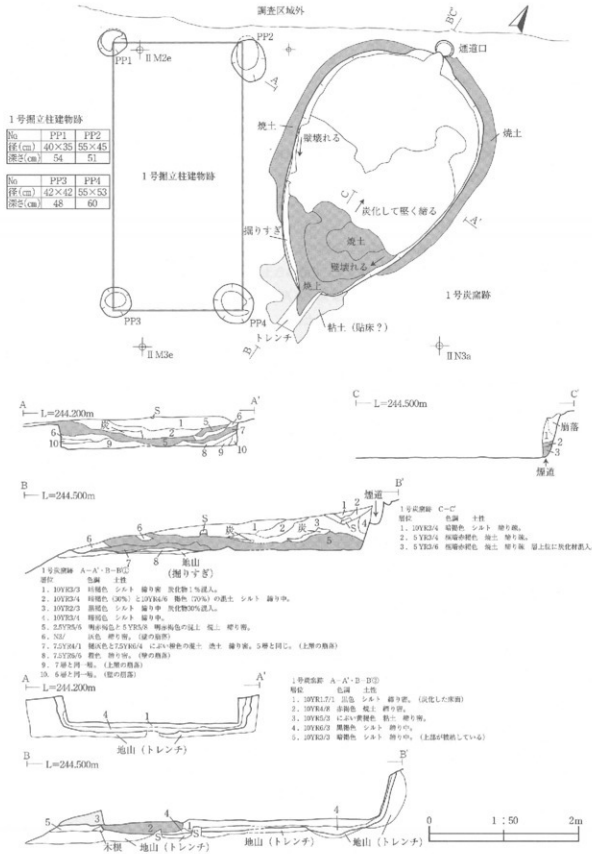
〈壁・底面〉壁は Ⅲ層を掘り込んでおり、ほぼ垂直に立ちあがる。壁高 60 ㎝。底面は Ⅲ層を掘り込んでつくられており、平坦で堅く締まる。煙道側の床面 1/3 は黒く炭化して硬く締まっており、焚口側よりの床面 2/3 は赤く焼土化している。

〈焚口・排煙口・煙道〉焚口は斜面下方の南側、排煙口は斜面上方の北側に設置されている。焚口部は特に施設は残っていない。周辺に黄色土の粘土が貼られていた。煙口は底面より落ち込んでいる形跡はなく、緩やかに上がる。煙道は径 25 ㎝の円形を呈し、深さ 60 ㎝で、斜位に立ちあがっている。

〈その他の付属施設〉煙道側に近い北東側 3/4 で、床面下に幅 75 ㎝、深さ 10 ㎝の落ち込みが壁際に沿っているのを確認した。炭窯以前のものであることは確かである。付属施設となるかは不明である。

遺物　縄文土器片（総重量 4.71g、不掲載）が出土している。混入したものである。

時期　時期を直接示す遺物はない。土地所有者に聞き取りしたところ覚えがないとのことであった。現遺が昭和 16 年（1941）につくられていることから、詳細は不明だが、それ以前のものと判断する。近代。



第 24 図　1号掘立柱建物跡、1号炭窯跡

8. 遺物包含層（第25・26図、写真図版13）

調査区に広く確認されたⅡ層が遺物包含層である。火山灰起源の再堆積層で、調査区西側の高い面（標高145m以上）では薄く、東側の低い方ほど厚く堆積している。高い面は、周囲より削平の度合いも高いが、本来あった再堆積層が東側の低い方へ流れていったものと思われる。Ⅱ層に包含される土器は、東側の低い方では前期の土器、西側に近い高い方では前期の他に後期の土器も出土しており、包含する土器の時期幅が広いことが、再堆積が繰り返された時間幅を示している。土器の出土量の分布をみるとⅡPグリッド付近がもっとも多い。同地点は住居跡が検出された地点で調査区内においてもっとも標高の高い平坦面である。他の斜面地で出土遺物量が少ないことは、居住域が限られていたことを示唆している。以下、遺物が比較的まとまって出土したⅡN・ⅡPグリッドの状況について詳述する。各地点の遺物出土量は第7表　出土地点別土器重量表を参照されたい。

ⅡNグリッドは、南側への緩斜面である。遺物のまとまりを確認したため、周囲を掘り下げて遺構の有無の確認を進めたが、遺構は確認できなかった。Ⅱ層褐色土を掘り下げ中に径50㎝ほどの範囲から5地点にわたり土器が散在して出土した。遺物（図版30、写真図版14・15）〈土器〉24・25。25は大形の深鉢の胴部上半である。波状口縁で、4単位か。出土した土器は、縄文時代後期前葉のものと思われる。

ⅡPグリッド。とくに2c・2dグリッドからまとまって遺物が出土している。同地点は、1号住居跡・2号住居跡の間に位置し、遺物がまとまって出土したことから住居跡を想定して調査したが、住居の痕跡を確認することができなかった。なお、ⅡP2cグリッドでは、3号土坑がⅡ層を掘り下げた後のⅢ層で検出されている。Ⅱ層褐色土を掘り下げ中に土器・石器などの遺物が大きく2箇所から径2mほどの範囲でまとまって出土している。遺物（図版31・32、写真図版15・16）〈出土状況〉〈土器〉30～38。38a・b・cは同一個体であるが、復元できなかったものである。29は縄文時代早期後半か。37・38は後期である。縄文時代早末葉、後期初頭から前葉と時期幅のある土器が混在して出土している。

第7表　出土地点別土器重量表

№	出土地点	重量（g）	率（%）
1	竪穴住居跡	5148.66	34.57
2	陥し穴状遺構	125.01	0.84
3	土坑	65.78	0.44
4	焼土遺構	6.43	0.05
5	炭窯跡	4.71	0.03
6	グリッド	8224.65	55.23
7	トレンチ	841.21	5.65
8	撹乱	371.34	2.49
9	不明	104.78	0.70
	総合計	14892.57	100.00

1号竪穴住居跡

№	出土地点	層位	重量（g）	率（%）
1	1号竪穴住居跡	覆土	960.12	6.44
2	2号竪穴住居跡	覆土	4188.54	28.13
合計			5148.66	34.57

陥し穴状遺構

№	出土地点	層位	重量（g）	率（%）
3	1号陥し穴状遺構	ベルトA-A´ Ⅱ層	19.37	0.13
4	3号陥し穴状遺構	南半覆土黒土上の褐色土	1.69	0.01
5	5号陥し穴状遺構	西半覆土1・2層	98.23	0.67
6	6号陥し穴状遺構	西半覆土上位褐色土層	5.72	0.03
合計			125.01	0.84

土坑

№	出土地点	層位	重量（g）	率（%）
7	1号土坑	北半覆土1層	48.32	0.32
8	2号土坑	ベルトA-A´2・3層	19.46	0.12
合計			65.78	0.44

焼土遺構

№	出土地点	層位	重量（g）	率（%）
9	1号焼土遺構	下位の黒褐土3層	6.43	0.05

炭窯跡

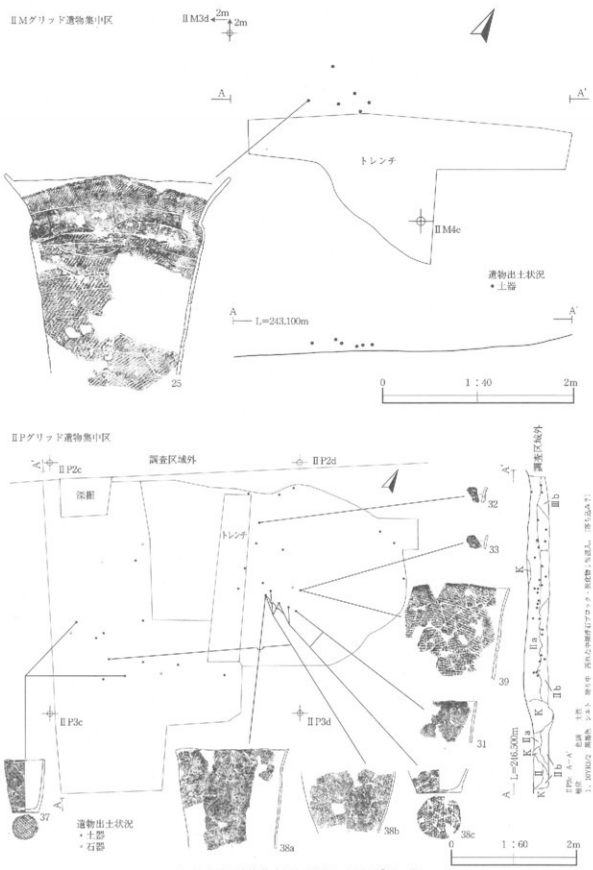
№	出土地点	層位	重量（g）	率（%）
10	1号炭窯跡	覆土上位暗褐土	4.71	0.03

グリッド

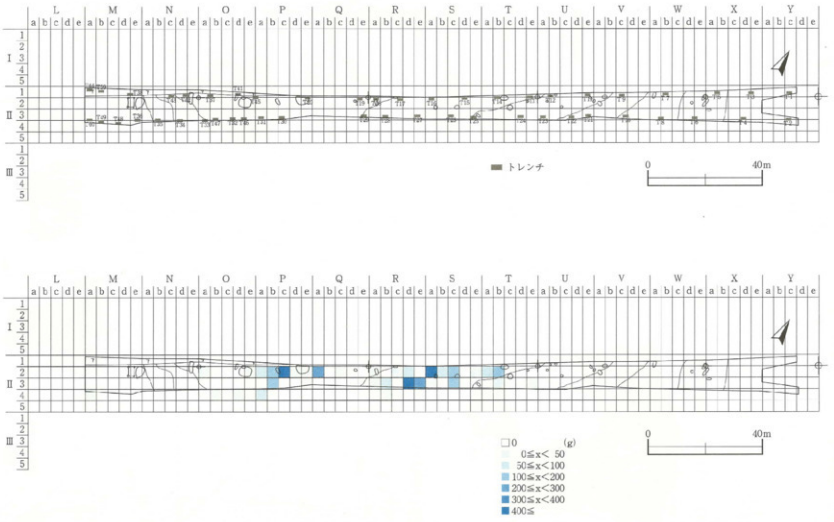
№	出土地点	層位	重量（g）	率（%）
11	ⅡM	Ⅱ・Ⅲ層褐色土	49.66	0.33
12	ⅡN	Ⅱ層褐色土	757.20	5.11
13	ⅡO	Ⅱ層褐色土	752.74	5.08
14	ⅡO2a	Ⅱ層褐色土	34.79	0.23
15	ⅡO2e	Ⅱ層上位	20.38	0.14
16	ⅡP	Ⅱ層褐色土	755.80	5.10
17	ⅡP2a	Ⅱ層褐色土	50.03	0.34
18	ⅡP2b	Ⅱ層下位-20㎝	137.54	0.92
19	ⅡP2c	Ⅱ層	2706.08	18.28
20	ⅡP2d	Ⅱ層	7.39	0.05
21	ⅡP2e	Ⅱ層	48.11	0.32
22	ⅡP3b	Ⅱ層	138.52	0.93
23	ⅡP3e	Ⅱ層	28.95	0.20
24	ⅡQ2a	Ⅱ層	292.65	1.98
25	ⅡQ2c	Ⅱ層	7.39	0.05
26	ⅡQ2c	Ⅱ層褐色土－30㎝	7.33	0.05
27	ⅡR2a	Ⅱ層	15.57	0.11
28	ⅡR2c	Ⅱ層褐色土	12.57	0.08
29	ⅡR2d	Ⅱ層褐色土	88.17	0.60
30	ⅡR3a	Ⅱ層褐色土	3.41	0.02
31	ⅡR3b	Ⅱ層褐色土	450.30	3.04
32	ⅡR3c	Ⅱ層褐色土	256.45	1.73
33	ⅡS2a	Ⅱ層褐色土	423.06	2.85
34	ⅡS2b	Ⅱ層褐色土	52.54	0.36
35	ⅡS2c	Ⅱ層褐色土	172.22	1.16
36	ⅡS2c	Ⅱ層褐色土	24.07	0.16
37	ⅡS3a	Ⅱ層	25.37	0.17
38	ⅡS3c	Ⅱ層褐色土	121.43	0.82
39	ⅡT	Ⅱ層褐色土	435.39	2.94
40	ⅡT2a	Ⅱ層褐色土	96.21	0.65
41	ⅡT2b	Ⅱ層褐色土	118.21	0.80
42	ⅡT3b	Ⅱ層褐色土	26.75	0.18
43	ⅡT3e	Ⅱ層褐色土	3.02	0.02
44	ⅡX	Ⅱ層褐色土	35.38	0.23
合計			8224.65	55.03

トレンチ

№	出土地点	層位	重量（g）	率（%）
45	T2	黒褐土（K層）	106.23	0.72
46	T3	Ⅱ層褐色土層　30㎝	78.23	0.53
47	T4	Ⅱ層褐色	205.53	1.39
48	T13	O層表土	5.66	0.04
49	T15	O層下の黒褐土	9.82	0.06
50	T16	O～Ⅲa層	35.45	0.24
51	T20	Ⅱ～Ⅲa層	50.67	0.34
52	T24	Ⅰ層	61.96	0.41
53	T27	Ⅰ層	78.41	0.53
54	T28	Ⅱ層	4.88	0.03
55	T30	Ⅱ層褐色土	26.14	0.18
56	T31	Ⅱ層褐色土　10㎝	56.77	0.38
57	T32	Ⅱ層褐色土	7.03	0.04
58	T37	Ⅰ層耕作土	39.89	0.26
59	T40	Ⅱ層褐色土	5.40	0.03
60	T42	Ⅰ層（表土）耕作土	26.03	0.18
61	T45	Ⅱ層褐色土	17.36	0.12
62	T46	Ⅲ層褐色土	17.75	0.12
63	T47	Ⅱ層褐色土	8.00	0.05
合計			841.21	5.65



第25図　遺物集中区：ⅡM・ⅡPグリッド



第 26 図　トレンチ位置図・グリッド別出土遺物重量分布図

Ⅴ．出土遺物

1．出土遺物の概要（第 29 ～ 32 図、写真図版 14 ～ 18）

出土遺物は、土器、石器、石製品がある。いずれも量は少ない。総量は大コンテナ（40 × 30 × 30 ㎝）2 箱分である。以下、遺物の種別ごとに詳述する。

2．土器（第 29 ～ 32 図、写真図版 14 ～ 16；1 ～ 60）

(1) 掲載基準について

土器は、重量計測を行った後に接合を行い、口径・器高・底径の計測値のうち 1 箇所以上計測可能なものを立体土器として登録・図化し、掲載した。破片資料はすべて実見し、以下の基準で選別した。掲載資料は、遺物の残存状況が良くないため、部位に関係なく大きさ径 3 ㎝以上のものを選んでいる。底部破片は全て掲載した。掲載した土器はすべて図・写真・観察表を掲載した。個々の土器の文様などの特徴は、第 8 表　土器観察表に記載している。

(2) 観察項目

以下の項目について、観察を行った。

・計測値（器高・口径・底径）※立体土器のみ。　・器種：深鉢・浅鉢・器台・壺・注口・高杯ほか
・器形：口縁部：平縁・波状口縁他。　・文様：各部位の縄文原体と施文方法。
・色調：土色帳に照合する。　・胎土：繊維・礫などの混入の有無。
・内面調整：ミガキ・ナデの有無と方向。　・煤の付着の有無。
・その他：成形の痕跡（輪積痕）、使用の痕跡（補修孔・煮炊の痕跡）など。アスファルト・朱の付着。
・時期：早期から晩期に属する土器が出土している。以下のように大別して時期毎に群を設定し、大局的な時期を示した。本文中の遺構の時期の記載もこれに準じている。（　）内は、同時期に相当すると考えられる既存の土器型式である。

Ⅰ群：早期。Ⅱ群：前期。Ⅲ群：中期。
Ⅳ群：後期、1：初頭（門前）、2：前葉（十腰内Ⅰ）、3：中葉（十腰内Ⅱ・Ⅲ）、4：後葉（十腰内Ⅳ）、5：末葉（十腰内Ⅴ）。
Ⅴ群：晩期、1：前葉（B・BC）、2：中葉（大洞 C1・C2）、3：後葉（大洞 A・A′）。
Ⅵ群：その他、不明のもの。

(3) 概要

総量：コンテナ大（T40：30 × 40 × 30 ㎝）1 箱で、総重量 14,892.57g 出土している。接合・復元作業の結果、掲載した遺物は 60 点である。総量 14,892.57g に対して出土地点別の内訳と重量比をみると、遺構内（※包含層除く）5,350.59g（35.93%）、遺構外 9,541.98g（64.07%）で、遺構内出土土器の内訳は、竪穴住居跡 5,148.66g（34.57%）、陥し穴状遺構 125.01g（0.84%）、土坑 65.78g（0.44%）、焼土遺構 6.43g（0.05%）、遺物包含層 8,224.65g（55.23%）、その他 1,317.33g（8.84%）である。

接合状況：調査精度と整理期間の問題もあり、一概にいえないが、多くは出土した地点もしくは隣接地点（グリッド）で接合は完了している。地点を離れての接合や遺構間で接合した事例はない。原形を保って出土した例はないが、個体単位で出土している例が幾つかある。総じて接合率が低く、土器の残存状況から使用や廃棄の過程を類推することはできなかった。

胎土：時期別で概観すると、中期末葉から後期初頭の土器が多い。前期の土器も認められたが、繊維の混入が明確に認められた土器は1点（58）のみである。中期・後期以降の土器でも、胎土に砂・礫の混入が多く認められており、晩期の土器（47）を除いては、緻密さは感じられない。

内面調整：ナデとミガキがあるが、ナデ調整が多い。内面では口縁部は横位・胴部は縦位に調整されているものが多い。底面は圧痕が残されているものを除いて、ミガキが施されているものが多い。

底面圧痕：網代痕をもつ6点と木葉痕をもつ13点があり、底面に圧痕をもつ土器が多い傾向がある。

輪積痕：内から外に向かって上向きに反るタイプのものが多い。

使用の痕跡：煤の付着が見られた土器が3点（38・47は内面に付着、59は外面に付着）ある。

竪穴住居跡出土の土器

1号住居跡の出土遺物は5点（1～5）掲載した。2号住居跡の出土遺物は12点（6～17）掲載した。16はL縁部が外反せず真っ直ぐ立ち上がる深鉢で、口縁部下3.5㎝の箇所に径0.5㎝の補修孔が一対設けられている。17は地文のみの深鉢で、口縁部に下1.5㎝の箇所に径0.4㎝の補修孔が一対設けられている。

陥し穴状遺構・土坑出土の土器

1･5号陥し穴状遺構の出土遺物を掲載した。1号陥し穴出土遺物の18は縄文のみの破片で、時期不明である。5号陥し穴状遺構出土遺物は4点（19～22）掲載した。深鉢の胴部片でLR縄文が施文されている。同一個体と思われる。色調は橙色である。1号土坑からは23の土器片が1片出土している。いずれも小破片で時期の詳細は不明である。

遺物包含層出土の土器

25は、大形深鉢の土器片で、器壁の剥落、焼けハジケが多くみられる。時期は、後期前葉と思われる。39は、器厚の薄い深鉢で、太めの原体を用いてLR縄文を自在に押圧している。器面整形が指頭圧痕で行われている。胎土に繊維は含まない。時期は早期末葉で、早稲田V類併行期か、赤御堂式の新段階かと思われる。

トレンチ出土の土器

58は、繊維を多量に含み、尖底深鉢の可能性を持つ土器である。器壁が荒れていて、著しく磨滅している。地文は判然としないが、組紐縄文いわゆるピッチリ縄文かもしれない（註1）。原体はr4本L回り組単節と思われる。宮古市千鶏遺跡で類似する資料（千鶏2式）がある（註2）。時期は、縄文時代前期前葉と思われる。

註

（1）高橋　1992、高橋　1993

（2）宮古市教育委員会　1989

引用・参考文献

岩手県立博物館　1982『岩手の土器』

宮古市教育委員会　1989『千鶏遺跡発掘調査報告書』宮古市文化財調査報告書16

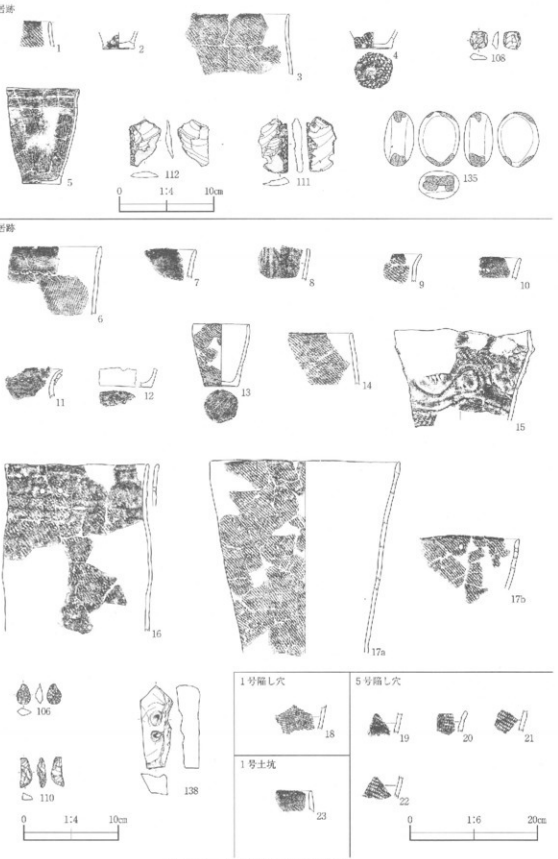
高橋亜貴子　1992「東北地方縄文時代前期前葉組織縄文について」『加藤稔先生還暦記念　東北文化論のための先史歴史学論集』

高橋亜貴子　1993「縄文時代前期に認められる組織縄文」『考古学ジャーナル』No357

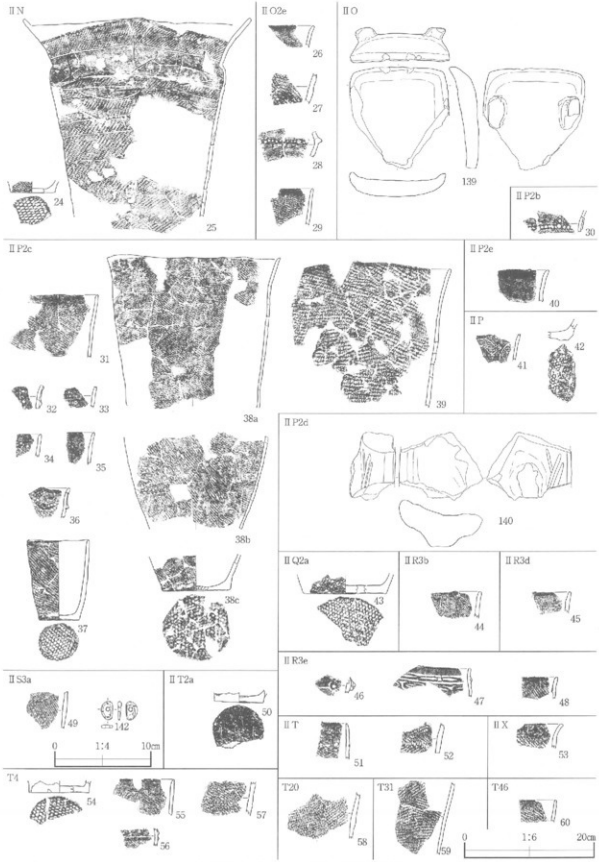
第8表　土器観察表

図版No	挿図No	掲載No	出土地点	層位	器種	文様（原体の特徴）	煤の付着	内面調整	胎土	時期
29	14	1	1号竪穴住居跡	覆土上位	深鉢？	口：L縦	—	N	3	中期
29	14	2	1号竪穴住居跡	南北西覆土3層No 18	深鉢	胴：L縦？　ミニチュア土器		N	2	前～中期
29	14	3	1号竪穴住居跡	P. No 37	深鉢？	口～：LR縦	—	N	4	中期
29	14	4	1号竪穴住居跡	P. No 13	深鉢	底面：網代痕？　胴：LR縦	—	N？	4	前～中期
29	14	5	1号竪穴住居跡	P. No 5	深鉢	口縁：単軸絡第1類L横 頸部：無文、胴部：単軸絡第1類L縦→沈線	—	N	4	後期
29	14	6	2号竪穴住居跡	P. No 4	深鉢？	口：無文、結節（RL）横位、胴：RL縦	—	N	3	後期？
29	14	7	2号竪穴住居跡	P. No 11	深鉢？	口：無文、結節（RL）横位？	—	N	3	後期？
29	14	8	2号竪穴住居跡	P. No 9	深鉢？	胴：LR縦	—	N	4	中期？
29	14	9	2号竪穴住居跡	P. No 19	深鉢？	口～：LR縦	—	N	3	中期？
29	14	10	2号竪穴住居跡	P. No 166	深鉢？	口～：L縦	—	N	3	後期？
29	14	11	2号竪穴住居跡	P. No 166	深鉢？	口：無文	—	N	3	後期？
29	14	12	2号竪穴住居跡	P. No 37	深鉢	胴：不明、底面：網代痕？　焼けハジケ	—	N	4	中期？
29	14	13	2号竪穴住居跡	P. No 46	深鉢	口～：LR横、底面：沈線？　繊維？		N	4	前期
29	14	14	2号竪穴住居跡	P. No 112	深鉢？	口～：L縦	—	N	3	後期？
29	14	15	2号竪穴住居跡	P. No 118	深鉢	口：無文帯、胴上：隆帯貼付＋刻目、RL横　胴下：RL縦	—	N	4	後期
29	14	16	2号竪穴住居跡	P. No 145	深鉢	口：1段Lの圧痕（横位）、胴：L縦1段、補修孔あり。内面焼けハジケ	—	N？	4	後期
30	15	17	2号竪穴住居跡	P. No 64	深鉢	口～：L縦　補修孔あり	—	N	3	後期？
30	14	18	1号陥し穴	Ⅱ層	深鉢？	胴：L縦　内面焼けハジケ、繊維混入		N？	3	前期
30	14	19	5号陥し穴	西半埋土Ⅱb層	深鉢？	胴：LR縦横　内面焼けハジケ	—	N	3	前期？
30	14	20	5号陥し穴	西半覆土1層	深鉢？	胴：LR縦　内面焼けハジケ	—	N？	3	前期？
30	14	21	5号陥し穴	西半覆土1a層	深鉢？	胴：LR縦　内面焼けハジケ	—	？	3	前期？
30	14	22	5号陥し穴	西半覆土b層	深鉢？	胴：LR縦　内面焼けハジケ	—	？	3	前期？
30	14	23	1号土坑	北半覆土	深鉢？	口：LR縦	·	N	3	中期
30	14	24	Ⅱ N	Ⅱ層	深鉢	底面：網代痕、胴：LR縦　繊維混入。		N	3	前期
30	15	25	Ⅱ N ・Pit16	Ⅱ層	深鉢	口唇：LR横、胴：LR横→沈線、横区画が上で刻目が入る。内面焼けハジケ	—	N	4	後期中葉
31	15	26	Ⅱ O 2e	北側Ⅱ層　P. No 33	深鉢？	口：刺突、胴：LR縦	—	N	3	中期末葉
31	15	27	Ⅱ O 2e	東北側Ⅱ層　P. No 30	深鉢？	胴：LR縦	—	？	4	中期？
31	15	28	Ⅱ O	Ⅱ層 褐色土道路北側、北	深鉢？	口：隆帯＋刺突（直）	—	N	3	後期初頭
31	15	29	Ⅱ O	Ⅱ層 褐色土道路北側、南②	深鉢？	口：L縦	—	N	3	中期後葉
31	15	30	Ⅱ P 2b	Ⅰ層 T3	深鉢	32と接合、口：隆帯＋刺突（直）、胴：L縦		N	3	後期初頭
31	16	31	Ⅱ P 2c	Ⅱ層下位 P. No 4	深鉢？	口：LR縦、胴：LR横LR	—	N	4	前期前半
31	16	32	Ⅱ P 2c	Ⅱ層 P. No 8	深鉢？	胴：隆帯＋刺突（直）※30と同一個体？	—	N	3	後期初頭
31	16	33	Ⅱ P 2c	Ⅱ層 P. No 6	深鉢？	胴：LR縦？磨滅著しい。	—	N	4	？
31	16	34	Ⅱ P 2c	Ⅱ層	深鉢	口：結節（RL？）横、L？縦	—	N？	4	中期？
31	16	35	Ⅱ P 2c	Ⅱ層	深鉢	口：L縦	· ·	N	4	前期？
31	16	36	Ⅱ P 2c	Ⅱ層 遺物出中区、北東1/4	深鉢	口：隆帯＋刺突（直）、胴：LR縦横　内面焼けハジケあり		N	4	後期初頭
31	16	37	Ⅱ P 2c	Ⅱ層上位 P. No 17		口～：LR縦、底面：網代痕	—	N	4	後期？
31	15	38a	Ⅱ P 2c	Ⅱ層 P. No 2	深鉢	口～胴部：LR縦　※38a・b・c同一個体	—	N	3	後期
31	15	38b	Ⅱ P 2c	Ⅱ層 P. No 3	深鉢	口～胴部：LR縦　金雲母　※38a・b・c同一個体	—	N	3	後期
31	15	38c	Ⅱ P 2c	Ⅱ層	深鉢	口～胴部：LR縦、底部：網代痕　※38a・b・c同一個体	○	N	3	後期
32	16	39	Ⅱ P 2c	Ⅱ層	深鉢	口：LR縦横	—	N	4	前期？
32	16	40	Ⅱ P 2e	P. No 158	深鉢？	口：隆帯、刺突（斜）		N	3	後期初頭
32	16	41	Ⅱ P	褐色土層	深鉢？	胴：沈線、LR？充填縄文	—	N	3	中期
32	16	42	Ⅱ P	Ⅱ層 褐色土層	深鉢？	底面：網代痕　繊維	—	N？	4	前期
32	16	43	Ⅱ Q 2a	P. No 4	深鉢	胴部：RL縦？、底面：網代痕　繊維	—	N	4	前期
32	16	44	Ⅱ R 3b	Ⅱ層	深鉢？	口：L結節	—	N？	4	中期？
32	16	45	Ⅱ R 3d	Ⅰ層	深鉢？	口：無文　金雲母	—	N	3	中期？
32	16	46	Ⅱ R 3e	Ⅱ層	深鉢？	胴：隆帯＋貼付（円文）　朱付着		N	3	中期？
32	16	47	Ⅱ R 3e	Ⅱ層	鉢？	胴：LR横→沈線＋貼付	○	N	1	晩期
32	16	48	Ⅱ R 3c	Ⅱ層	深鉢？	口：L縦	—	N	2	前期？
32	16	49	Ⅱ S 3a	Ⅱ層 P. No 1	深鉢？	胴：LR縦、縄目小さい。　内面焼けハジケ	—	N？	4	後～晩期
32	16	50	Ⅱ T 2a	Ⅱ層	深鉢	胴：RL縦、底面：木葉痕	—	N	3	中～後期
32	16	51	Ⅱ T	Ⅱ層	深鉢？	口：無文、刺突？　胴：RL縦横	—	N	4	中末～後初
32	16	52	Ⅱ T	Ⅱ層	深鉢？	胴：結束1（RL+LR）横		N？	2	前期？
32	16	53	Ⅱ X	Ⅰ層下位	深鉢？	口：LR縦	·	N？	4	中期？
32	16	54	T4（Ⅱ X3d）	Ⅱ層	深鉢	底面：網代痕	—	N	2	前～中期？
32	16	55	T4（Ⅱ X3d）	Ⅱ層	深鉢？	口：無文、胴：LR縦横　褐鉄鉱付着	—	N	4	前期？
32	16	56	T4（Ⅱ X3d）	Ⅱ層	深鉢？	胴：沈線＋貼付、隆帯、LR縦	—	N	3	後期？
32	16	57	T4（Ⅱ X3d）	Ⅱ層	深鉢	胴：LR縦　内面焼けハジケ	—	？	4	前期？
32	16	58	T20（Ⅱ P1e）	Ⅲa層	深鉢？	胴：RL横　繊維多量に含む	—	？	4	前期前葉
32	16	59	T31（Ⅱ P3a）	Ⅱ層	深鉢？	胴：LR縦横	●	N	3	前期？
32	16	60	T46（Ⅱ O3d）	Ⅱ層	深鉢？	口：L縦	—	N	3	前期？

凡例
部位名称、口唇：口唇部、口：口縁部、頸：頸部、胴：胴部、底：底部。
文様、原体側圧：原体側面圧痕、絡条体圧：絡条体圧痕、
　　単軸絡：単軸絡条体、多軸絡：多軸絡条体、半竹：半截竹管、
　　結束1：結束第1種、結束2：結束第2種、結節：結節縄文、
煤の付着、○：内面付着、●：外面付着、◎：内外付着、—：付着なし、
内面調整、M：ミガキ、　N：ナデ、　：なし。
胎土　1：緻密である。
　　2：細礫を含まず、砂粒を含む。
　　3：細礫・砂粒を僅かに含む。
　　4：細礫・砂粒を多く含む。



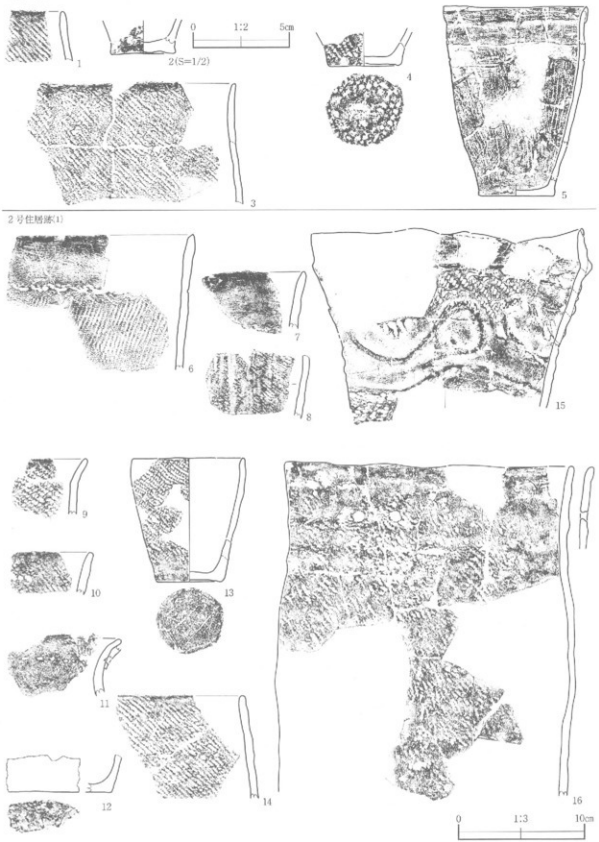
第27図　遺構別出土遺物集成図



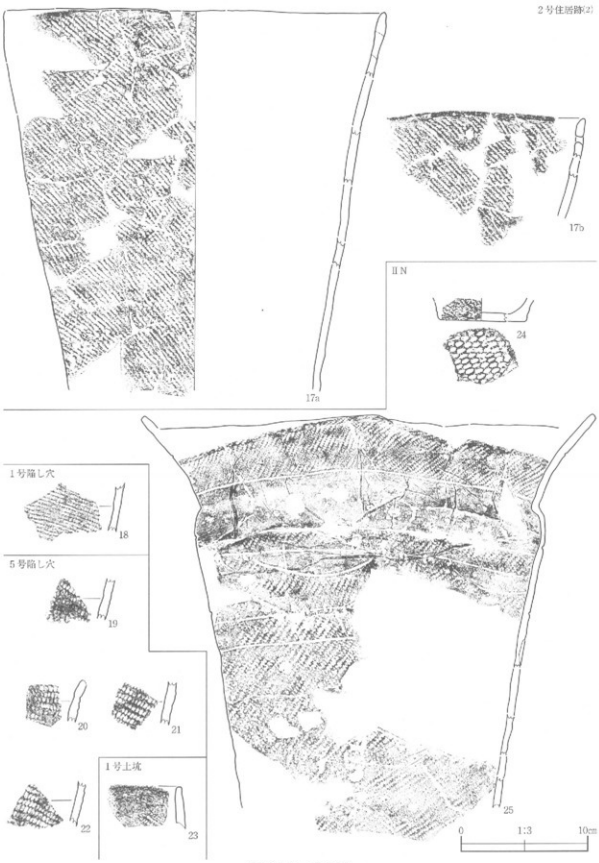
第 28 図　グリッド別出土遺物集成図

1号住居跡

2号住居跡(1)



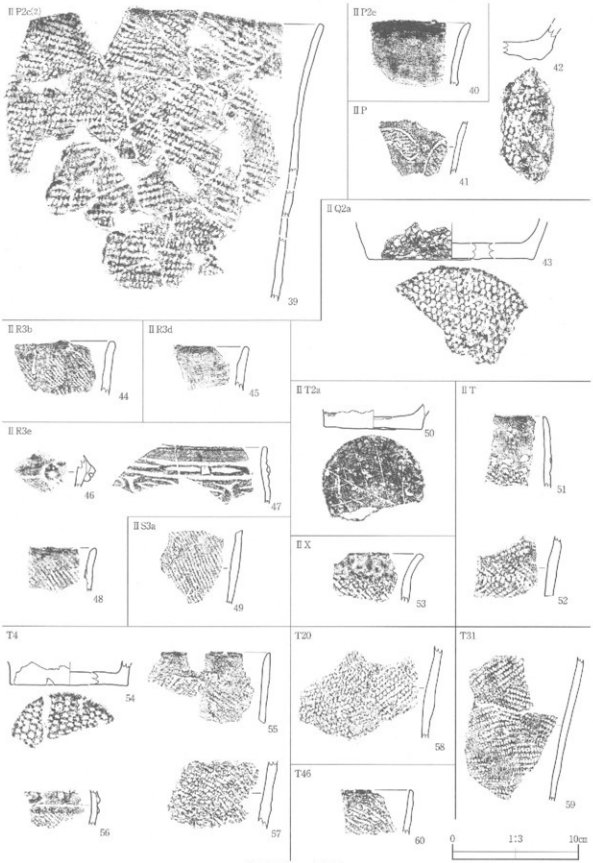
第29図　土器(1)


2号住居跡(2)
17a
17b
II N
24
1号陥し穴
18
5号陥し穴
19
20
21
1号土坑
22
23
25
0
1:3
10cm

第30図　土器(2)

ⅡO2c
26
27
28
29
ⅡP2b
30
ⅡP2c(1)
31
32
33
34
35
36
37
38a
38b
38c
0
1:3
10cm

第31図　土器(3)


Ⅱ P2c(2)
39
Ⅱ P2c
40
42
Ⅱ P
41
Ⅱ Q2a
43
Ⅱ R3b
44
Ⅱ R3d
45
Ⅱ T2a
50
Ⅱ T
51
Ⅱ R3e
46
47
Ⅱ S3a
48
49
Ⅱ X
53
52
T4
54
55
56
57
T20
58
T31
59
T46
60
0
1:3
10cm

第32図　土器(4)

3．石器（第 33 図、写真図版 17・18：101 ～ 141）

40 点、総重量 4,740.98g 出土している。内訳は、石鏃 5 点、尖頭器状石器 2 点、楔形石器 3 点、不定形石器 4 点、剥片 14 点、磨製石斧 2 点、磨石 6 点、敲石 3 点、凹石 1 点、石皿 2 点である。全点について観察表・写真を掲載し、図化は遺構内出土の石器を優先して行った。以下、器種ごとに概要を述べる。個々の石器の計測値・特徴などは、第 9 表　石器観察表を参照されたい。

石鏃は 5 点出土している。形態で分類すると、凹基無茎鏃 2 点、平基無茎鏃 1 点、基部が欠損していて形態不明のもの 2 点である。厚さは 0.3 ～ 0.4 ㎝である。石材は頁岩（3）・珪質頁岩（2）である。

尖頭器状石器は 2 点出土している。厚さが 0.8 ～ 0.9 ㎝で、石鏃より厚みをもつ石器である。尖頭部を形成する二辺は湾曲している。石材は頁岩（1）・珪質頁岩（1）である。

楔形石器は 3 点出土している。相対向する 2 辺に対となる剥離をもつ石器である。方形基調の剥片を使用しているものと縦長基調の剥片を使用しているものがある。石材は頁岩（3）である。

不定形石器は 4 点出土している。刃部の付け方をみると、剥片の 1 側縁に片面加工しているもの。2 側縁に片面加工しているものがあり、いずれも直線的な刃部を形成している。刃部を再生しているものもある。石材は頁岩（3）・玉髄（1）である。

剥片は 14 点出土している。表皮の付いているものや一辺に微細な剥離痕をもつものも含めている。石材は、頁岩（8）・珪質頁岩（5）・玉髄（1）がある。剥片石器の石材に使用された石材である。

磨製石斧は 2 点出土している。いずれも欠損品である。石材は頁岩（2）である。

磨石は、破片も含めて 6 点出土している。拳大の円礫を利用した石器で、全面あるいは両面に磨面や擦痕をもつ石器である。石材は、砂岩（5）・ホルンフェルス（1）を使用している。

敲石は 3 点出土している。一端に敲打痕をもつものと両端に敲打痕をもつものがある。端部を使用しているものは、敲打により石の形状がＶ字状や直線的に変形し、平坦面を形成している。周縁に敲打痕をもつものもある。石材は砂岩（3）である。

凹石は 1 点出土している。角柱状の礫の一面に径 2.5 ～ 2.0 ㎝、深さ 0.5 ㎝の円錐状の凹みが長軸方向に 2 個連なっている。石材はホルンフェルスを使用している。

石皿は 2 点出土している。139 は、方形基調の石皿で縁と脚を有する。140 は、脚を有する石皿の破片で、外面に溝状の凹みがある。かなり大形の石皿であったと思われる。石材は砂岩（2）である。

4．石製品（第 33 図、写真図版 18：142）

2 点：総重量 2,539.5g 出土している。内訳は石棒 1 点・垂飾品 1 点である。個々の石製品の計測値・特徴などは第 10 表を参照されたい。

石棒の可能性があるものが 1 点出土している。風化が激しく、加工痕が明瞭でない。自然礫をそのまま使用したものかもしれない。欠損品である。石材は砂岩である。

垂飾品は 1 点出土している。にぶい橙色～褐色を呈する滑石製の石製品で両面から穿孔されている。ⅡS3a グリッドからの出土で、同一グリッドの同一層から縄文時代後期～晩期の土器が出土しており、同時期のものである可能性がある。

5．植物遺存体（写真図版 18：151）

1 点出土している。オニグルミと思われる。炭化して欠損している。計測値は第 11 表を参照されたい。

第9表　石器観察表

（　）内数値：残存値

図版№	写図№	掲載№	出土地点	層位	器種	計測値（cm）長さ	巾	厚さ	重量(g)	特徴・分類・備考	石材	産地	時代
—	17	101	ⅡP	Ⅱ層	石鏃	2.0	1.0	0.3	0.46	凹基無茎鏃	頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	102	ⅡP2e	Ⅱ層	石鏃？	(1.0)	(1.0)	(0.3)	(0.25)	尖頭部：基部欠損	珪質頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	103	ⅡP2e	Ⅱ層	石鏃	(1.5)	(1.1)	(0.3)	(0.36)	尖頭部：基部欠損	珪質頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	104	ⅡP3c	Ⅱ層	石鏃	2.3	1.6	0.4	1.44	平基無茎鏃	頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	105	T42（ⅡN1d）	Ⅰ層	石鏃	3.8	2.0	0.4	2.54	凹基無茎鏃	頁岩	奥羽山脈	新生代
33	17	106	2号竪穴住居跡	2層S.№1	尖頭器状石器	2.2	1.5	0.8	2.08	両面調整	珪質頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	107	ⅡP	Ⅱ層	尖頭器状石器	2.3	1.8	0.9	3.39	両面調整	頁岩	奥羽山脈	新生代
33	17	108	1号竪穴住居跡	ベルトA－A'西断面 1層P.№35	楔形石器	1.9	1.8	0.5	1.59	2辺一対の剥離	頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	109	2号竪穴住居跡	S.№4	楔形石器	2.1	1.6	0.3	0.97	2辺一対の剥離	頁岩	奥羽山脈	新生代
33	17	110	2号竪穴住居跡	東側床面掘り下げ	楔形石器	3.1	1.2	0.8	3.24	2辺一対の剥離	頁岩	奥羽山脈	新生代
33	17	111	1号竪穴住居跡	床上3層S.№1	不定形石器	5.8	3.1	0.9	1.68	刃部：両面一側縁加工、片面一側縁加工	玉ずい	不明	—
33	17	112	1号竪穴住居跡	北東床上1層P.№9	不定形石器	5.1	3.3	0.7	8.62	刃部：片面一側縁加工	頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	113	ⅡP2c	S.№1	不定形石器	5.6	4.1	1.0	19.23	刃部：片面一側縁加工	頁岩	奥羽山脈	新生代
	17	114	ⅡT	耕作土	不定形石器	5.4	2.8	0.6	9.08	刃部：片面二側縁加工	頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	115	1号竪穴住居跡	床上外S.№2	剥片	3.2	2.2	1.2	6.49	一辺に微細な剥離痕　点状打面	珪質頁岩	奥羽山脈	新生代
	17	116	1号竪穴住居跡	覆土外S.№2	剥片	2.8	2.2	1.0	5.23	二辺に微細な剥離痕　適用なし	珪質頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	117	2号竪穴住居跡	2層S.№2	剥片	3.9	2.5	0.7	4.64	一、自然面	玉ずい	不明	—
	17	118	2号竪穴住居跡	2層S.№9	剥片	1.8	1.2	0.2	0.03	一、点状打面	頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	119	2号竪穴住居跡	西側床上S.№10	剥片	2.4	1.8	0.5	1.64	一、適用なし	頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	120	1号土坑	北半覆土	剥片	2.1	1.6	0.4	1.03	一端に微細な剥離痕　適用なし	頁岩	奥羽山脈	新生代
	17	121	ⅡO2c	Ⅱ層下位	剥片	2.2	1.8	1.0	2.84	表皮、一辺に微細な剥離痕　適用なし	珪質頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	122	ⅡP2c	Ⅱ層S.№11	剥片	2.9	2.8	0.7	4.84	一辺に微細な剥離痕　平坦打面	珪質頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	123	ⅡP2c	Ⅱ層S.№12	剥片	2.7	5.9	1.1	16.26	表皮、平坦打面	頁岩	北上山地	中生代
—	17	124	ⅡP2d	Ⅱ層P.№17	剥片	1.4	1.3	0.2	0.44	一、点状打面	頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	125	ⅡP2c	Ⅱ層	剥片	1.8	0.7	0.3	0.27	—	頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	126	ⅡR3d	Ⅱ層褐色土	剥片	2.2	1.8	0.6	2.27	表皮、平坦打面	珪質頁岩	奥羽山脈	新生代
—	17	127	T37（ⅡO1a）	Ⅰ層	剥片	3.4	3.4	0.5	4.83	表皮、点状打面	頁岩	北上山地	中生代
—	17	128	2号竪穴住居跡	2層S.№8	打製石斧？	(2.5)	(2.3)	(0.9)	(6.24)	稜線あり、破片	頁岩	北上山地	中生代
—	17	129	ⅡT2a	Ⅱ層	磨製石斧	(3.7)	(2.2)	(0.8)	(6.41)	刃部：剥痕あり	頁岩	北上山地	中生代
—	17	130	ⅡQ3a	Ⅱ層	砥石	(16.2)	(7.9)	(6.3)	(962.22)	全面摺面	ホルンフェルス	北上山地	中生代
—	17	131	ⅡP2c	Ⅱ層S.№13	磨石？	6.9	6.5	5.1	316.28	全面擦面	砂岩	北上山地	中生代
—	17	132	2号竪穴住居跡	2層S.№6	砥石？	(5.4)	5.4	2.2	(87.18)	両面に剥痕	砂岩	北上山地	中生代
—	17	133	1号竪穴住居跡の東側	ベルトAA' S.№5	磨石？	11.8	7.4	7.4	543.50	全面に敲打痕？	砂岩	北上山地	中生代白亜紀～新生代古第三紀
	17	134	ⅡN	Ⅱ層	砥石？	(5.5)	(5.0)	(3.5)	(109.19)	端部？	砂岩	北上山地	中生代
33	17	135	1号竪穴住居跡	南北ベルト南側S.№4 1層	敲石	8.7	6.5	4.5	359.11	両端に敲打痕	砂岩	北上山地	中生代
	17	136	ⅡP3d	Ⅱ層	敲石	8.6	6.2	2.7	204.21	一端に敲打痕	砂岩	北上山地	中生代
—	18	137	ⅡR3d	Ⅱ層	敲石	6.7	4.4	1.7	86.06	両端敲打痕	砂岩	北上山地	中生代
33	18	138	2号竪穴住居跡	2層S.№7	凹石	13.5	5.0	3.6	299.38	棒状、片面に窪み（凹形2）	ホルンフェルス	北上山地	中生代
33	18	139	ⅡO	耕作土、土層	石皿	(16.5)	(15.8)	(5.3)	(937.48)	縁、脚付	砂岩	北上山地	中生代白亜紀～新生代古第三紀
33	18	140	ⅡP2d	不明	石皿	(11.0)	(13.2)	(6.5)	(717.92)	縁、脚付、片面に浅い窪み(擦状)	砂岩	北上山地	中生代白亜紀～新生代古第三紀
			合計						4740.98				

第10表　石製品観察表

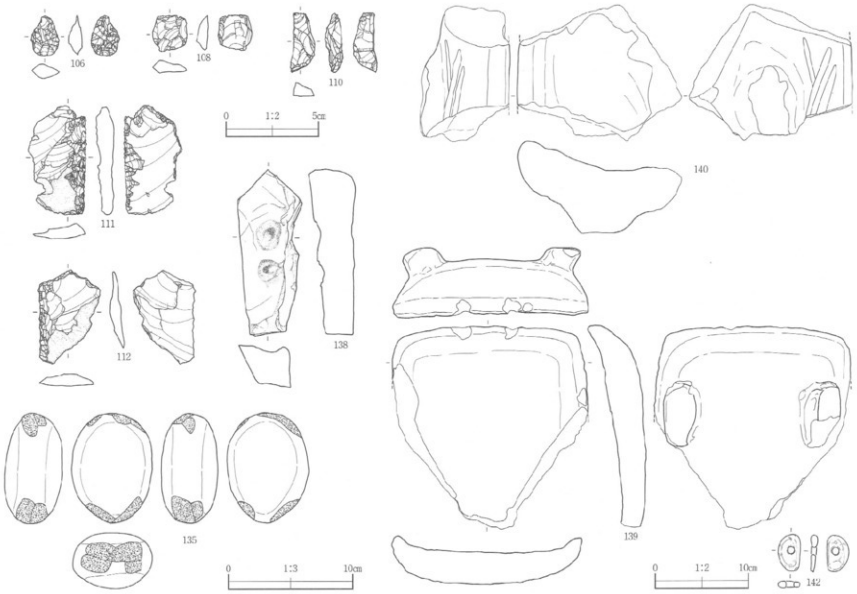
（　）内数値：残存値

図版№	写図№	掲載№	出土地点	層位	器種	計測値（cm）長さ	巾	厚さ	重量(g)	特徴・分類・備考	石材	産地	時代
	18	141	ⅡQ2a	S.№1	石錘	(21.0)	12.6	8.3	(2538.12)	敲打痕？	砂岩	北上山地	中生代白亜紀～新生代古第三紀
33	18	142	ⅡS3a	№1(Ⅱ層)	石製品	1.9	1.2	0.4	1.38	穿孔あり	滑石	北上山地	中生代
			合計						2539.5				

第11表　炭化種実観察表

（　）内数値：残存値

図版№	写図№	掲載№	出土地点	層位	種別	計測値（cm）長さ	幅	厚さ	重量（g）	形状	特徴・備考
—	18	151	2号竪穴住居跡	P.№64内部	オニグルミ	(1.1)	(1.0)	(0.5)	(0.28)	球体、1個体。	半欠。


106
108
110
111
112
135
138
140
139
142
0 1:2 5cm
0 1:3 10cm
0 1:2 10cm

第33図 石器・石製品

Ⅵ．まとめ

1．遺構

(1) 竪穴住居跡

縄文時代の竪穴住居跡が2棟検出された。

〈平面形・規模〉径5m ほどの円形基調である。

〈壁・床面〉1号住居跡は覆土と掘り込まれた層の識別が難しく、壁・床とも判然としなかった。2号住居は、壁は外傾し、床面はⅢ層を掘り込んで、ほぼ平坦につくられている。

〈覆土〉自然堆積の様相を呈する。

〈柱穴〉2号住居跡では調査範囲内から3個の柱穴が検出された。本来は4本柱であったと推定される。

〈炉〉2号住居跡で地床炉が確認された。炉の位置は一方の壁際に片寄り、壁との間に窪みを有している。

〈占地〉調査区西側の高台に占地している。標高245m 以上の平坦面が居住域であったものと思われる。

〈時期〉縄文時代後期初頭と思われる。

(2) 陥し穴状遺構（第34図）

陥し穴状遺構は、13基検出された。

〈検出面〉Ⅱ層中（1次検出）で検出した4基、Ⅲ層上面（2次検出）で検出した9基がある。検出面の違いは、時期差を表すものではなく、Ⅱ層中で偶然確認できたものと、Ⅲ層まで下げて検出したものの違いである。基本層序との関係は、陥し穴状遺構はⅡ層から掘り込まれて、底面はⅢ層を掘り込んでいる。Ⅱ層（Ⅱb）を掘り込んでつくられている一方で、Ⅱ層（Ⅱa）で覆われている。Ⅱ層の細分は恣意的なもので、時期差を明確に示すものではない。調査区内におけるⅡ層の堆積状況は、標高の高い西側では堆積が薄く、標高の低い東側ほど厚く堆積しており、西側の高い方から東側の低い方へ再堆積した様相を示している。Ⅱ層は、陥し穴状遺構のつくられる以前から、使われなくなった後まで、長い時間幅で再堆積したものと思われる。

〈規模・形態〉規模（数）・形態、副穴の有無をまとめると、次のようになる。規模は削平を受けているため、開口部ではなく、底径で比較する。

○溝形（10基）・底径180 × 16 ㎝～ 105 × 15 ㎝、長軸と短軸の比（短軸を1とした場合）は、11.25:1 ～ 7:1である。副穴は1個有るものと無いものがある。底面の幅が比較的広いものと狭いものがある。

○円形（2基）・底径80 ～ 85 ㎝、副穴は底面中央に1個ある。

○隅丸長方形（1基）・底径125 ～ 85 ㎝、副穴は底面中央に1個ある。

〈覆土〉覆土の構成は、黒色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土（Ⅱ層起源）・黄褐色土（Ⅲ層起源）に大別され、概ね上から下に上記の土層に移行する自然堆積の様相を示している。底面直上に黒土が堆積する例は1例（2号陥し穴）である。覆土中に十和田中掫テフラ（To-Cu テフラ）が確認できたものがある。To-Cu テフラは、平面形が円形の陥し穴状遺構（5号陥し穴）では覆土上位にレンズ状に堆積しているが、他の溝形の陥し穴状遺構（1?・2・11・12号陥し穴）では、覆土上位の黒色土中にブロックで混入する状態である。火山灰は、黄白色を呈する粉状で、11号陥し穴状遺構の北半覆土1層にブロックで入る火山灰を分析した結果、To-Cu テフラであるとの結果を得ている(P67)。また、同層から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行った結果、4750 ± 40（補正C14年代）との結果を得ている。(P68)

〈遺物〉遺物が出土したのは、1号・5号陥し穴状遺構で、いずれも覆土上位で To-Cu テフラより上位から出土している。To-Cu テフラの下位から遺物は出土していない。破片のため時期の詳細は不明である。

〈古地〉調査区西端の傾斜地を除く、全域に散在する。溝形の隅し穴状遺構では、11～13号隅し穴状遺構が比較的規則的な配置を示しており、調査区域外の南北に連続する可能性が高いが、詳細は不明である。

〈時期〉覆土中にTo-Cuテフラがレンズ状に堆積していた円形の隅し穴状遺構は前期前半の可能性がある。隅丸長方形の隅し穴状遺構も同時期の可能性がある。溝形の隅し穴状遺構は覆土の黒褐色土中にTo-Cuテフラがブロックで入るものが数例あるが、時期決定の手掛かりにはなっても決め手にはならない。検出状況や覆土の堆積状況から円形・隅丸長方形と溝形の隅し穴状遺構を比べて時期差を把握できるほどの違いを認識できていないことから、調査時には、すべての隅し穴状遺構の時期は、形態差に関係なく、縄文時代前期前半と判断していた。一方、11号隅し穴状遺構の放射性炭素年代測定の分析結果で得られた年代は、4750±40年（補正C14年代）で、縄文時代中期に相当する。溝形の隅し穴状遺構の時期は、出土遺物がなく、推定の域を出るものではないが、あえて所属時期を模索すれば、縄文時代中期以降となる可能性がある。前期前半と考えられる円形・隅丸長方形の隅し穴状遺構の覆土中におけるTo-Cuテフラの堆積状況（レンズ状堆積）と、溝形の隅し穴状遺構の覆土中におけるTo-Cuテフラの堆積状況（ブロック混入）の違いが、各形態の隅し穴状遺構の時期差（埋没する時間差）を表しているのかもしれない（註1）。

〈参考事例〉これまでの岩手県の調査事例から、隅し穴状遺構の出現時期を形態別にみると、円形、方形基調の隅し穴状遺構が縄文時代早期・前期の早い段階に出現し、溝形の隅し穴状遺構が中期末葉から後期前葉にかけて多数検出されており、円形・方形基調の隅し穴より溝形の隅し穴が後出することが指摘されている（註2）。一方で、いくつかの遺跡で検出された溝形の隅し穴状遺構には、前期に遡る可能性を示唆するものがある（註3）。参考までにいくつかの事例を概観する。

○滝沢村大釜館遺跡の事例（註4）

85基の隅し穴状遺構が確認されている。平面形は溝状で、断面形はV字状である。底面に副穴を伴うものはない。このうち18基の隅し穴状遺構から縄文時代前期前葉の土器片や不定形石器が出土している。遺物が出土している隅し穴状遺構の分布をみると、多くは調査区の北側半分にあって、同時期の竪穴住居跡の分布域と重なる。隅し穴の時期の詳細は不明だが、同地点にある前期の集落の存在が隅し穴状遺構の覆土に同時期の遺物が混入した理由であろう。遺構の重複関係では、前期前葉の竪穴住居を切る例（10号住居跡→4号隅し穴。13号住居跡→18号隅し穴）が報告されており、隅し穴状遺構の時期は、「少なくとも前期前葉の居住空間が廃れた後、晩期までの長い年月のいくつかの時期に施設された」ものとしている。

○浄法寺町沼久保遺跡の事例（註5）

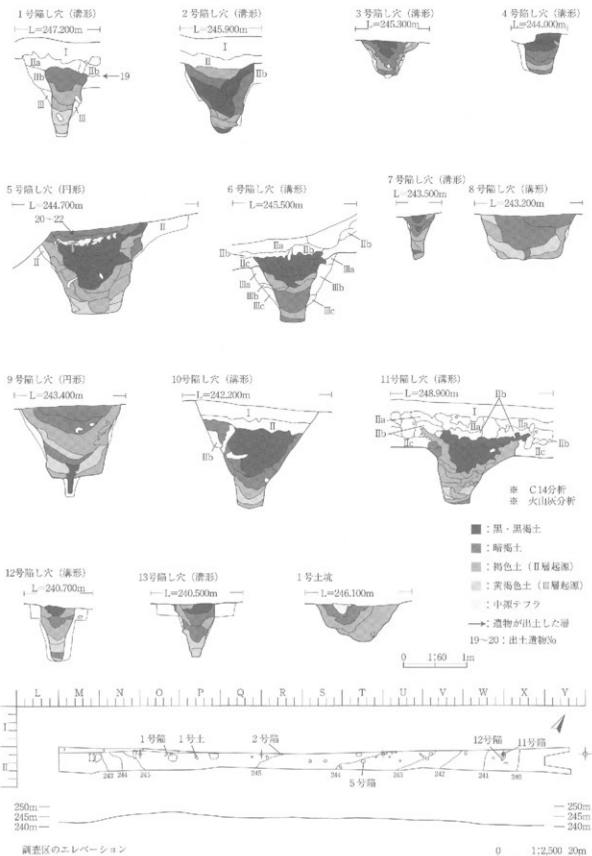
26基の隅し穴状遺構が確認されている。形態は溝状24基、小判状2基である。溝状の隅し穴（Ⅱ F-4～7・Ⅱ F1～5）8基が基本層序のⅣb層：中掫浮石の下位のⅥ層：八戸火山灰層で検出されており、Ⅱ F-2号隅し穴状遺構が、縄文時代前期（第Ⅰ群f類：円筒下層d式期の土器出土）の住居跡に切られている重複関係などから、時期は、縄文時代前期に属するものと考えられている。

一方、小判状の隅し穴（Ⅱ F-8号隅し穴）は、埋土上位に十和田a降下火山灰（To-aテフラ）が堆積し、後期後葉（十腰内Ⅳ・Ⅴ式期）の住居跡に切られている重複関係から、時期は後期前葉と考えられている。

○出野畑村真木沢Ⅰ遺跡の事例（註6）

2基の隅し穴状遺構（5号・61号）が確認されている。平面形は長楕円形で、断面はU字状である。底面に浅い副穴を伴う。時期の詳細は不明として慎重に保留しているが、褐色土～明褐色土の埋土と、5号隅し穴→6号竪穴、61号隅し穴→8号竪穴の遺構の重複関係から、縄文時代前期に遡る可能性があろう。

(3) 土　坑



第34図　遺構の覆土堆積状況集成図

土坑は 12 基検出された。検出面から、1 次検出（Ⅱ層上位）で確認された近現代のもの 5 基と、2 次検出（Ⅲ層上位）で確認された縄文時代の可能性をもつ 7 基に大別される。規模・形状には個体差があり、占地もまとまりはみられない。大方の土坑は出土遺物もなく、詳細な時期は不明である。1 号土坑は調査区域外に続くが、溝跡の可能性もある。12 号土坑は、規模は小さいが、形状から貯蔵穴の可能性がある。

(4) 焼土遺構

検出された焼土遺構は 1 基である。時期・性格は不明である。

(5) 掘立柱建物跡

調査区西端の緩斜面で規模 3.5（11 尺 6 寸）m × 1.8（6 尺）m、長方形の 4 本柱の建物が検出された。出土遺物がなく、時期も性格も不明だが、炭窯に近接する位置から、炭焼きに係わる施設の可能性がある。

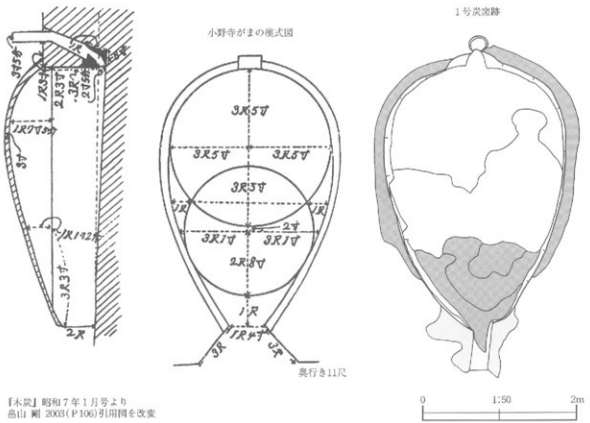
(6) 炭窯跡（第 35 図）

a. 炭窯の位置と立地

炭窯が 1 基検出された。調査区西端の埋没沢の緩斜面を利用して構築された炭窯である。聞き取りによれば、地権者は覚えがないとう。検出状況から現在の道路に切られており、現道が遡れる昭和 16 年(1941)（註 7）より旧い時代に構築された炭窯であると判断される。炭窯の機能していた時期は、現在ある東西の道は無かったと考えられることから、南側の斜面地から行き来していた可能性も考える必要がある。

b. 炭窯の構造と構築方法

窯の構造は、本体の炭化室が内部と外部に大別され、内部の施設として窯壁・窯底、外部の施設として点火室・排気管・排煙口がある。今回の調査では、炭化室内部の窯壁・窯底と外部の排煙口が確認できた。



『木炭』昭和 7 年 1 月号より
畠山 剛 2003（P.106）引用図を改変

第 35 図　炭窯跡の模式図と 1 号炭窯跡

炭窯の構築方法は、窯の本体にあたる部分は地山を掘り込んで構築し、上屋は、枝木を上げて渡した後に葺で覆い、その後、地山の壁土（粘土）をつきかためたものを叩いて乗せたとされている（註8）。掻廻口は、傾斜などの工夫はみられず、床面と同じ高さで設けられている。煙道部分の断面形は円形である。

c. 炭窯の特徴

煙道を北側の斜面上方、焚口を南側の斜面下方に設けている。平面形は焚口側がすぼまる長卵形である。規模は、3.3m（11尺）×2.25m（約7尺）、床面積は約5.4㎡である。焚口の周辺は、黄褐色土の粘土が貼られていた。排水・排湿・保温などを目的とした炭窯下部の付属施設や周溝は確認できていない。

d. まとめ

今回、調査した1号炭窯跡は、黒炭を焼いた炭窯と思われる。生産された炭の量は、床面積から判断して、一俵5kgで、12～13俵前後と推定される（註9）炭窯が機能していた時期：昭和16年（1941）以前から、類推できる炭窯の型式は「小野寺ガマ」である。「小野寺ガマ」は、小野寺清七氏により考案された炭窯で、大正末期から昭和前期にかけて岩手県で普及した炭窯の型式で、奥行11尺・最大幅7尺で、形状はたまご形、最大幅を基準（1.0）として、奥行きと最大高を示すと、奥行き1.64、最大高0.64である（註10）。今回、確認された1号炭窯跡の規模・形状は、記録として残されている「小野寺ガマ」に近似する。

昭和3年（1928）から6年（1931）末までの間に作成されたとされる「県内各式窯ノ分布」の調査報告書（「小野寺家文書」）によると、「書代・平井賀・小本」の地区名が見え、平井賀は、「黒炭ガマ」「小野寺ガマ300」と記されている（註11）。平井賀とされる地域が示す具体的な範囲の問題はあるが、現山野畑村にも小野寺ガマは確実に普及していたのだと考えられる。

2．遺物

（1）土器

土器は縄文時代早期～晩期の土器が大コンテナ（30×40×30cm）1箱出土している。時期毎に出土地点にまとまりがみられる。量的にまとまりをもっているのは後期初頭から前葉にかけての土器である。

（2）石器・石製品

小コンテナ（30×40×10cm）1箱分が出土している。器種と石材の関係をみると、剥片石器の石材は頁岩・珪質頁岩が多く、玉髄も使われている。磨製石斧は頁岩、礫石器は、砂岩・ホルンフェルスが使用されている。石製品は、にぶい橙色～褐色を呈する滑石が使用されている。

3．総括（第36図）

（1）遺跡の位置と立地

和野ソマナイ遺跡は、半井賀川から南流する支流に南北を挟まれた海岸段丘の縁辺に立地する。遺跡全体は、北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。標高280～290mで、遺跡の現況は山林・畑地である。遺跡の面積は約49,639.7㎡である。西隣には埋没沢を挟んで和野新墾神社遺跡がある。

（2）検出された遺構

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡2棟、陥し穴状遺構13基、土坑12基、焼土遺構1基、近代の掘立柱建物跡1棟、炭窯跡1基である。

（3）遺構の占地

縄文時代の遺構は、西端の急斜面を除く緩斜面にあり、竪穴住居跡は西側の高い地点（標高245m以上）

占地する。西側は埋没沢で落ち込み、東側は緩斜面になっており、日当たりの良い高台に占地したものであろう。現況から判断して、居住域は、調査区域外の南北に広がりそうである。陥し穴状遺構は、西端の急斜面を除く範囲に散在することから、全体としては遺跡の南北を流れる沢を結ぶ緩斜面に設定された陥し穴であったものと判断される。西端の傾斜地には、近代の掘立柱建物跡と炭窯跡が検出された。

(4) 出土遺物

縄文土器・石器・石製品・炭化種実などが出土している。総量は大コンテナ（30×40×30cm）2箱である。各種遺物の内容は以下のようであった。

a. 縄文土器は早期～晩期のものが出土している。後期初頭から前葉の土器が主体である。

b. 石器は、剥片石器は石鏃・尖頭器状石器・不定形石器、礫石器は磨石・凹石・敲石・石皿が出土している。

c. 石製品は、石棒・垂飾品が出土している。

d. 植物遺存体は、炭化種実はオニグルミ、その他に炭化材のクリが出土している。

おわりに

今回の調査で、和野ソマナイ遺跡は、縄文時代の集落跡・狩り場であることが明らかになった。遺構・遺物とも量的にそれほど多くはないが、覆土に To-Cu テフラを含む陥し穴状遺構など、いくつかの貴重な資料を得ることができた。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、多くの諸先生、職場の先輩、同僚に沢山の貴重なご指導をいただいた。また拙い指示にもかかわらず的確・迅速に作業を進めていただいた野外・室内の作業員の方々、ご協力いただいた地元の地権者の方々、田野畑村教育委員会・岩手県宮古地方振興局農政部農村整備課にお礼申し上げたい。

註

(1) 本来、陥し穴状遺構の用途から、通常は遺構が使用される空間（狩猟の場）と同時期の集落域が重複しないことが多く、陥し穴状遺構から遺物が出土することは稀である。陥し穴状遺構の時期決定には、出土遺物以上に検出状況・覆土の状態、他の遺構との重複関係を見極める方法が有力かもしれない。時期が同じでも、開口部の広い陥し穴（円形・長方形）と狭い穴（溝形）では、穴山灰の堆積状況が異なる可能性も考えられる。今後の課題である。

(2) 田村計一　1987　形態別の陥し穴の出現時期は、A 類、円形の陥し穴（前期初頭以前）、B 類、楕円形：小判形の陥し穴（晩期中葉から平安時代前期）、C 類、溝形の陥し穴（中期末葉から後期前葉）を想定している。楕円形の陥し穴の定義は長軸・短軸の比が3：1～5：1前後で、必然的に溝形の陥し穴の定義は、長軸・短軸の比が5：1以上になる。本稿の陥し穴状遺構の分類もこれに従ったが、長軸・短軸の比が5：1未満（例えば、9号陥し穴状遺構：3.75：1）であっても、幅の広い溝状の陥し穴状遺構として扱っている。

(3) 田村計一　1987　To-Cu 浄石層を覆屋として構築年代が縄文時代前期前半以前に遡る円形の陥し穴状遺構の事例に、浄法寺町桂平遺跡・大久保Ⅰ遺跡・軽米町大境Ⅱ遺跡遺などがある。

(4) 滝沢村埋蔵文化財センター　2003『大釜館遺跡発掘調査報告書』。

(5) （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986『沼久保遺跡発掘調査報告書』。

(6) 田野畑村教育委員会　1998『真木沢Ⅰ遺跡・切牛Ⅱ遺跡発掘調査報告書』。

(7) 地権者への聞き取り調査による。

(8) （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001『宮沢遺跡発掘調査報告書』。

(9) 聞き取り調査による。地元の炭焼き経験のある方の話では 20 俵生産する炭窯としては小さいとのことであった。

(10) 畠山　剛　2003（P101）

(11) 畠山　剛　2003（P112）

引用・参考文献

瀬川司男　1981『陥し穴状遺構について』『紀要 1』（財）岩手県埋蔵文化財センター

今村啓爾　1983『陥穴（おとし穴）』『縄文文化の研究　第 2 巻　生業』雄山閣

田村計一　1987『陥し穴状遺構の形態と時期について・岩手県北地方を中心として・』『紀要Ⅶ』

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

石岡憲雄　1991『T ピットについて（再論）』『埼玉考古学論集・設立 10 周年記念論文集・』

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

坂本真弓・杉野森淳子　1997『青森近郊における陥し穴集成』『研究紀要第 2 号』青森県埋蔵文化財調査センター

岩手県木炭協会　1991『岩手窯の某』

畠山　剛　2003『炭焼きの二十世紀―書置きとしての歴史から未来へ』彩流社

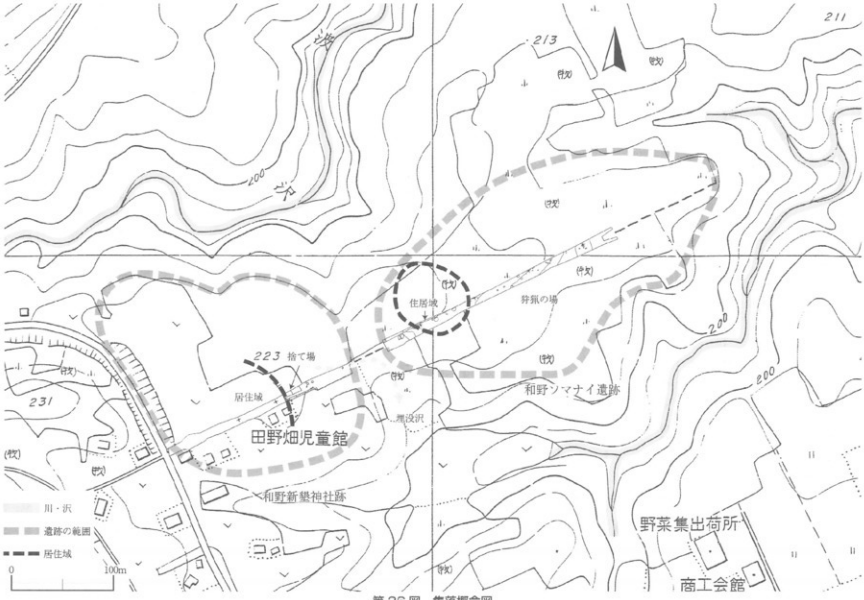
滝沢村埋蔵文化財センター　2003『大釜館遺跡発掘調査報告書』滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第 1 集

田野畑村教育委員会　1998『真木沢Ⅰ遺跡・切牛Ⅱ遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第 3 集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986『沼久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 109 集（以下岩文振埋○集と略す）

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001『宮沢遺跡発掘調査報告書』岩文振埋 358 集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成 15 年度）』岩文振埋 455 集


213
211
100
200
223 捨て場
住居域
井戸の場
和野ソマナイ遺跡
居住域
231
埋没沢
田野畑児童館
和野新墓神社跡
野菜集出荷所
商工会館
川・沢
遺跡の範囲
居住域
0
100m

第36図　集落概念図

Ⅶ. 分析・鑑定

1. 放射性炭素年代測定

岩手県、和野ソマナイ遺跡における放射性炭素年代測定結果

株式会社　古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No 1	11 号竪し穴　1 層	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	AMS

※ AMS は加速器質量分析法：Accelerator Mass Spectrometry

2. 測定結果

試料名	測定No (Beta-)	^{14}C 年代 (年 BP)	δ^{13}C (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代（西暦）
No 1	184934	4760 ± 40	-25.8	4750 ± 40	交点：cal BC 3620, BC 3590, BC 3530
					1 σ：cal BC 3630 ～ 3510
					2 σ：cal BC 3640 ～ 3500, cal BC 3450 ～ 3380

1）^{14}C 年代測定値

試料の ^{14}C/^{12}C 比から、単純に現在（AD1950 年）から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

2）δ^{13}C 測定値

試料の測定 ^{14}C/^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正 ^{14}C 年代値

δ^{13}C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}C の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ（68% 確率）と 2 σ（95% 確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ・2 σ 値が表記される場合もある。

2．火山灰の分析

岩手県、和野ソマナイ遺跡の火山灰分析

株式会社　古環境研究所

1.はじめに

岩手県域とその周辺には、岩手、十和田、秋田駒ヶ岳をはじめとする東北地方北部の火山のほか、洞爺、御岳、三瓶、姶良、阿蘇など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物（さいせつぶつ），いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、テフラ層が認められた山野畑村和野ソマナイ遺跡においても、発掘調査担当者により採取された試料を対象として、火山ガラス比分析、テフラ粒子の屈折率測定、EPMA による火山ガラスの主成分化学組成分析を行って、指標テフラとの同定を行うことになった。

分析測定の対象となった試料は、11 号竪し穴北半 1 層（030623）である。試料からは黄色細粒火山灰がブロック状褐色土中に含まれていると考えられるが、ブロックが小さいために黄色細粒火山灰の部分だけを採取し完全に純化するのは非常に難しい状態であった。

2. 火山ガラス比分析

（1）分析方法

試料について、火山ガラス比分析を行い、試料に含まれる火山ガラスの色調や形態的な特徴を把握した。分析の手順は次の通りである。

1）試料 8g を秤量。

2）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）分析篩により 1/4-1/8 mmの粒子を篩別。

5）偏光顕微鏡下で 250 粒子を観察し、火山ガラスの形態別比率を求める。

（2）分析結果

火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして図 1 に示す。またその内訳を表 1 に示す。試料には、量が多い順に、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス（8.4%）、繊維束状に発泡した軽石型ガラス（2.4%）、分厚い中間型ガラス（2.0%）が含まれている。

3. 屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

試料 1 層（030623）を対象に、日本列島とその周辺のテフラ・カタログ（町田・新井 ,1992,2003）の作成に利用された温度一定型屈折率測定法（新井 ,1972,1993）により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を表 2 に示す。試料 1 層（030623）には、ベージュ色や無色透明の火山ガラス（最大径 1.0

mm）が多く含まれている。火山ガラスの屈折率（n）は、1.511-1.514である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.706-1.712である。

4. 火山ガラスの主成分化学組成分析

（1）分析試料と分析方法

試料1層（030623）を対象として、指標テフラとの同定精度を向上させるために、試料に含まれる火山ガラスについて、波長分散型エレクトロンプローブX線マイクロアナライザー（以下,WDS型EPMAとする）により主成分化学組成分析を行った。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子JXA8600MWDS型EPMAである。加速電圧15kV、照射電流0.01 μA、ビーム径5 μmの条件で行った。補正法はOxide ZAF法を用いた。

（2）分析結果

火山ガラスの主成分化学組成分析結果を、表3に示す。さらにこの表には、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田a火山灰（To-a, 大池,1972, 町田ほか,1981, 町田・新井,1992）と、約5,500年前[※1]に十和田火山から噴出した十和田中掫テフラ（To-Cu, 大池ほか,1966, 早川,1983a, 福田,1986, 町田・新井,1992）に含まれる火山ガラスの主成分化学組成分析結果も合わせて示した。

5. 考察

火山ガラスの形態、色調、屈折率、主成分化学組成などをみると、検出されたテフラ粒子の多くがTo-Cuに由来すると考えられる。ただし斜方輝石の中に屈折率が若干高いものが認められる。この粒子については、約8,600年前[※1]の十和田南部軽石（To-Nb, 大池ほか,1966, 中川ほか,1972, 町田・新井,1992）あるいは約3.2万年前以前の十和田大不動テフラ（To-Of, 中川ほか,1972,Hayakawa,1985, 町田・新井,1992,2003など）などに由来する可能性が考えられる。またごく少量含まれる角閃石については、約1.2～1.3万年前[※1]に十和田火山から噴出した十和田八戸テフラ（To-HP, 早川,1983b,Hayakawa,1985）に由来するのかも知れない。

前述のように、試料の産状から、本来分析対象としたい黄色火山灰層のみの採取は困難であった。このことと、テフラ層の層相を合わせて考慮すると、黄色火山灰層はTo-Cuである可能性が非常に高いと考えられる。

6. まとめ

和野ソマナイ遺跡において採取されたテフラ試料を対象に、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。その結果、送付試料に含まれる黄色火山灰層は、十和田中掫テフラ（To-Cu, 約5,500年前[※1]）である可能性が非常に高いと考えられる。

山形大学教育学部の八木浩司助教授には、火山ガラスの主成分化学組成に関する未公表のデータを提供いただいた。ここに記して御礼申し上げます。

※1 放射性炭素（^{14}C）年代.

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定・テフロクロノロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11,p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法 2・研究対象別分析法」，p.138-149.

福田友之（1986）考古学からみた「中掫軽石」の降下年代．弘前大学考古学研究 ,3,p.4-15.

早川由紀夫（1983a）十和田火山中掫テフラ層の分布，粒度組成，年代．火山，第 2 集 ,28,p.263-273.

早川由紀夫（1983b）火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰．火山 ,28,p.25-40.

Hayakawa, Y.（1985）Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo, 60, p.507-592.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会 ,276p.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会 ,336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学 ,51,p.562-569.

中川久夫・中馬教充・石田琢二・松山　力・七崎　修・生出慶司・大池昭二・高橋　一（1972）十和田火山　発達史概要．岩井淳一教授記念論文集 ,p.7-17.

大池昭二・中川久夫・七崎　修・松山　力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰．第四紀　研究 ,5,p.29-35.

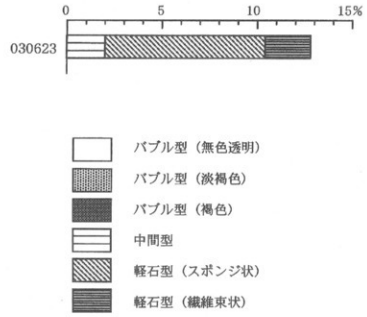


図 1　火山ガラス比ダイヤグラム

表1　火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
030623	0	0	0	5	21	6	218	250

数字は粒子数，bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．

表2　屈折率測定結果

試料	火山ガラス				重鉱物	
	量	色調	最大径	屈折率（n）	組合せ	屈折率
030623	+++	be,cl	1.0	1.511-1.514	opx>cpx,(ho)	opx（γ）：1.706-1.712

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．be：ベージュ色．cl：無色透明．最大径の単位は，mm．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．重鉱物の（ ）は，量が少ないことを示す．屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972,1993）による．

表3　火山ガラスの主成分化学組成分析結果

試料 / テフラ	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	Total	n
030623	75.66	0.44	13.23	2.26	0.09	0.55	2.62	3.93	1.19	0.04	100.00	10
	0.46	0.03	0.10	0.14	0.05	0.02	0.14	0.28	0.18	0.03		
To-a	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34	0.06	100.00	−
To-Cu	75.08	0.44	13.28	2.46	0.08	0.63	2.63	4.04	1.29	0.09	100.02	−

山形大学理学部の WDS 型 EPMA による．n：分析ポイント数．上段が平均値，下段は標準偏差．

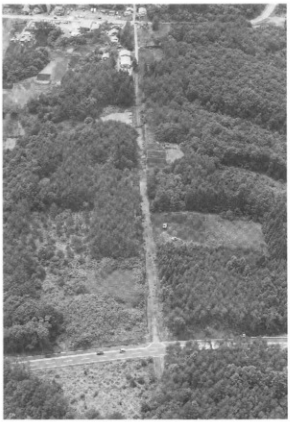
To-a および To-Cu は，八木浩司山形大学教育学部教授の未公表資料．

写真図版

調査区遠景（南西から）

調査区全景（真上から）

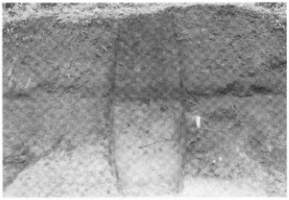
写真図版１　遺跡(1)：調査区全景



調査区全景（北東から）

調査前の近景（北西から）

調査前の近景（南西から）



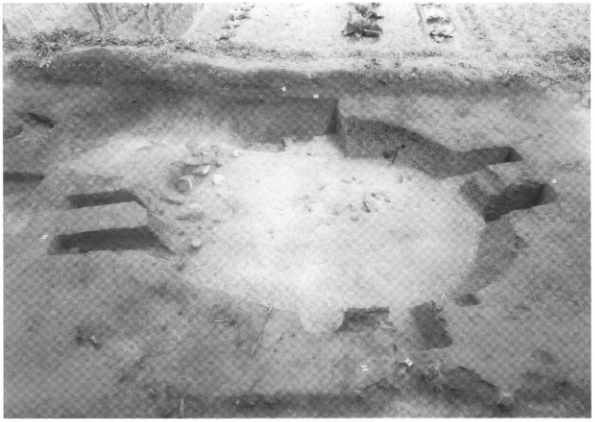
ⅡMグリッド基本土層（南東から）

ⅡXグリッド基本土層（南東から）

調査区西側　作業風景（北東から）

調査区東側　作業風景（南西から）

写真図版２　遺跡(2)：調査前風景・基本土層

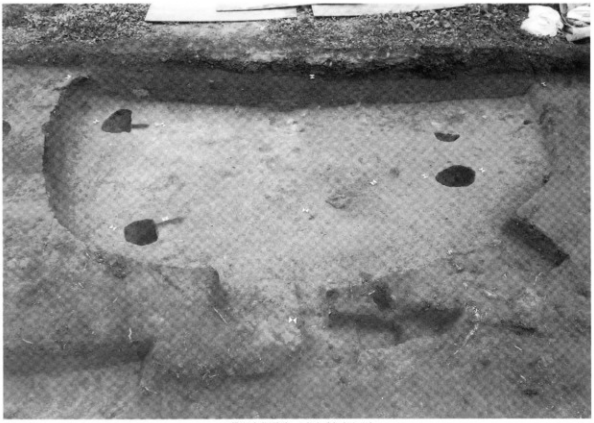


1号竪穴住居跡　平面（南東から）

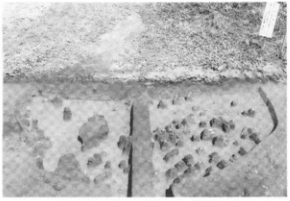
1号竪穴住居跡　断面A～A'（南東から）

1号竪穴住居跡　断面B～B'（北東から）

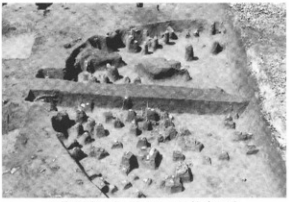
写真図版3　竪穴住居跡(1)：1号竪穴住居跡



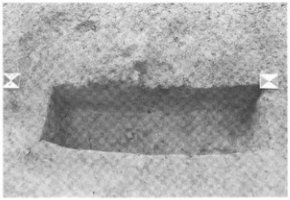
2号竪穴住居跡　平面（南東から）



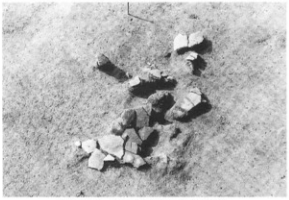
2号竪穴住居跡　断面A－A'（南東から）



2号竪穴住居跡　断面B～B'（北東から）



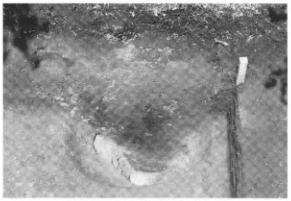
炉　断面（南東から）



炉　平面　土器出土状況（南東から）

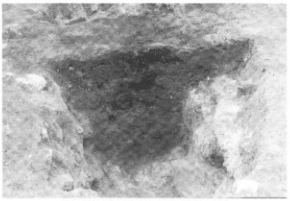
写真図版4　竪穴住居跡(2)：2号竪穴住居跡

1号陥し穴状遺構　平面（南東から）



2号陥し穴状遺構　平面（南東から）

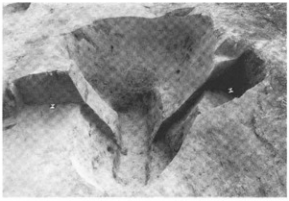
3号陥し穴状遺構　平面（南東から）



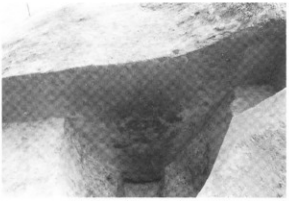
3号陥し穴状遺構　断面（南東から）

4号陥し穴状遺構　平面（北西から）

4号陥し穴状遺構　断面（南東から）

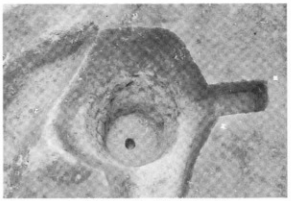


6号陥し穴状遺構　平面（北東から）

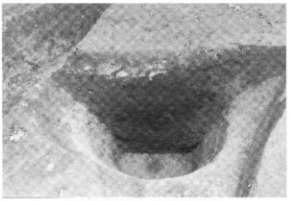


6号陥し穴状遺構　断面（北東から）

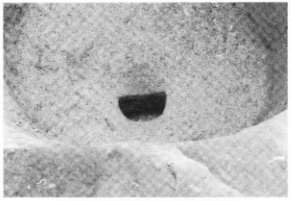
写真図版5　陥し穴状遺構(1)：1～4・6号陥し穴状遺構



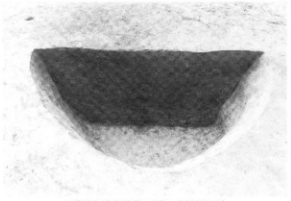
5号陥し穴状遺構　平面（南東から）



5号陥し穴状遺構　断面（南東から）

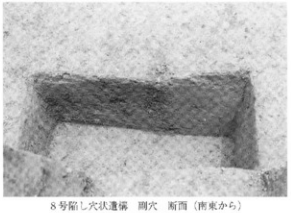


5号陥し穴状遺構　副穴　断面（東から）

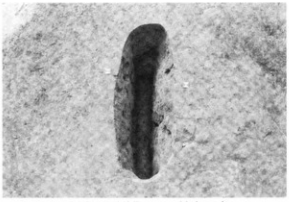


8号陥し穴状遺構　断面（南東から）

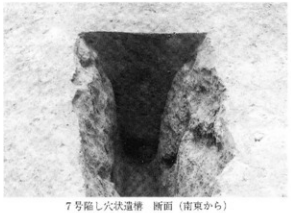
8号陥し穴状遺構　平面（南東から）



8号陥し穴状遺構　副穴　断面（南東から）

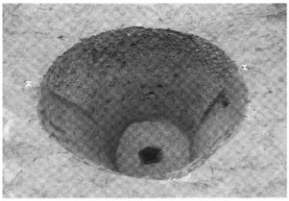


7号陥し穴状遺構　平面（南東から）

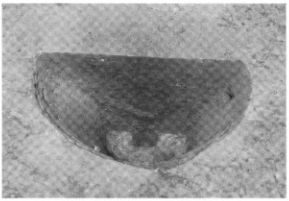


7号陥し穴状遺構　断面（南東から）

写真図版6　陥し穴状遺構(2)：5・7・8号陥し穴状遺構

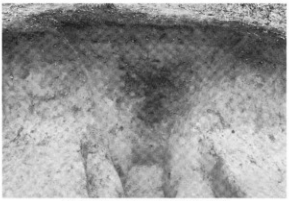


9号陥し穴状遺構　平面（南東から）

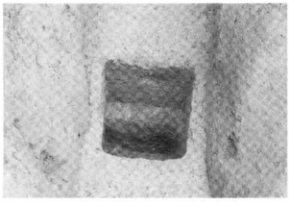


9号陥し穴状遺構　断面（南東から）

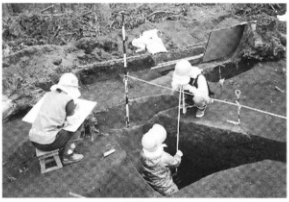
10号陥し穴状遺構　平面（南東から）



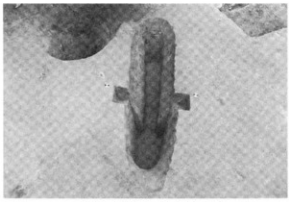
10号陥し穴状遺構　断面（南東から）



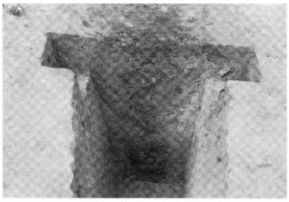
10号陥し穴状遺構　副穴　断面（南から）



作業風景

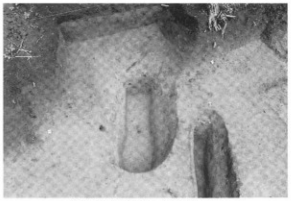


12号陥し穴状遺構　平面（南から）

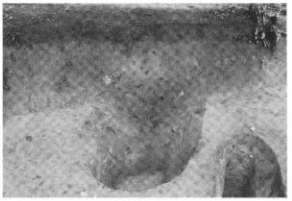


12号陥し穴状遺構　断面（南から）

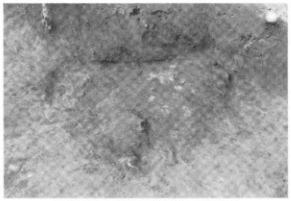
写真図版7　陥し穴状遺構(3)：9・10・12号陥し穴状遺構



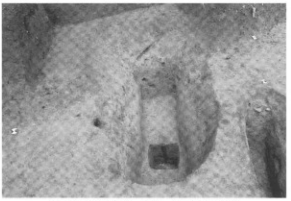
11 号陥し穴状遺構　平面（南から）



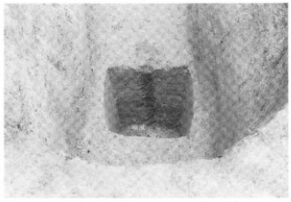
11 号陥し穴状遺構　断面（南から）



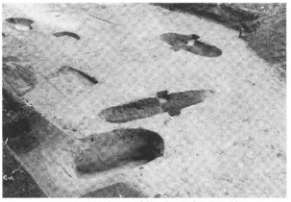
11 号陥し穴状遺構　検出状況（南東から）



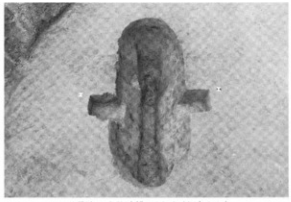
11 号陥し穴状遺構　副穴　断面（南から）



11 号陥し穴状遺構　副穴　断面（南から）



11 ～ 13 号陥し穴状遺構　平面（北西から）



13 号陥し穴状遺構　平面（北東から）

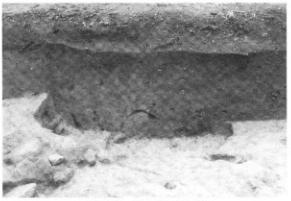
13 号陥し穴状遺構　断面（北東から）

写真図版 8　陥し穴状遺構(4)：11・13 号陥し穴状遺構

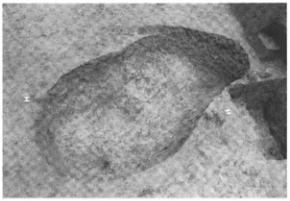
1号土坑　平面（南東から）

1号土坑　断面（南東から）

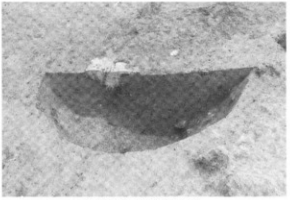
1号土坑　礫出土状況（南東から）



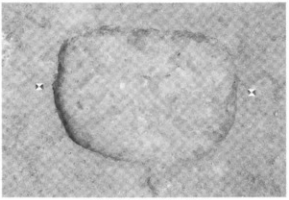
2号土坑　平面（南東から）



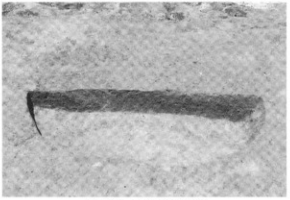
3号土坑　平面（東から）



3号土坑　断面（東から）

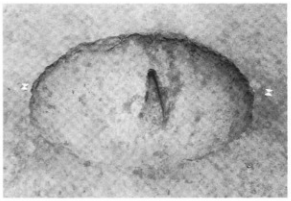


4号土坑　平面（南東から）

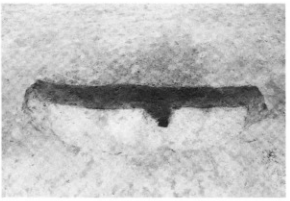


4号土坑　断面（南東から）

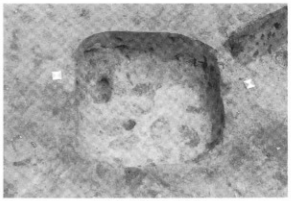
写真図版9　土坑(1)：1～4号土坑



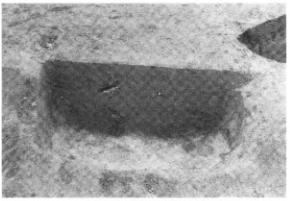
5号土坑　平面（南東から）



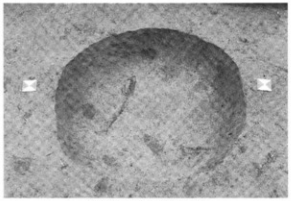
5号土坑　断面（南東から）



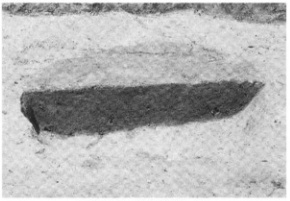
6号土坑　平面（南東から）



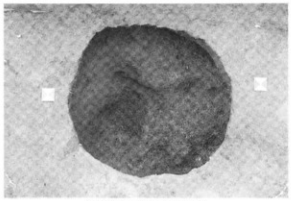
6号土坑　断面（南東から）



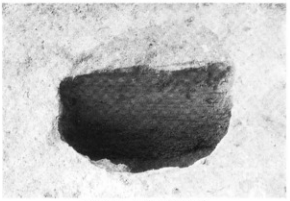
7号土坑　平面（南東から）



7号土坑　断面（南東から）

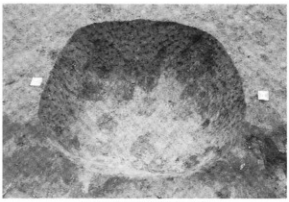


8号土坑　平面（南東から）

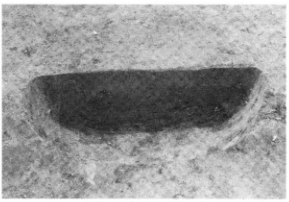


8号土坑　断面（南東から）

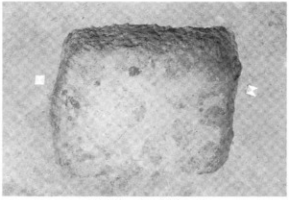
写真図版 10　土坑(2)：5～8号土坑



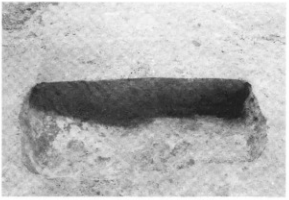
9号土坑　平面（南東から）



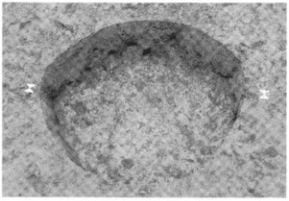
9号土坑　断面（南東から）



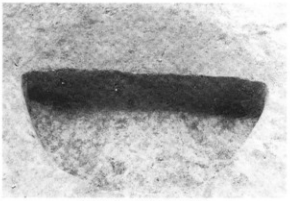
10号土坑　平面（南東から）



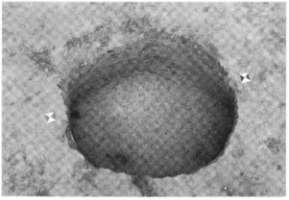
10号土坑　断面（南東から）



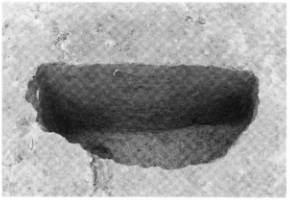
11号土坑　平面（南東から）



11号土坑　断面（南東から）

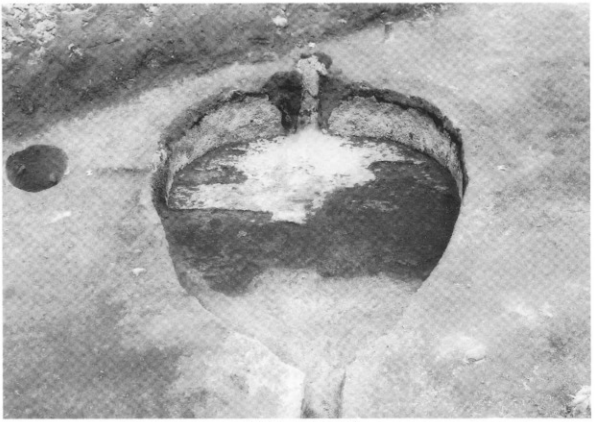


12号土坑　平面（南東から）

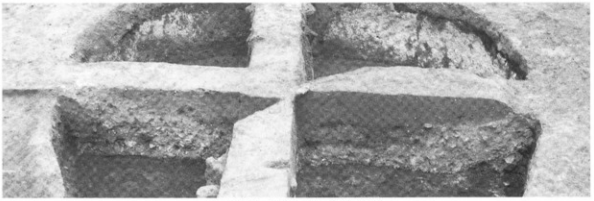


12号土坑　断面（南東から）

写真図版11　土坑(3)：9～12号土坑



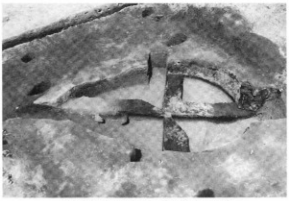
1号炭窯跡　平面（南から）



1号炭窯跡　断面A～A' ①（南から）

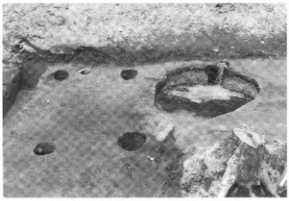
1号炭窯跡　断面B～B' ②（東から）

写真図版12　炭窯跡(1)：1号炭窯跡(1)

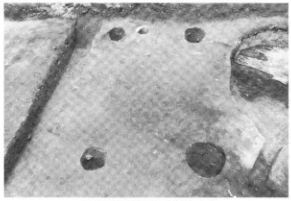


1号炭窯跡　断面B～B'②（東から）

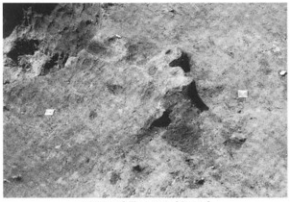
1号炭窯跡・検出状況（南から）



1号掘立柱建物跡・1号炭窯跡（南東から）

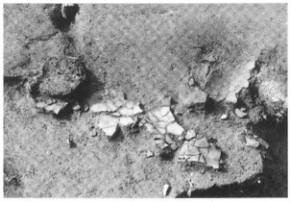


1号掘立柱建物跡（南東から）



1号焼土遺構　平面（南から）

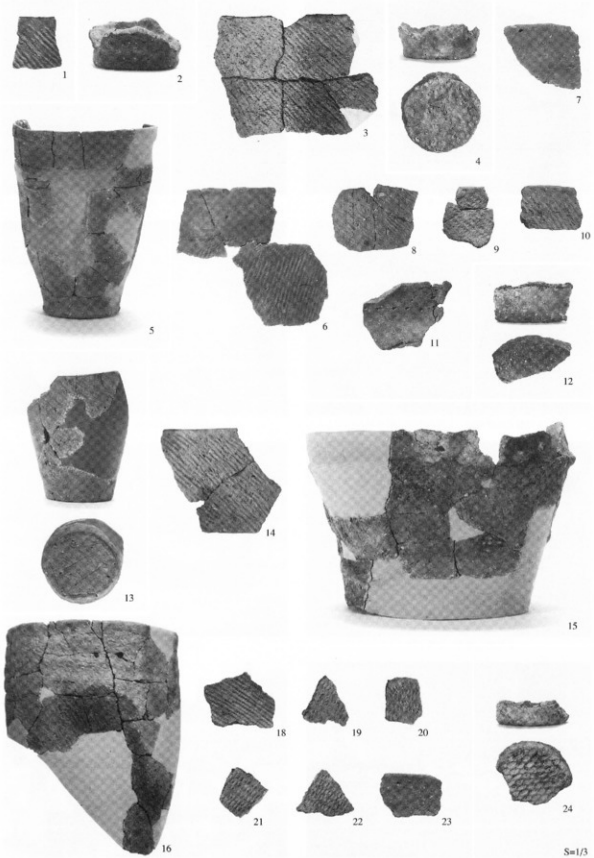
1号焼土遺構　断面（南から）



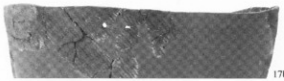
II P2c　土器出土状況（南から）

現地説明会の様子（南から）

写真図版13　炭窯跡(2)：1号炭窯跡(2)、1号掘立柱建物跡、1号焼土遺構



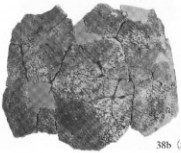
写真図版 14　土器(1)



17b

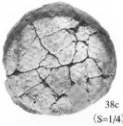
17a
(S=1/4)

38a (S=1/4)

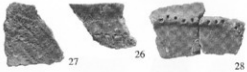


38b (S=1/4)

25



38c
(S=1/4)

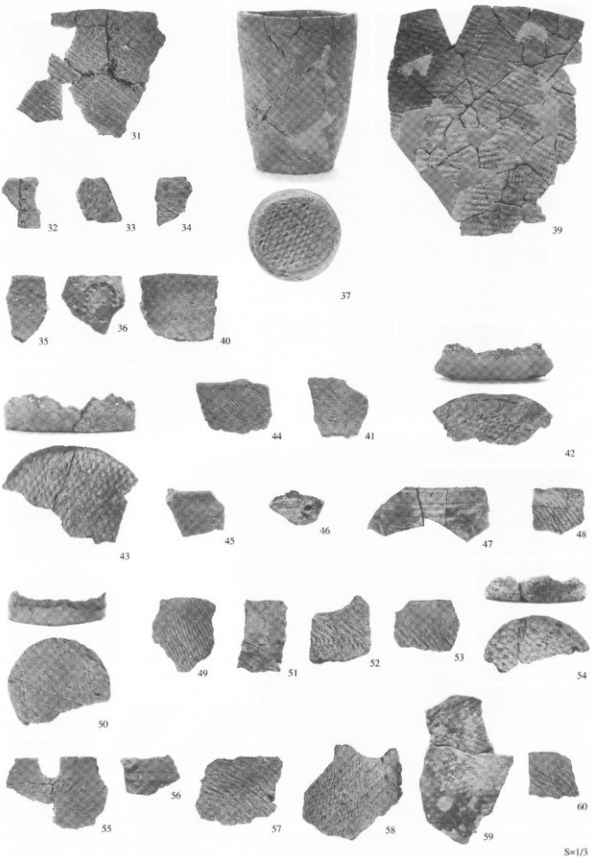


27 26 28

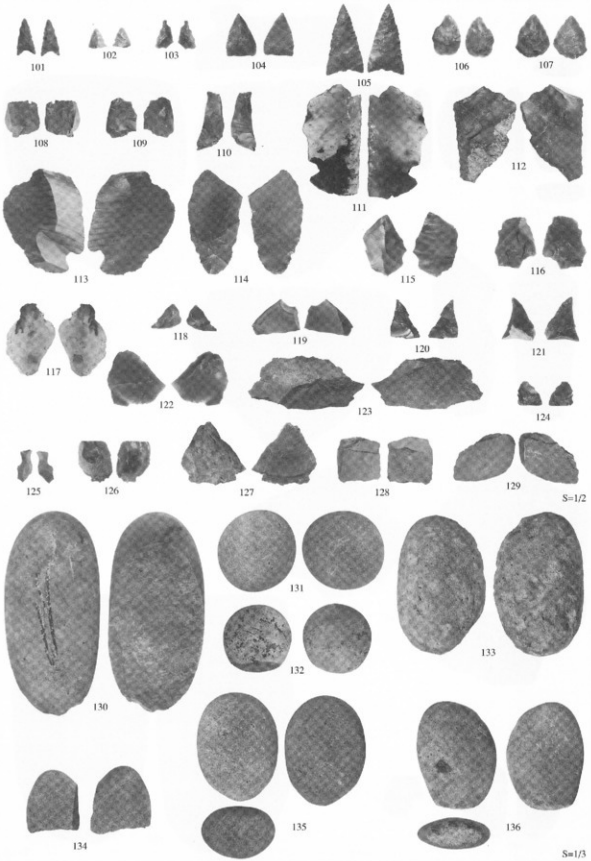
29 30

S=1/3

写真図版 15　土器(2)


31
32
33
34
37
39
35
36
40
44
41
42
43
45
46
47
48
49
51
52
53
54
50
55
56
57
58
59
60
S=1/3

写真図版 16　土器(3)


101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
S=1/2
130
131
132
133
134
135
136
S=1/3

写真図版 17　石器(1)

写真図版 18　石器(2)・石製品

平成１６年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長	相原康二	副所長	平野允亩
〔管理課〕			
課長	菲澤止吾	嘱託	高橋清助
課長補佐	小山烏宏道	〃	常泉治美
主任主査	中嶋賢一	〃	伊藤滋子
主事	猿橋幸子		
〔調査第一課〕			
課長	三浦謙一		
課長補佐	高橋義介		
文化財専門員	金子昭彦	文化財調査員	米田寛
文化財調査員	水上則博	〃	北田勲
〃	阿部勝則	〃	烏原弘征
〃	杉沢昭太郎（御之郷所支援派遣）	〃	村田淳
〃	瀧浩二郎	期限付調査員	石崎高臣
〃	村上拓	〃	立花裕
〃	戸根貴之	〃	新井田えり子
〃	八木勝枝	〃	菅野楢
〃	丸山浩治		
〔調査第二課〕			
課長	佐々木清文		
主幹兼課長補佐	中川重紀		
文化財専門員	小山内透（県教委研修派遣）	文化財調査員	林勲
〃	金子佐知子	〃	星雅之
〃	濱田宏	〃	西澤正晴
〃	羽柴直人	〃	丸山直美
文化財調査員	吉田充	〃	村木敬
〃	阿部憲幸	〃	福烏正和
〃	早坂淳	〃	北村忠昭
〃	小松則也	〃	須原拓
〃	窓岩伸吾	〃	川又普
〃	亀澤盛行	〃	中村絵美
〃	鈴木裕明	期限付調査員	小針大志（6月退職）
〃	新妻伸也		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第466集

和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成16年12月15日
発行　平成16年12月24日

発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　(019) 638-9001・9002
ＦＡＸ　(019) 638-8563
印刷　第一印刷有限会社
〒020-0122　盛岡市みたけ四丁目6-40
電　話　(019) 646-6001
ＦＡＸ　(019) 646-4000

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004